

漂民は、右異人と同居し、歸國のみを待ち居たるが、唐人入り來りて、何やらん文字を書きて見せけれども通せず、然るに、又々他へ送る由にて、十二月廿五日唐船に乗組ませて同所を出帆し、當卯年正月廿一日キャラバアといふに着せり、此所にて唐人六人乗來れる小舟に乘移らせ、一里半ほど川上に乗廻し、同じ名のキャラバアに上陸、酒を商ふ唐人宅の二階に差置かれ、米の飯芋牛豕又は海老このしる鱒などの鹽焼又は焼たるを給せられ、折々は焼酒をも振舞はれたり。

この咬啗吧は、土地の様子一體に手廣く、唐人阿蘭陀人入交りて住居するらしく、見通しつき兼る程家屋建續き、重立たる者の大家にも、堀圍等は無し、當所は、都て堀井戸無く、濁りたる川水を汲み來りて器に澄ましおきて用ふ、鳥獸は雞豕は家々に飼ひあれども牛は見かけず、馬に車を牽かせて晝夜とも之に乗り歩くもの多し、この地寺あり、本尊は彌陀のやうに見掛けたれども、堂の外より窺きたるに過ぎざれば定かならず、唐人は、家々に觀音の畫像を掲げ、朝夕香を焚きて拜する如し、氣候は暖

にて、正月比裕を着用する程なり。

幸なるかな、前年日本に渡りたることありとて、日本詞を能くするコシツといふ阿蘭陀人有り、當年、日本に渡る船有る筈なれば、百日程待たば、右の船に乗せて送り還すべしと言ひて呉れければ、一同漸く安堵せり、然るに、この比より、文右衛門は小瘡を發し、和左藏は瘡病を煩ひ、尙又四月中旬より吟藏氣分勝れず、食事全く通せず、嘉三郎貞五郎惣治郎も亦引續きて腫氣瘡病等に罹る、宿の主に頼み、醫者に見て貰ひ、水藥を受けて養生に手を盡したれども、病勢は重る一方にて、船頭吟藏水主文右衛門は同月廿九日に死亡せり、唐人に頼みて、死體を長き棺に納め、唐人の手にて葬事を濟ませたり。

歸國の喜びと五人の死亡

同五月十日頃、コシツ入り來り、日本渡海の船相廻りたれば、近日乗船致すべしと

いふにぞ、永々世話になりたる禮を述べ、同十五日六人乗組、同十九日出帆す、然るに、晝夜帆走中、貞五郎嘉三次惣次郎の三人、引續き船中にて死亡す、善松もキヤラバア乗船の際より瘡を病み、多少快方には向ひたれども、耳少しも通せざりければ、松次郎代りて阿蘭陀人とも商議の上、三人の死體は、海中に水葬せり、かくて六月十日漸く長崎港に着きたるが、和左藏は、船中にて病勢進み、惜む可し着船當日、まだ日本の土を踏まずして又病歿せり、僅二ヶ月ばかりの間に、此く六人まで死亡せしは、風土の惡氣に感せし爲めか、氣の毒といふも餘りあることなり。

善松松次郎兩人、奉行所の吟味中揚り屋に差置かれしが、如何したりけん、松次郎は、取り留なきことを口走るやうになり、同廿一日夜、揚り屋内にて縊死を遂げたり、これ全く、永く望める日本の土を踏みながら、奉行所の取調べに、あたらず月目を空費してはかぐしからぬを思ひつめ、全く亂心したるものなるべし、善松は幸に官の醫療を受けし效にや、病氣は追々軽く、耳も本復して常體に復したれば、本國出

船各地漂泊中の吟味、殊に、異國逗留中、切支丹宗門の勸めに逢ひたることなきや、武具類を積乗らざりしや、金銀を所持せざりしや、商賣がましき事は致さざりしか、往來切手並に札守等所持いたせし哉等の取調に逢ひ、いよ構へなしと認められ、數ヶ月の後始めて自由の身となりて藩地に歸りけり。

將來品の目録

善松並に異國又は船中或は長崎にて死失いたしむ者共所持之分共、此度持戻りし品々覺

- | | | | |
|----------------|--------------|-------|----|
| 一 銀壹貫百貳拾五匁五分五厘 | 一 金貳兩壹步 | 一 貳朱判 | 八ツ |
| 一 和錢八匁六百七拾文 | 一 浦賀御切手 壹通 | 一 船切手 | 貳通 |
| 一 船印旗 一 | 一 稻若丸額 一 | 一 伊勢祓 | 三 |
| 一 守札 一括 | 一 藝州通札銀札三十三枚 | 一 帳面 | 一册 |
| 一 書付 一括 | 一 剃刀 一挺 | 一 砥 | 一挺 |

- 一木櫛 三枚
- 一箱 壹
- 一毛拔 一
- 一庖丁 一本
- 一同肌着 二
- 一同夜着 二
- 一同風呂敷 三
- 一同袋 四
- 一青梅縞袴羽織 一
- 一縮緬帛紗 一
- 一皮胴亂 二
- 一方針 一
- 一珠數 貳連
- 一小刀 一本
- 一木綿々入 八
- 一同袴羽織 四
- 一同蒲團 二
- 一同引解裏 二
- 一同股引 一
- 一同肌着 一
- 一同錢入 一
- 一紙入 四
- 一針 五本
- 一鍬 二挺
- 一柳籠裏 四
- 一同袴 八
- 一同はん天 一
- 一同胸當 一
- 一同單帶 一筋
- 一同帶 二筋
- 一吳羅帶 二筋
- 一手ぬき 一
- 一たばこ入 一
- 一旗印圖 一枚
- 一横文字 一枚

異國にて貰物品々之覺

右はワヘエメレケン船にて貰ヤル

- 一唐錢 三百三十八文
- 一阿蘭陀鉄 貳挺
- 一木綿肌着 一枚
- 一布帶 一筋
- 一真鍮ぼたん 一
- 一銀錢 壹文
- 一木箸 一膳
- 一同手拭 一
- 一はあか 二本
- 一箱 一
- 一銅錢 壹文
- 一船の繪圖 一枚
- 一同股引 一
- 一根付 一
- 一皮袋 一

右はワヘエメレケンマカヲテレマンキヤラバアにて私共を見物に参りし異國人共より貰ヤル

右書面之通御改受ひ處相違無御座し、尤右之品々御取上げ被遊、追て可被及御沙汰し旨被仰渡奉畏以上

文化四年卯八月六日

善松

督乗丸船長日記

編者いふ、督乗丸一行が、人にも船にも逢はずして、大洋上に漂去漂來するこ
と十七ヶ月、其の辛酸しんさん時日の長き、前後例無き記録きろくを留むるものと謂ふ可し、
本日記は、本文はし書に詳なる如く、藍水池田寛親らんすいのが、親しく船長重吉あに會
ひ、殊に悲談酸話ひたんさんわに重きをおきて其體驗たいけんを語らせ、之を筆述せしものなれば、
最も詳明を極む、全集（七九五頁）に、督乗丸魯國漂流記を收めたれども、彼
れは、重吉が、エドロフにての口書に過ぎざれば、重出を顧みず本日記を收め
し所以なり、兩者参照して相益する所有り。
註文は、もと細字にて割書きし、又は二字下りなり、今改めて之を括弧内に收
め、又は二字下りにして本文と同大字を用ふ。

大槻氏文庫本船長日記を参照して、烏烏焉馬の差誤さごを正すことを得たり。

上之卷、船長日記のはし書

近きころ、我國の船子どもの、あやしき人の國にたゞよひゆきて、さまざまのから
きめを見つゞも、又身はつゞがなく幸に歸り來りたるものも少なからず、其人々の見
聞き來れる事を書き集めたるふみども、はたかれこれ世にひろく傳はりたるを、そは
あやしくめづらしき事をむねとして書たるふみのみぞ多かる、年月住なれつる世界を
はなれて、さしもいみじきあら海の、いとおどろ／＼しき波風にたゞよひ行程、おそ
ろしさいかばかりなると思ひやらるゝのみにて、さるうきめ見る時の有様を、くはし
く書たるものゝ無きをあかず思ひて過ぬるに、ことし三河國にもものしてありけるほ
ご、尾張國の船人重吉といふ者に出あひたり、さるは過し年、伊豆國の子浦といふ所
にて、いみじき浪風にあひて楫も折られ帆柱をさへ切捨て、あらぬ所へ吹き流され行

て、一とせあまり五月が程、いつくとも知らぬ大海の沖にたゞよひゐて、からうじて人の國の船に助けられ、遠き國々をめぐりて、五とせを経て故郷に歸來りける、其年月のうきめつふくとかたり聞せけるを聞つるに、かのあやしきめづらかなる事どもは、大かたこゝらのふみにしるせるさまにて、こよなくめづらしと思ふふしもあらさんなるを、十七ヶ月といふ間、いづくとも知らぬ大洋にたゞよひうき居たる程の苦しき悲しさ、たどらへなきありさまは、今聞てだに心もきもつふるやうになん覺ゆる、抑おほかたの世に、我身の有さまに似たるさまの事を書たるをよみ見てたに、世には我ごとくうき身のたぐひも有りけりとやうに思ひて、心のなぐさむわざなるを、まして吹流され漂へりし人などの有様をくわしく書たるを見ては、世にはかゝるいみじきめを見たるも有けりと思はゞ、大かたの憂事うれしきは物の數とも思はずなりなんなぐさめ種くさどもなるべからんと、はやくよりふと思ひたる事も有けるすちなれば、重吉が漂ひたりし有さまをかたり出るまゝに、聞にまかせて殊に其かたにこゝろを入れてくわし

きくまぐ／＼までも、もらさず書きつけたるに、かくなん此一卷とはなりぬる、こは江戸に歸りたらんとき、うからやからにも見せて、かゝるいみじきめのかぎりを見たる人だにあるを、かく君の御惠にあきて飢す寒からず何ひとつたらはぬ事なくて、世にふるゝ身のかたじけなきをも、かつはふかく知らしめんとてものしつるなりけり、されど、打きゝのいそがはしさに、筆の立まよひたるどころも多く、またはきゝとりかたく打見ゆる所々もあんへかめれば、今一たび書き改めんとするに、推はかりのわたくしをいはず、ことばをもかざらず、ひたふるにたゞ子うまこなどの見やすからん事をむねとして、つたなくいやしけなる言葉もてかきつゞけたるになん。

文政五年霜月

池田寛親

附ていふ

一、この書は、いさゝかもかんがへたゞしたる所は無く、只重吉が語り出る儘に、さ

ながら書付けたるのみなれば、重吉が間違へたる事もあるべく、思ひあやまれる事もあるべし、又覺へたがへたる所もありぬべし、されば、人の國の名、はたとなへなどのたがひ所も多かるべし、重吉はイシュツパンといひけるをイスパンヤと書、カムチヤツカといひたるをカムサツカと書たるなどは、たれも聞なれたる國の名なるが故に、書き改めつれど、もとより彼の國の言葉と皇國の言葉とは、いひさまも音もいたくたがひたれば、音便にていかやうにも聞とるゝ事もあるべからん、さるかたの學びたど／＼しくて、さかしらにかうがへあらためなごせんは、中々にものそこないならんと、其外は只かれがいふまゝに書して改めたゞさず。

一、中には圖書をかゝまほしき事ども、多かれど、重吉いさゝかにても繪かく心あるものならんには、かたの如くおほよそをたにかゝせて、それをもとたてにして寫しものすべきを、無下にさる心なきものなれば、今おしはかりにしひて物せんも、いはゆる咄を繪に書くどやらんにて、いかにも圖をなしがたし、環海異聞などの畫圖は、其

道の博士たちの、かの國々のふみどもに有繪圖をこゝらつとへて、それを見せつゝ聞糺してものせられたる事にてもあるべかめれど、さる書どももたらねば、せんすべなくてやみぬ、たゞかれが持歸りたる衣服器ものなどのしたしく見たる物は、圖をなしておくに出したり。

一、重吉がいはく、今の世に蘭學者といふて、その道の文どもあまた見たる人に、己がありしやうをかたれば、そは方角たがひたり、その國には高き山なくてかなはず、そこの海には必島のなき事はあらじなごいふ人多し、かゝる人には、いなとよ、己は萬國の圖を携て、それに引合せてめぐり侍らす、おのづからめぐり行て見たる所、聞たる名ども、其儘心覺に日記にしるしたる事にて、我見聞たる所は、是にたがひたる所は侍らすとのみ答へ侍ければ、實に目に見耳に聞心に覺來たる事を、何しに蘭學者に合せてへつらひいふべからんとやうにいへり、げにひろき世界のまゝにしあれば、たとへ其道に委しき西洋の人のかんがへたゞしたるふみなりとも、必たがはずと

もいひかたかるべし、西洋の人のいふ所と、近頃世にひろまりたる佛國曆象編にいへる事は、うらうへのたがひなるを思へば、何れをかあやまりとし、何れをか正しとせん、たとひ其道を學びえたる人につきてたゞしたりとも、又それを見てあげつらふ人もあるべかんめり、されば、重吉が語り出るまゝを其儘に書し置たらんは、中々に後の考にもなるべき事もありなんかしと、一言だにもうらさず、聊もたがへず、書あらはしたるになん。

一、重吉が、故郷に歸りて後の事までも、奥に書ししたるは、重吉が、己が慾を捨て、十二人の者ごものちかひごとを、いたづらにせぬまめ心と、妻のいやしき身をもて、やむことなき上藤たにも耻つべきばかりの操とを、深く感ずる餘りになむ。

一、此書の記しさまが、世に文章などよく書て、みやびを好む人の、物よくかゝんとて記したるさまにはかゝはらず、もはら此度かく、めつらかなる物語を聞たるを、又人にも聞かせまほしく、もしくは心ある人にもとり見らるゝ事もあらんか、よき人の

目にもふれ給はんかと、思ふがあまりに、かく記になん、さるにより、此記しさま、聊も文をかざらず、古き詞に近き世の言葉もまじり、俚言も雑言も出くるまゝに筆にまかせ心に任せて、只重吉が物語のころばへに聊も違へじと勉めたるなり、見る人其心して見給へかし。

伊豆國子浦の出帆

尾張國名古屋納屋町小島屋庄右衛門船千貳百石積督乗丸船頭重吉(注、長右衛門といふが此船の船頭の通り名なり、故に箱館にての書上には、長右衛門と認出したるなり、此時船頭さゝはりありて、重吉假船頭に頼まれたるなり、重吉は同國知多郡半田村の百姓にて、宗旨は門徒宗にて、十五歳の時より船乗に成たるなり) 賄孫三郎楫取藤助、其外水主かしき都合十四人乗組、文化十年酉十月(編者いふ重吉時に歳二十九)尾州御廻米、其外諸商物積入、同國師崎(同、師崎は尾州知多半島の南端なる小

港なり)を出帆し、江戸に至、尾州の御米を納、其外積荷物賣拂、同月下旬江戸出帆、夫より伊豆國子浦に懸り居、霜月四日に子浦を出帆、尾州に赴かんと、巳の時ばかりに湊を出、丑寅の風にて、爰より遠州御前崎まで貳拾里の處、拾四里斗はせ行、夜に入、次第に雨風烈敷なりければ、帆を下んとて、水主等立さはぐ紛れに、水主のうち名古屋矢場要吉といふもの、あやまつて海中へ落けるが、暗夜といひ船は、せ行ことなれば、助るに力なく、見ころしにしたり。

惣して船中より人の落たる時は、海中にては知れがたき故に、筈にても板にても、有あふものを投込、それに取つかせて、夫を目印しとして、船をそこへもごし來りて尋るに、見あたる時は竿を出して取つかせ、引上る也、尋れども知れざる時は、橋船を捨置也、稀には其船に取つきて、跡にて助かる事もあれども、先は稀なる事也、されども橋船を捨れば、後のいひ譯にもなる事なれば、捨る習也、かゝるさはうもあれど、何をいふも大難風の事なれば、さるわざすべき備へ

も至らず、見ころしにして行たり。

大神宮の御圍に伺ふ

かくて、からうじて帆を下し、吹流され行に、いづくの浦とも知れず、遠州横須賀のあたりか、又はかけつかの浦か(掛塚は、天龍川の河口)更に辨へず、せんすべなく、船中一同に髪を拂ひ、伊勢太神宮へ心願をこめ、紙圍を取ければ、次第に浦々の御告あり。

惣じて異國の船は、萬國の地理にくわしく、磁石と天文とを以て、萬事をはかり知る事なるを、本朝の船乗は、左る業は知らず、何事も此紙圍を以て太神宮の神勅を伺ひて、事を斗る也、其紙圍といふは、壹升ますに米を八合程入、紙を一寸四方に切て思ふ事を書付、丸めて其上に置、さて太神宮を念じて、一萬度の御稜を其上にかざせば、丸めたる紙のうち、一つ飛びあがりて御稜へ付也、それを見

て知る事也、此告いさゝかたがふことなし、されば、日本の船の船頭は、太神宮の神託のみにて、船を乗得る也と重吉いへり、神國のかしこさ、尊ぶべきことばりなん。

其夜の丑時斗り、いらこ崎（伊良湖崎は、三州渥美半島の最西突端なり）といふ御しらせありといふより、伊せの湊までは五里なれば、皆々大に悦び、是より湊入の火を見せ給へど願ふ。

暗夜に湊に逃つきたる時、方角しれざれば、是も亦湊入の火を見せ給へど、太神宮を祈念して目をひらけば、其湊の方角に、必火二つづゝ見ゆる也、やがて磁石をあてゝ方角を定乗れば、忽火は消る也、是は常に如此なりとぞ。

酉戌の方に火見えたれば、取あへず磁石を以て方角をつなぐと、その儘風は戌亥の方へ廻り、ますくはげしく吹つたり、からうじて伊せの湊近くまで来りけるを、運あしく又跡へ吹もごさるゝに、丑寅より吹し大じけの、俄に戌亥にかはりたれば、

さからひて浪以の外高く、荒立来りて、或は大なる家の如く、或は城のやうなる大浪立さわぎ、恐しき事いはんかたなし。

帆柱を切りすて碇を引かせて流る

帆柱一本へあたる風にて、大浪の中を吹きもごされ、翌五日夜の明る頃、さいせん人を落したる御前崎のあたりまで来りぬ、此間凡五十里斗、二時の間に吹もごされたり、要吉が落たる所なれば、後日のいひわけに橋舟を捨んと皆々はいふ、重吉は、橋舟なくては、いづくの湊につきたりとも、せんすべなし、捨るはよろしからずといなみたれど、一同に捨んといひつものりける程に、止事を得ず橋舟を捨たり、さて雨はやみたれど、風猶はげし、爰より初にかゝり居たる子浦の湊へと志して力を盡す程に、子浦の湊へ凡五里ばかりになりて、沖合にて大浪の爲めに、楫を打折られたれば、船は横になりて浪を打ちむ、いづれも立騒ぎて荷打をし、櫓を切にかゝる。

楫は六尺廻りの檣木也、薩摩かしをよろしとする也、さつまがしなれば十五年斗はもつ也、外のかしは十年位也、楫柄いすの木か又檣也、扱帆柱を切る事は、兼て船中に斧を用意して置也、目通りのあたり、兩方より斧にて切るに、四分通りも切れば、たをるゝ也、たをさんと思ふ方、風下の方は少し下つ方を切、風上の方は少し上つ方を切る也、扱、たをれんとする方の、垣の上にはやはらをかひ置、ふはりと當りてはねかへり落るやうに仕かけ置て、今にたをれんと思ふ時、早く脇指を抜て、はんとうを切る也、はんとうは綱の事なり、此綱を切る事遅ければ、柱綱に引かれて、船の堅さまに倒るれば、船損ずる也。

大風大浪にもまれて足腰たゝず、一つ切ては打ころび、切らんとすれば打たをれし、五日の朝辰の刻ばかりに切はじめ、未時ばかりに、からうじて切たをしたり、かくする間にも、たびゝ大浪を打込故、あかをかへなごす。

大船のあかをかへるは、船の底に、水鏡砲といふ物のやうにこしらへ、横木を二人にてふめば、水は上へ上りて船の小口なるとゆより海へ流れ出るやうに仕かけたるものなり。

かくて、今は楫も無く帆柱も無く、橋舟もなければ、只浪風にまかせて、いづくへか漂ひ着く事もあらんかと、運に任す斗にて、心細き事はん方なし、浪風は猶はげしく、時々大浪を吹込む時は、皆々大聲をあげて念佛を唱へ、今にも水船にならんと、生たる心地は無かりけり、伊豆の方にて、助け船を出さんとすれど、何をいふにも大しけなれば、船を出さんやうもなし、汐は、沖の方へ引汐にて、船は次第に、沖へゝと流れ行、皆々車座に居て、念佛を唱ふるより外はせんすべも無し。

もとより船の上には笛をふきたれば、いと甚しき大浪は、船の上を越行故に中々よし、却つてさまでも無き大浪の、船の中程へ打込時は、垣のすき間などより、水くゞり入ゆるに、力をつくしてあかをかへねばならぬ也。

又してもゝ大なみ打込來るごとに、皆々覺へず大聲を上て念佛を唱ながら、船底

へにげ入、ひそまり居て死を待ばかり也、かくて此日も夜に入、戌時頃に、伊豆の土島と新島との間を流る、此間凡十七八丁斗もあるべし、新島の西の陰にて、凡百尋ばかりのかがす（かゞすは、芋にてなひたる太き綱なり）三筋つなぎて三百尋程にして碇をおろせども、猶底深くて届かず、碇を引きずりて流れゆく、六日の朝になりて、三宅島の前を流る、故、磨をあぐる。

三宅島は江戸より貳拾里斗りなり、まねぎとは、流れ船なる故に、助け船を出してくれよかしと知らせんが爲めに、菰又は笠などを棹の先へ付けて船の上へ立るをいふ也。

島人は是を見て、助けたくは思ふなれど、かゝる大風大波なれば、こなたの船まで寄り来る事叶はず、こなたにも橋舟なければ、強てゆく事もなりがたし、せん方なく此島も過ぎて南沖へ流れ出る、七日も猶大風止まざれば、浪を打込などする事も猶同じさま也、八日朝、戌亥の方にあたりて、日本の山にてもあらんかと、はるかに見へし

を名残にて、それよりは四方に山のはも見へず、皆々いと心細くなりて、泣より外の事なし、賄孫三郎は、四十二三歳にもなりけるが、山を見失ひてより出家になる、船頭重吉は、船の中五所へ、燈をたやさずともし置、（油は二十樽船中にあり）磁石の針を立、日記を附、凡何々の方角へ幾日流レ行ッといふを記す（船中の燈は、釣香爐などのやうに、輪にてくりくりと廻り、いかやうに船かたふきても、油のこぼれざるやうにしたるもの也）

白鳥の出現

かくて皆々いふやう、けふ幾日あけても暮れても、かゝるうき苦みにたへず、終には大魚の餌食とならんより、一同に首くくりて死なんといひ合すを、重吉とぞめていふやう、死ぬ事はいつにても死なれる事也、今までたへしのび來りたれば、今暫し、んぼうして、風の止むを待つべし、いつしか風の止まぬといふ事やはあるといひけれ

ば、いづれもげにもとて、又念佛のみにて日を送る、九日も猶大風やまず、十日は金比羅大権現の御縁日なりとて、皆々垢離を取て一心に金比羅を祈念するに、己の時斗りに、何とも知れざる白き鳥二羽飛來り、船のあたりを立舞ふ、皆々是ぞ金比羅の出現し給ふならんとて、その鳥を伏拜む、此鳥未の時頃まで船のあたりを去らず、其間は、浪風も少しは止ぬ、十一日は少し風和らぎ、十二日に至、九日めにて初めて風名残なくなざたり、何れもいたく喜び、とりくりにちいさくも楫をこしらへ、帆柱など拵る、扱、重吉思ふに、かくはるくくと南の沖へ流れ出でたれば、是より八丈島こそ心當なれ（八丈島は江戸より七十五里といへど、實は五十里ばかり也）されども、何方にも島は見へざりければ、又紙鬮をこしらへ、十二支を書付、八丈島は何方に當るといふ事をつけ知らせ給へと念じて、鬮の付たるを開き見れば、丑寅の方との御告なるに、幸ひ風は未申の方より吹ければ、やがて、彼の水主等の拵へたる帆を卷て（マキテとはアグルといふ事也）走るに、猶何方にも島は見えず、又八丈までの道法を伺

はんとて、十里より百里までの鬮を入れて取るに、四十里と出たれば、皆々大に悦び、たとひ橋舟なくとも、島近く寄らば飛あがらんとて、とりく其支度をして、今や今やと待つ所に、翌十三日夜明けて見渡せども、近きあたりに島山へ見ず、又鬮を取るに、一つも附かず、扱は程遠く行過たらんかと、又百里より百拾里貳拾里と次第に二百里迄書て伺ふに、百貳拾里と出たるは、又八拾里斗り、汐に引戻されたるにて、此所は八丈より南西へ百貳拾里へだりたる沖中なりけり、かゝる程に、又も戌亥より大風吹起りて、大浪立くる事初の如し、船中一同力を失ひ、あわてさわぐ、重吉又鬮を拵へ、此西風にて帆を卷て走らんや、又は船を横に流しておくべきかを伺ふに、流して置く可しと出ければ、帆を下して流し置く、十四日も猶大風なれば、又々一所にまどゐして念佛を唱るより外なし、十五日も大風なるに、けふは祝ひ日なり、殊に大神宮及び氏の神八幡宮の御縁日なればとて、皆々こりを取て祈念す、時に又、何とも知れざる青き鳥二羽見へたれば、すはや大神宮の出現し給ふならんと、其鳥に向ひて

深く祈念す、是も亦己の時頃より未の時頃まで、船のあたりを去らず立給ふ、其間浪風しづまる事最前の白鳥の時の如し、(此後必十日には白き鳥、十五日には青き鳥の顯れ來らざる事はなし) 皆々しんぐ肝に銘じて神の御恵みをたふとぶ。

米の始末とらん引の取設

十六日に至り、少しは風和らぎたり、重吉又圍を伺ふに、八丈島より五百里南なり、依て、重吉皆々に向ひ云やう、八丈を遠くはなれたれば、此上は容易に故郷へ歸る事はなりがたしとは覺悟せずばあしかりなんとて、來年迄の食物をはかるに、登り船なれば、わずか米は五斗入六俵ならでは無し、其内を五升用意に圍ひ置、残り十三人にわり合渡す、水も一人前に三升五合づゝならでは無し、豆は七百俵ありければ、豆をいりて粉にくだき、米を少しづゝませて食物にせんと定めたり、十七日には、水も乏しくなりたれば、重吉工夫してらん引をこしらへたり(重吉、その曉の夢、白衣の

來告給ふには、船中水乏しくなりたり、沙より水を取りて吞べし、そのとり様は、大釜に潮を汲籠て之を煮て、その上へ桶を置、上へ大鍋を俯せて、その鍋中に溜りたる液の流下るを受れば、淨水となるべしと、くわしく之を教へ給ふと見て、夢はさめたり、重吉心中甚難有、全金比羅の御告ならんと、翌早朝に垢離を取り、皆々に夢の告を語り、さて夢の教に工夫して、此水を取りけると也) 先づ大釜へ鹽水を汲込て煮立、大きな飯ひつの底へ穴をあけ、管をさし込、釜の上に覆ひ、其上へ鍋をつり下げ、件の管よりあがる湯氣、鍋の底へ當りてしたゝり落るやうに仕掛けて水を取るに、一日に七八升ばかりづゝは取れるを、十三人に割合てのむ也。

念佛と題目

かくて皆々は力を失ひ、古郷の事を思ひ、親兄弟妻子の事のみかたみに言ひくらしで、泣より外のわざなきを、重吉とても、心の内は同じ事なれども、かくては何れも

病を發し、助かるべき命も助かり難きやうにもなりなんとを悲み、心よわきけしきを少しも見せず、皆々に向ひていふやうは、明けくれ浪風に苦むさへ有を古郷を思ひ親妻子の事のみ案じ暮して泣き居ては、病を生ずべし、たとひ何方の島山に漂ひ着くとも、煩ひて身體つかれなば、助かるべき命も助かり難からん、心を邪けんを持ちて、親妻子なりとも敵也と思ふべし、かれらを養はんとてこそ、かゝるなりはひをして、か程まで苦しきうき艱難をするには有るなれ、たとひ古郷にても艱難をするとても、やゝもすれば首に繩をつくるには至らず、口すぎの出来ぬ時は、人の門に立までの事ならずやなど言ひ諭せども、皆々左は思はれ侍らすとのみ言ひて泣くを、重吉も持てあまし、げに國元にては、こゝかしこ尋ねても行へも知れざれば、來年八十八夜も過て、八丈船の出る頃、もし島々のうちには居侍らすやと、八丈船に尋ねても知れざれば、其時から茶毘をしてとふらふなるを、先づそれ迄は、よき夢を見たりとては、それを樂しひ、あしき鳥のなき聲を聞ては覺つかながり、神に佛に打交て、明け暮皆

皆の事をのみ祈り案じ暮しては居るべけれど、春は必ず南風の吹事なれ、氣を丈夫に持て煩はず、春は故郷へ吹もごされむ期を待ちて、それを力に樂み居れど、くれぐれも言ひ諭せど、左は思ひあきらめがたしと、皆々言ふことはり也、かくて日をふるまゝに、薪も盡たれば、船中にありと有る道具を、片はしより日々に打くだき、薪にするに、後には道具も盡て、船のこゝかしこを打くだき薪にするは、我身をはむ心地して心細さ言はん方なし、日々とりぐに役を定め、水を汲薪をこしらへ、豆をいりらん引をし、互に代り合てはたらく也、重吉は日記をしるし、それぐの差圖をし、皆々の氣を引立、千辛萬苦いふに言葉なし。

扱、船中一同、明け暮大浪にせめらるゝたび毎に、念佛となへ騒ぎあはてつかれて、今は氣力も衰へはてゝ、互にいひ合せ、魚の餌食とならんより、何國の浦へ打上とも、一むれの船のりとも知らるゝやうに、繩もてつなぎ合せ、首くゝらんと其用意をす、重吉は、止めたくは思へども、強てとゞめなば、やがて海へも飛こむ勢ひなれ

ば、いかにも尤也と、一たびは同意して、扱やう／＼に言ひなだめ、とやかくする程に、必白き鳥か青き鳥か顯れ來り、浪風和らぐを見ては力を得、こりを取ては伏し拜み、また死ぬといふ事もやめる心に皆々なるこそたふとけれ、此後も、今は思ひ定めて、死ぬとすれば、又彼の鳥顯はれ出ては止まり／＼する事十六度也、霜月一ばいは、此さまにて暮すに、折あしく四日の夜、雨ふりたるまゝにて、其後一度も雨ふらず、風のみふく、少し浪風和らぐ日あれば、互にかへらぬよまひことを言ひ合ては口論をし、又波風起れば、念佛となへ、閏霜月にもなりければ、皆々浪を見る事さへものうくなりて、二人三人づゝ船底へ入りては打臥やうになり行けり、されども、朝こどにはこりを取て信心のみは怠らず、かくて重吉つらく／＼思ふに、霜月の末つ方より、暑氣つよくなり來り、朝夕百萬べんをくりたらん者には、めい／＼に米水を與ふべりたるなるらん、米もなく水もなし、其上次第に暑氣強く、所詮皆々命の續くべき様はなし、此上は、せめて暫時も、故郷を思ふ迷ひをも忘れ、後の世の功德ともなさしめ

んど工夫をめぐらし、めい／＼に割渡し置たる所の米を取上、繩にて大なる珠數の形を拵へ、百萬遍を始め、朝夕百萬べんをくりたらん者には、めい／＼に米水を與ふべし、百萬遍をくらざる者には、米水ともに與ふまじと、いふ掟を定めたり、皆々氣力も衰へて、百萬遍をくる事も／＼のうけれど、命有るうちは米がたべたく侍るとて、こより二人かしこより三人出できたり、いやながらも百萬遍をくる、朝夕の念佛終れば、一人前に、米をかさに一ばい、水を茶わんに一ばいづゝあたへけり、重吉は、遠江なだにて海へ落て死たる要吉が菩提の爲めとて、一晝夜に念佛百枚づゝ書寫して、七日の間に七百枚海へ流し、三七日までかくの如くせし程に、北極もかくれ、ますますあつき所に至り、日の出てより未の時頃までは、暑さにたへず、寒中になりても、始終裸身にて、日中には櫓のあたりより上へ出る事もなりかたき所に至りたり、皆々重吉を恨みていふやう、強て念佛をすゝめ給へと、念佛は極樂のことなり、かゝるおそろしき所に來り、いつ方にも山も見へず、走り船も見へず、鳥の一羽も見へばこ

そ、只かはらぬものは日輪さまのみ也、されば日蓮大菩薩をこそ信ずべけれ、今より一同題目を唱ふべし、念佛を唱ふる者は、海へなげ入んど、皆々言ひ合せたり、是もせん方つきての迷ひやと思ひやりて、其意にまかせ、是より百萬遍をやめて、日々題目をぞとなへける、されども浪風起り來りて、又も大浪を打込、すはや今死ぬべきかと思ふ時は、皆々覺えず念佛をとなへ、あわて騒ぎ、浪風しづまれば、又題目にぞなりにける。

皆々かねて言あはせて、又も大浪打込て、今は是迄と思ふ時こそ、空しく溺れ死なんより、一思ひに首をくゝり死すべけれどて、其用意をし置たるに、此百萬べんの珠數にしたる繩は、手すれてやわらかになりたれば、首をくゝるによかんめれとて、是までの繩を取かへて、これにてとりくゝに、首をくゝる繩をもうけ、こゝかしこへ、かの繩にて輪をこしらへ、これは誰の繩、これは某のとて、つり下げ置を、何となく目につきて心細く、いふに言はれぬ心地し侍りしとぞ、扱、

是迄も、十六度、一所に首くゝらんとしたる折々も、皆々着かへなごして騒ぎけるを、跡にて思へば、着替も繩の和らかさも入らざる事よと、思ひ侍るなりと重吉いへり。

泣きながら正月の作法

かくする程に、米は盡たり、かの豆をいりてくださき、荒きなこのやうなる物のみにて、命をつなぐ也、とやかくして、大晦日になりければ、重吉皆々に言ひ渡すには、先々冬はけふ一日となりたり、春になれば、必ず南かこちの風吹く事なれば、程なく故郷へも歸るべし、目出度例の如く、しめ飾りをして、正月の作法をいとなむべしとて、船中に有り合ふ物を取集めて、松飾りの様にとりなし拵へ、鏡餅には、豆をなまながらはたき、生の豆の粉を團子にして鹽水にてゆでる、みきの代りは水なり、それぐゝに人割をして拵らへさせ、申時ばかりに、出來上りたり、扱其しめ飾りを見

て、皆々一度に泣き出す、重吉は船底に居たるに、泣きさわぐ聲を、又例の口論をやはしめけん、思ひつゝ出て見れば、皆々重吉に向ていふやう、例は松竹の小枝の折たるをだに忌みきらひ、神道清淨に祭りて、酒に酔餅に飽、富貴の人も同然なるに、此有さまをば、いかでか見るに忍び侍らん、又故郷にも、此如く例にたがひて、いと淺ましき春をぞ迎へ給ふらんとて、一同聲を惜まず泣まるふ、重吉いふには、さのみ歎くはおろか也、春は必ず順風吹て、めで度故郷へ歸るべき春の初めなれば、元日にはかまへて泣事あるべからずといひければ、皆々又いふやう、故郷ならましかば、いかめしき雑煮をも祝ふべきに、其まねごとだにならぬ春を待ち得る事にてあれば、いかでか泣かすにはゐられ侍らんといいひなげく、重吉又いふ、それこそ兼て用意あれ、あす一日は豆をやめ、圍ひ置たる米のうちを、二升粥にして、元日一日は米にてくらすべし、是來年は米を食ふべき國に歸る吉兆なりといふを聞て、元日は、米のみをたべる事ならば、それこそ嬉しう侍れとて、やう／＼なげきを止めけり。

惣じて船乗の元日の作法は、いかめしき事なり、故郷にありても、何國の湊にありても、同じ事也、先づ元朝寅時斗りに、船中一面に燈を掲げ、船頭は、絹つむぎやうの衣服羽織を着て、座敷に座す、楫取はかちを取る所に座す、賄は水主を引連れて表へ出て、(表とは船のへの方なり)あきの方に向て、聲を上げて、ともようござるかといへば、楫取おゝ引と答ふ、表にてまかなひやんさい／＼やんさいと三たび言へば、水主一同に又やんさい／＼と三度いふ、(やんさいとは繩をくる事なり)又賄、どうり梶といふ時、楫取をゝ引と答、又やんざへやんざへ／＼を三度づゝ云、又取楫といふ時、又答、如斯する事三度、扱、今の楫よういといふ時、大勢一同に、やんさいのうんと言ひて船をごとと叩き、皆々一同に、結構なる天氣にていと、互に云ふて喜びを盡す、其間にかしき(かしきは飯たき也)雑煮を拵へ置、皆々下へおりて手水を遣ひ、神拜をし、扱船頭へ向祝儀をいふ、それより一同並居て吸物膳出る、船頭より盃を始めて、順に末座へ廻

す、末座の人重ねて飲、それより登りといひて、又次第の上座へ杯をのぼす也、扱雑煮出、一同に祝ひ終りて陸へ上り、神參りに行、皆々船へ歸れば、祝ひの本膳出る、終て年始の禮に出かける也、橋舟に乗て、船より船へ行なり、物もうと云ふ時、容易に答へず、二聲三聲聞てたうれと答へ、水主かゝしきかの中出迎ふ時、何州何郡何の誰船々頭某年頭のお禮やますと詞を改め、いかめしく言へば、取次の者答へて言ふに、此船には金銀山の如く、酒は何々といふ名酒數千樽も有など、其外種々様々の事を大そうに言ひ立て、先々御通りあれといふ時、永日ゆる／＼乗らうといひて別れる也、此應對いたく改りて、詞をとり繕ひ言ふことなれば、いとをこがましき事にて、年若きかしきなどに、冬より習はしめ置く事也とぞ、かゝるいかめしき作法の有る事故、皆々其事を思ひ出て、今かく淺ましき有さまを歎く也。

さて、文化十一年戊正月元日になりければ、寅時斗りに、皆々羽織を着て表へ出る、下には船頭重吉と炊ばかり也、重吉つらく思ふやう、今表にての作法終りて下り來り、目出度杯ことをするも水盃也、水盃をする事は、不吉の時のことにこそあれ、扱、故郷にても、生たるか死たるかも知れぬ歎の中の事なれば、誰ありて年始の祝儀に來る者も有るまじなど、心中に思ふも、皆々同じ心なるべし、表にては、一同例の作法のまねをして、下へおり來り、重吉に向ひ、祝儀を言はんにも言葉出ず、涙をかくすばかり也、扱、皆々膳に向ひて、かの水盃を始めけるに、末座の人まで廻りて杯をとると等しく、はつと泣出せば、今までこらへ忍びたる皆々の者共、今はたへかね、一度に聲をあげてなくを、重吉わざと言葉を荒らげ、何れも昨日の約束を忘れたるか、船下りて登らんとての此苦みにはあらずや、盃下りて上らざるは不吉なり、うとふ事をやめて（うとふとは泣くといふことをいみて言ふ詞也）盃を上すべしといひければ、止事を得ず、盃をのぼす、さて雑煮の出つべき所へ、かゆ出ければ、さしもきのふまで、米をくふ事をたのしみしも、今雑煮の代りに出たる粥を見て、皆

皆心の中に様々の思ひあれば、一人も面を合せてたべる者はなく、二もりづゝたべるなるを、早き者はたべたるも有り、遅き者は、まだ一もりもたべ終らず、又なき出せば、又皆々も泣くを見て、重吉も今はたへ兼ねて、表へ出てひそかに泣きたり、かくて、つらく思ふに、此有り様にては、いづれも泣き死ぬべし、氣をなぐさめんと工夫をして、下へおり來り、皆々に向ひいふには、浦賀の御判物と、尾州の御船印さへ持て有らふものならば、何國の浦へ着たりとも、困る事はなき事なれば、いらぬものなり、今金二三十兩は有るべし、錢も七八把あり、常には、何れも、我等にかくし忍びて博奕をすき好む事なるを、今は免して此金錢を皆々に與ふべし、心に任せて勝負事をいたすべしと言ひわたし、金錢を出し與へければ、一同是を見て却て腹立恨みていふやう、左程金錢を持て居ながらも、水一杯を買ひとゝのふる事だにならぬにては侍らずや、勝負に勝ちて何かせん、それはしやばにての事にこそあれとて、皆々恨み顔にて、誰一人始めんとする者もなし、今は重吉もせんすべなく、皆々も心の中に様

様の憂を抱き、泣き悲みてぞ日を送りける、かくて正月の末になりて、皆々に言ひ合せ、此船中に十四人乗のうち、一人はとく死したり、今生残る面々も、誰死ぬか生るかとは斗りがたし、誰にもせよ、いき残りて故郷に還る者あらば、此の船中にて死したる者の爲めに、人の門に立惠みを乞、あるは寒念佛を唱へありきてなりとも、奉加をし、江戸回向院にある如く、大なる石碑を建立して、長く菩提をとふらはんとぞ誓ひける。

病者死者相づく

かくて猶も同じ様にて日を送るに、三月比より、人々次第に病人になり來り、皆々黒くなりて、惣身はれなやむ、重吉も、やゝもすれば、手足などへ、一皮下に、黒き血の通ふを見ては、髪そりをもて、そこをたちわり、黒き血をしぼり出し、らん引を取たる跡の鹽のにがりの湯に浴すれば、其たちわりたる所へ、鹽湯しみ渡り、初めは

たへかぬれど、後には覺えもなくなるやうにて、其いたみ言語にのべ難し、されども、かくせざれば、其くろき血、手足をくゝりありき、腹中へ入れば、やがて惣身黒くはれ来るを、重吉はかやうに手當てをしたる故、終に病を更けざりしが、残り十二人の者共は、ことごとく煩ひ臥して、重吉一人になりたり、今までは、十三人にて割合てはたらきしを、一人にて水を汲、薪をこしらへ、らん引をし、豆をいり、扱十二人の看病をし、手足もつゞかず堪かねしが、三日めには、殆どつかれはて、是は所詮一人にてつゞくべきわざには非ず、殊に親兄弟にてもなし、中には伊豆などの他國の人さへ有るものを、かく他人の爲めに身を苦しむるもよし無き事なりと思ひて、よろづ打すて、佛の前へ來りふしたるに、又つゞくと思ひかへして見れば、さるにても、如何なる因縁にか、かく他人と同船して、かゝるうき目を見る事も、前の世の業因にこそあるらめ、前の世にてこの人々に、いかなる深き恩をか受け、ん、さればこそ今我一人にてこの人々の看病すべき道理にむくひ來るものならめ、然れば親兄弟にもか

へて、いかにも大切にしてお大恩を報すべき事なりと了簡をきめて見たれば、又寢て居られぬやうに覺へて、又のあしたは、くはらりと心持かはり、豆をいる間には、薪をこしらへ、らん引の間に水を汲、其間には病人をかいはうすれども、いさゝか苦にならず、精を出して一人働きて皆々の看病をす、されば人間は心の持ちやうにて、たのしくも苦しくもある事よと、我ながら觀念したりとぞ。

かくて日を経るまゝに、次第に病は重り來る、三月なかば比に至りて、米はまだ三升残し置たる事を、皆々知て居る事なれば、米をくはざる故に、かゝる大病をも受けたるならん、人參と思ひてくはせてたべと、言ひ出けるを、もとより割渡し置たる米なれば、否と言はれず、かゆに煮て一人に食はせければ、我もくゝと乞ふ故に、日々にたべさせて、十日のうちに、米は残りなく食ひ盡したり、されど少しも病はいえず、四月の末に至りて、我を忘れたる病人なども次第に出來て、親妻子兄弟などの名を呼て、煮ぬきこしらへてたべ、西瓜をくはせてたべ、素麵をたべなど、とりくゝに

言ひの、しりて、重吉一人せめらるゝを、水を持行て、それ煮ぬき也、それ西瓜也といひてあたふれば、まだべたし〜とせむれども、其水さへ割合あれば、一人に二はい與ふれば、一人たべぬ人の出来る事故、不便とは思ひながら、二はいと與ふる事だにならず、いたましく悲しき事限りなし、さまざまの食を乞ふ中にも、煮ぬきを煮ぬきをといふ事の多きは、よく〜常に、米のたべたし〜と思ひつめたる故ならんと、あはれさ墓な言はん方なし、されども、十日と十五日には、必ず白き鳥と青き鳥の船のほとりに來るにぞ、いまだ神は見すて給はぬよと、そのみ力に思ふばかり也、かくて五月の八日になりければ、水主尾州半田村の七兵衛死したり、重吉思ふに、死がいを海に打込なば、残る病人のそれを見て、我々も死したらば、あの様なるかと、力を落さんと思ひて、我が居る座敷の次の間一ノ間の板敷に其まゝ置たり、又十六日に、半田村の楯取藤助死す、廿八日に同じ村の者にてかき房次郎十六歳にて死す、六月十二日に又同じ村の水主庄兵衛死し、同じ日に伊豆の子浦の水主福松死

し、十三日に、半田村 賄さきに日本の山を見失ひて出家になりたる孫三郎死す、十六日に水主乙川村爲吉死し、十八日に伊豆柿崎の三之助死す、廿日に同じ國田子村の重藏死し、廿八日に子浦の安兵衛死す、五月八日より六月廿八日までに、十人死したり。水主伊豆の音吉龜崎の半兵衛二人は、猶船底にうなり居る、かく引つゞき死果て、今は三人になりたれば、いとゞ心細く、今に我々も死ぬか〜と待こゝちのみぞする、重吉は、残る二人の者に、恩を送りはたさては、死なれぬ事と思ひ、あきらめて、猶も看病おこたらず、されども、今まで十三人の介抱を一人にてしたりしに、今は三人になりたれば、水も一日おきに汲み、薪も折々拵へなごして、大にらくになりたり、かくて八月になりければ、朔日二日打つゞき大雨ふる。

去年の霜月四日の夜、遠江なだにて降りたる後、一度も雨無かりしに、十一ヶ月めにて初めて雨にあひたり、其間は、雪もなく霧も無く、日々晴天のみなりしは、かゝる大洋の中なれば、いつ方の島山へも、いと程遠き事なれば、雪霧も及

ばぬを、今雨の降り出したるは、國に近くなりたる故なるべし。

生鯉の奇効

重吉大に喜び、鍋釜を始め、何によれかによれ、水を受くべき物のかぎり並べたて、あくまで水を貯はへたれば、まづ一安堵なしたりける、扱、三日の朝例の如く垢離を取りに出たれば、海の中かはくとなるを聞に、いまだ夜明けざればくらし、大かた魚ならんと思ひて、ばけをなげ入れたるに、(ばけは牛の角にて、いはしの形に作り、尾の方を河豚の皮にて包み、その中へ鉤を付けて鯉を釣る釣ばりなり)忽ちとられたり、いよく魚なんめりと思ひて、再びばけを投入れたるに、今度は釣上たるに、一尺ばかりの鯉なり、うれしさたとへん方なく、此所は高き所故、煙窓より下へ投下し置、舢の方へ行て七本釣りたれば、たづさへて下へ行見れば、さきに煙窓より投下したる鯉は、骨ばかりになりてあり、是はね廻る所を、二人の病人見付けて、

夢の心地して這ひ出、其ま、一口くひ二口食ひして、覺へず骨斗りに食盡したるなりけり、重吉を見て、この魚はそなたのたまはりたるか、神の興へ給ふかは知らざれども、はね廻るを見ると其ま、覺へずかくまで食盡したり、許してたべと言ひけるを、重吉、いや、それは苦しからず、是見よとて、かの七本の鯉を見せければ、二人は覺へず拜みけり、扱、一切づ、神々に初ほを備へ、煮るをもまたれず、切ては鹽水につけてたべ、三人にて四本食ひ盡し、あらをば、鹽水に雨水をさして煮て食ふに、其味ひ、甘露とも何ともたふべきものこそなかりける、是よりして、日夜さまぐの魚とれければ、三人はよる晝魚のみを食する故、病人も俄に元氣を増し來り、八月の廿日頃には、二人とも魚を釣りに出るやうになりたり、互によるこび、日々魚を釣る、暑氣強き故、釣と其ま、食せざれば、少しの間にも忽ちくさる、しびと鯉と、うやくといふ魚のみ目なれたる形にて、其外は何とも知れぬ魚ばかり也、たまぐふぐを釣り上げたりとてよく見れば、形は似て總身鱗ありなごして、怪しき魚のみ多かり

しどぞ、かくて二人、重吉に向ひていふやう、そなたの恵みにてかく命を助かりたり、今は何事も我等に打まかせて、御身は樂をしさうらへなごいへば、今は雨も折々ふれば、水は澤山なり、魚は多し、只折々あかをかへとる斗り也。

大鰐鮫釣の壯觀

扱、かくて日を経る程に、船の外を見れば、一丈五六尺より二丈許の鰐鮫四本、船につき居たり、是は、年月海中に漂ひ居る船なれば、四方へ苔のやうなる物、深く付たる中に、さまざまの蟲の生したるを食はんとて、多くの魚のより集るを、又其魚をばまんとて、鰐の付き居たるなりけり、重吉思ふに、今もしあやまつて船より落ちても、橋船は無し、あのわに、呑まれては、腹立なりと思へば、鬼のまちかけて居るやうなる、心地して、何となく安からず、大なる棹にてつゝきて見れども、ことゝもせず、船中に有合たる四貫目斗もある油かすを投げ付けば、忽ち吞て仕舞ひければ、今

はせんすべなく、さまざまに念じて思ひ付、しびを釣て二つ切にして、其腹の中へ大釘を押まげて、さまざまの鉤針をこしらへたるを、幾本もしかと結び付け、もとへは平苧を付けて、それへ大つなを結びそへ、なげ下しければ、たちまち呑こむと、其ままかの大綱を、三人にて帆柱を巻く車知にてまけば、水際を二三尺も引上りたり、大きな口をあきて居る所へ、鹽水を大釜にて煮立て、荷ひにて持來り、かの鰐の口へ船の上よりつぎこめば、鰐大に苦みて、躍り騒ぐ勢ひに、綱切るか、鰐のゑぎ（あぎと）切るゝかして、いづくともなく逃げ去りぬ、五日程のうちに、かくしつゝ、四本ながら追散らしたり、船は次第に流れて、所もかはる故、先は一安心なり、この程は、二人の者もすこやかになり、何の憂も無ければ、此鰐をせむるなど、少しは慰みの心持なり。

水葬の慘話

かくて九月の末に至り、二人の者重吉にいふやう、雨といひ魚といひ、か程に思ひ
 たらひたる時もあるを、十二人の者共は、よくく神佛に悪まれたる者ならん、其死
 骸を岡に葬りてやらんといひ給ひて、あの如く汚れたるもの、船中に有る故に、い
 づくの島山へもつかずして、目をふる事と覺えたれば、今は海の中へ捨てぬへといふ、
 重吉答へには、それもさる事ながら、又海の中へ捨てたらん時、龍宮をけがしたるた
 たりにて、浪風荒れて水船となりなば、三人諸共に溺れ死すべし、いづれに定めてよ
 かるべきか、闇を取て定むべしとて、伺ひければ、海へ捨てしと出たり、これにより
 て、重吉、十人の死骸に向ひ、生る人に言ふ如く、扱、汝等、今は佛なればよく聞わ
 くべし、かゝる汚れたる物を、猶船中に置く事は、若いづくにもあれ、岡へつく事も
 有るならば、其時葬り遣はすべき爲めなり、然るに、捨てしとの御闇出たれば、今は
 力なく海中へ捨るなり、されども、今までかくて置たる事にしあれば、さるにても、
 汝ら岡へ葬られたく思ふならば、夢に來りて其由をつげよ、今一ヶ月待ちて、十月廿

七日の夜までに、其事なくば、御闇の教へに従ひて、海中へ捨てしと言ひきかせ、扱
 夢の告げもやあると待けるに、十月廿八日まで、さる夢も見ざりければ、廿八日夕
 の入を待て、十人の死がい捨る也、三人の者は、捨てしも惜しからぬ襦袢を着て、
 いただき抱て捨てんと立よりけるに、凡半年斗りの程、暑中に板の上に、赤はだかにし
 て、並べ置たる事にしあれば、一たびはくさりて、重吉が居間の臭氣たへがたかりし
 を、後には其の肉も干かたまり、今は、頭はされかうべとなり、手をつくる所々、は
 らくどくだけで、いただき上る事なりがたければ、土をはこぶやうにして、悉く海
 へ捨てたり、ならべ置板の間、厚さ二寸の松板くち通りたりとぞ、かくて、三人の服
 も、朽たる板も海へ捨て、跡を清淨に清めたり、かくもしたらば、助船や出む、何國
 へか流れつくべきかとてせしわざなりけり。

重吉が船、此節赤道前後に在る故に、煖きことたへがたく、是迄も、日中には船
 ぞこえ入りて水を浴いたりとなむ、表の方は、櫓の邊へ出る事なりがたし、かゝ

る炎熱の洋中、後考ふれば、南北アメリカの西洋中にて、赤道下に漂ひたりけり、かゝる極熱の洋中、雨數日ふる事も無かりける故、追々死たる人々も、初は生干にて、臭氣甚しかりけるも、干物となりミイラの如く干堅まりてありしが、一日の大雨にあたり濕ひたれば、かやうに崩れけるなり。

ミイラといふもの、あとにて聞きしに、拂郎察の内島内にて、死たる人を砂中に埋む、數日經て掘穿ち見れば、熱國なる故、砂焦付て全體悉く枯木の如くなる、其五體の備はり損なはずして全きものを、佛果を得たりと悦、五體の内損じたるものは、罪科のがれがたきなりといふて、追善供養を厚くするとなり、その砂中に焦付たるものを、竊に穿出し、他國に商ひてミイラといふ、かゝる赤道下の熱國の地も、日の近きうちは、晝夜等分なれば、夜は日本などの如き短夜と違ひて、夜長き内に、地上の炎氣大抵醒て、日本の暑中の如く、夜晝通し熱き様にてはなし、しかれども、太陽頭上を南北渡り行、渡り返り、一年に二度の夏ある地な

れば、其地馴ざる者は、異病生じて死に至る、況や重吉の船、食品乏しく豆のみを食ふ故、かゝる奇病を生せしことはことほり也、されば鯉を得て食せし内に、病愈て釣に出たれど、魚類失ひたるなれば、又元の如くに煩ひける也。

扱死骸をすて、七日斗りも經て、霜月の五日六日比、又も鰐ざめ、今度は凡四十疋斗、船の外へむれ來り、船の蟲につきたる魚を、悉く追ちらし、鰐も諸共に、いづくへか追行たり、此後は、釣をすれども、小魚一疋もかゝらずなりにたれば、又もとの豆の粉斗りとなりにけるこそかなしけれ、二人の者、大に力を失ひ、霜月廿日比に至り、又二人共に病人になりければ、又も重吉一人となりにけり、かくて、重吉神々へ大願を起し、あながち故郷へ歸りたしとは侍らず、いづくにても日本の地に着くまでは、我一人命を助けてたびへ、是私の欲に非ず大勢の爲め也と、深く信心を起しけり、扱程なく二年めの大晦日來りぬ、去年は、しめ飾りの形をだにせしも、其人さへ多くは死はて、殘る二人は病人になり、さすがの重吉も、今は氣もつき心も弱

り、一人残りたるも因果なり、助る事もならず、又神々を頼み奉る、けにや死もせず、よしさらば今迄頼みをかけし神々に願はたしをして、死を極めんと思ひ切、是迄立願せし神々へ、三遍づ、垢離を取て、是を願はたしとし、扱もろくの佛像、日々に記せし日記など取あつめ、一つに包みからげて、首く、らんと覺悟極めて心のうちは、なくより外の事ぞなき。

二度目の正月、決死の御鬮

とや角する程に夜も明々行きて、文化十二年亥正月元日となりければ、又思案かはり來り、今まで様々の御鬮を伺ひしに、終に命ざかひの御鬮はとらず、其鬮を取ての上、いよ／＼死を極めんと思ひ付きたるは、かくまで思ひ定めても、猶心の底には、さるにてもまだ運命つきず、助かる筋もあらんかとの迷ひなり、捨がたきは人の命ぞかし、かくて御鬮にかゝりけるに、米は元より一粒もなし、きなこの糟を升に入れ、

紙を切て、鬮を書にも、是迄取りし鬮とは違ひ、我命の境ひなれば、筆も取られず、目も見えず、やう／＼一二三と三枚書程の心の中のかなしき何にたとへんやうもなし、命あらば二をさづけ給へ、一三と出たらば、水船になるを待て死すべしと誓ひ、例の作法に行へば、やがて三枚の中、一枚付きは付きたれど、開き見ん事のおそろしく、手はふるひて取も取られず、涙にくれて目も見えず、胸は轟く斗り也、かくて暫しは泣き居たるが、何みれんなるわが迷ひと明らめ、たけき心を思ひおこし、無二無三に押し開き見れば、こは忝けなや、二と出たり、其時の嬉しさ又たとふべきかたもなし、やがて表へかけ出こりを取り、又神々へ大願を起し、たとひ命ありても、ことし一年は所詮たもたず、何月頃には助かり侍らんやと、紙鬮正月より十二月迄書て伺ひしに、正月二月二つ付たり、又夜もある事にし侍れば、覺悟すべし、日を知らしめ給へとて、正月二月六十日の鬮を取るに、正月廿七日正月廿八日と二つ付きければ、最早僅かの辛抱なりと先喜び、扱又何方に山を見付侍らんやと、方角の鬮を取りけ

れば、丑寅の方と出る、それより船の表に小屋をかけ、其内に居て磁石をたて、日々丑寅の方をのみ眺めてくらす、風は西或は北なり、まづ風筋もよし、されど正月なるに、暑氣は六月土用中の如くにて、凌ぎかねたり、十日と十五日に、例の鳥の來り舞ふ事同じ様なり、其度毎にこりを取て、その鳥を拜む、かくて廿六日の夕つ方、丑寅の方にあたりて山のやうに遙に見ゆれど、山か雲かさたかには分ちがたし、是迄も、山かと思へば雲になりて、あくる日は形もかはり、又は消えうせし事度々なれば、今見ゆる山の形を有あふけし炭もて板へ書つけ置たり、扱廿七日期日の光に見やれば、疑もなき山なりければ、大に悦び、御圍にも、正月廿七八日と出し事なれば、いと忝けなくて、やがて二人の者にも言ひ聞さんと思ひしが、中々に早腰をぬかしては悪しかりなんと、一人色々用意をぞしける、然るに晩方より、北風に變りて、風筋あしくなりたれば、心をなやまし居たるに、廿八日の曉寅の時斗りに、又西風にかはり、船くるりと向きかはりたり、夜明て見れば、二十町ばかり隔てりてぞ國見ゆる、あら

嬉しやとよく見やれば、あの谷あひには家も有らんなと思ふまで、いと程近く見渡さるゝに、心はやたけに思へども、橋舟無ければせん方なく、磨を上ぐるに人も出でこず（このわたり、見馴れぬ鳥の多く居るは、嶋近き故なるべし）かくて船の向き變りたれば、次第に又跡へくと流れ退きて、日々にかの國に遠ざかるを、二月七日の午の時ばかりまでは、薄々と山の形も見えたれど、其日の夕より、それかと思ふ山の面影だに更に見えずぞなりにける、（此所は、あとにて聞けば、アメリカの中にて人の住はぬ島なりとぞ）扱は今こそ頼む便りもつき果てたりと、氣もくじけ、船の介抱もやめ、ふてり心になりて、神佛の前に來りて打たをれ、いねんとすれど、いとね入られず、稍有て又思ひかへして見れば、正月廿七八日と、神の示し給ふにたがはず、神の御恵みにて、三年めにて島山は見たれど、あの島は人無き所か、又は異國には、人間を食ふ島なども有りと聞けば、さる恐ろしき所にて有るかも知れず、とに角に人の國に近よりたるに違ひは無し、又御圍にも、月は正二月と出てたれば、先々二月中

を試みんと心を取直し、又かの小屋の内へ行て、丑寅の方を望み居る事日々なり。

船玉の船を去ること

かくて、同じ月の十三日の暮れ方、北風少し吹てなきたる空なるに、戌の時ばかりになりて、頻に眠を催し、打ころぶ斗りにねむくなり來るよと思ふ程に、誰とも知らず人二人來り、重吉がうしろに立を見れば、二人ともに綺麗なる僧にて、装束は白きひたたれの様の物を着、烏帽子を冠り給へり、重吉に示しての給ふには、國より助け船出づ可し、其船に、必せきこみて乗るべからずと告給ふと見て夢覺たり、重吉不審に思ひ、いろ／＼考見て、是は船玉の去り給ふならんかと、力を落し打なげく程に、ともし火二つ消えたり（燈火は五所づゝ常にともし置たれば、十七ヶ月の間に、油十五樽ともしたりとぞ）塗水も少し入りたり、今宵船玉に別れぬる事かと、心細く思ひながら、先づあかを取る。

船玉の去といふ事は、惣して船玉とは、船のぬし也、帆柱を立る筒の下へ納め置く事也、紙籬一對、其船主の妻の髪かみの毛少し、双六の采二つ（采の目のおき方あり）此三品を納め置くを船玉といふなり、難船ある時には、必此船の船玉去る也、難船したる船を見るに、必船玉は無きものなりとぞ、難船すべき以前に、何ぞに化して逃去る事もある事也、或時尾州自在丸通吉船といふ船、いせに至り、鳥羽の湊より歸帆の時、湊はるかに出たる沖中にて、船底より女一人出でたり、鳥羽の湊に掛り居る間はしりがねと唱る賣女、船中へ來りて泊る事故、やゝもすれば出帆の時、かの走りがね寝忘れなごして、其まゝ出帆する事も稀には有る事なれば、それならんと水主どもを糺しけるに、誰一人見たる事もなき女なり、あやしと思ふに、此女頻りに鳥羽へ歸して給はれといふ、折節そのわたりへ、獵船一艘來りたれば、其獵師をたのみ、かの女をその船へおろしみるに、忽ち其獵船見えすになりければ、いよ／＼恠しと思ひながら、船を走らせて暫らく行く程に、

忽ち早手吹き起り、大難風となりて、終に其船破船したりとぞ、是も、船玉の女に化して逃去りたるなるべしといひあへりとぞ、かゝる事を思ひ合せて、いま重吉がゆめも、船玉の去り給ふならんと、思ひたるなりけり。

十七ヶ月めにて異船を認む

かくて曉丑時頃、又宵の如く、夢とも現ともわかず、二人來りて告給ふこと初の如し、さては船玉未だ去り給はぬか、又は二度も同じ人の來るは、いづくよりいかにして誰かこの船中へ來りたるならんと思ひあやしみて、若猶船中に居るかも知れずなご思ひて、紙燭を拵へて、船の中の隈々を、そこかしことさぐり求むれど、誰も居ず、扱こそ神々の來りて告給ふならめと思ひ極めて、夜明前に垢離を取て、神々へお禮を申す、とや角する程に、夜明はなれて見れば、西南の方にあたりて、唐船と覺し、二本橋にて帆數あまた掛けたる大船一艘、西より東の方へ走り行くを見付た

り、其へだゝる事、凡三里斗りと見ゆ。

帆影七里船影三里といふが定りにて、三里までは船見ゆるものなり、それより遠ざかれば、帆ばかりならでは見えす、帆も、七里より遠く隔りたるは見へず、それもなきたる時の事也、しけにて浪高き時は、いと間近き船だに浪に隠れて見へぬなりとぞ。

重吉思ふに、そなたの船、帆を懸たるだに、あれ程に見ゆるを、こなたの船には、帆無ければ目にかゝるまじと思ひてまねきを上げる、船は行違ひなり、又こりを取金比羅を拜し、あの船へつけてたひゆへと、深く祈念する程に、かの船姿變り、こなたへねぢむくやうすなれば、あら嬉しや、あの船より目に懸りて助けに來るならんと、小おごりして先づ用意をせんと、下へ行、二人の病人にも言ひきかせ、日本の船にてはなけれど、唐船らしきもの來るほごに、きなこにても食べて心用意いたすべしと言へば、二人ひとしく言ふやう、我々は所詮叶はず、そなたは是迄千辛萬苦し給ひ、し

かも恙なくして居給ふ事なれば、その船にて助かり給へ、我々は猶此船にふしたるままにて、さし置てたび給へと云ふ、重吉いふやうは、左にては宜しからず、我かく丈夫にて有るからは、汝等を見捨てはせじとて引起し、着がへなごさせて、自分も絹つむぎ類の衣服に改め、浦賀の御判物と尾州の御船印しとを首にかけ、乗うつるに働き易きやうに、羽織の上を帯にてしめ、たすきをかけて、助船の來るをまち居たり、やう／＼に唐船は、程近く寄りたれど、互に言葉通せず、只日本の難船なり、助け給へ助け給へと言ひつゝ、拜むより外なし、唐船は、こなたの船を、ぐるり／＼と三度程めぐりて、扱一丁ばかり隔て、帆を下し、橋船をおろし、六人乗てこなたへ來るを、喜びてはしごをおろし待居たれば、異國人一人梯子を上り來る（此人跡にてきけば、船中の道斗りの役人エデメツといふ人なり）重吉外兩人の居る所へ來りて立て居る、重吉はじめ、頭を下げて、我等は日本尾州知多郡督乗丸の船頭なるが、難風に逢ひ、海中に年月を経て艱難し侍る者なり、あはれ、命を助けてたひ給へと、いと慇懃にく

り返し言へど、更に答も無ければ、ふりあふぎて見れば、いと大なる男、目は黄色なり、服は羅紗の筒袖を着て、いと恐ろしき様なり、是は異國の人なれば、所詮言葉にては聞ゆまじと思ひ、浦賀の切手を出し見すれば、仕まへといふやうなる仕方をする故、元の如く納めて、扱、手品をして見するに、先づ人數を十四人と知らしめ、死して捨てたる様をして見せ、さて今三人をさして生残りたりといふ様をして見せければ、異人は少し分りたる様子にて、それより船底へ下り行て、くま／＼を巨細に改むるは、猶外にも人のあらんかと疑ひて、さぐり見る様子なるに、外に一人も居ざれば、それより又上へ登り來り、口をさしてたべ物は何をたべるぞと問ひきく様子なれば、米を見せて、日本の人と知らしめたくも、米は一粒も無し、ふと思ひ出で、懷中に有りあふ伊勢大神宮の御洗米を取出し、飯にたきて食する形をして、それも今は無しといふ形をし、扱かのきなこをなめて見せければ、異國人もなめて見たり、かくして後に、右の手して、こなたの右の手を、いと強く握りたり、何事にかわけも知れず、心

の中にはそら恐ろしく思ひながら、こなたよりも又強く握りたり。

是は、いかにも日本人の人に違ひなく、外に人も無しと見定め、然る上は、助けてくれん、安堵すべしと誓ひを立るなりけり、惣て異國の人、かく手を握りたる上は、たとひいかなる事ありても、いつまでも其の誓ひを違ふ事なしとぞ。

外國船に乗移る

かくて、外へ伴ひ出て、扱下につけたる橋船に乗居たる人に向ひて、何か言ひけるが、本船へ事の由を言ひやる様子なれど、更に分らず、扱三人とも船へ來れといふ仕かたをすれども、二人の者は、かゝる恐ろしき人の船へ乗移らんことは思ひもよらぬ事也、たとひ此まゝ死すとも、乗移るまじといふ、重吉も、今更我船に別るゝ事の悲しき心地して、さらば三人共に乘まじと言ひ合せて、乗移るまじと云仕方をすれども、是非々々來れといふしかたをして聞かざれば、今はすべきやうなく、橋船へ乗移

らんとするに、我船を乗すて、別るゝ事の、親子か兄弟に別るゝやうなる心地して、悲しさ言はん方なく、乗出しても名残をしく返り見れば、いと涙にくれて見もやられず、病人ごもは、腰に繩を付けて橋船へおろし、三人一所に涙ながら、かの大船へ乗移れば、やがて船頭と覺しくて、紫羅紗の衣服をきたる人二人出迎へ、重吉が手を取て座敷へいざない行、(是は船頭ベグツ天文方エベツ兩人なり) 曲祿といふ物のやうなるものへ腰をかけさせたり、時に文化十二亥年二月十四日なり、朝よりとや角して、やう／＼辰の半刻ばかりに、乗うつりたり。

乗いそぎをすとも、おりいそぎをすなど云ふが、常に船中の誠めなり、然るに此度は、乗いそぎをすべからずと、神の告給ふなりけり、若しうろたへて、かの船へわけもなく飛び移りなば、心の中も知れず、如何なる禍にあふまじきにも非ざりしを、船中もよくうかゞはせ、何事もよく／＼言ひ聞かせての上の事なれば、何の禍もなく乗り移りたる也、扱此所を跡にて聞たるに、赤道より南へ十五度出

たりとぞ、日輪北の方へ見えたり。

二〇四

食始めの奇談

扱、何くれと氣をもみたればにや、口中乾きてたへがたし、水を乞ふ仕方をすれども、分らぬにや更に持來らず、目舞してゐすにも居られず、乗捨たる船の中を改めて、重吉が手道具を持來り呉れて、傍に置たれば、それに寄り伏して居たり、漸く己の時ころになりて、茶に砂糖を入て黒坊持來る、今一ぱいと乞へども、又其後は持來らず、午時ばかりになりて、淺きさはちやうの物に、小麥だんごを大にして焼たるを、正月の切餅ばかりに切たるを、一切入て持來り、扱、赤きかま鉾やうの物一切、鯨の油身やうの物を一切、水を一ぱい持來りたり、重吉思ふに是は菓子なるべし、早くかゆにても出しくれよかしと思ひ、早く飯をたまへといへども、更に答へず、せん方なく、先づ水を飲み、くだんの小麥だんごを食し、鯨の油身をくひ、扱かまぼこやうの

物をたべかゝりけるに、鹽からく臭きかほり有りて食べ難かりければ、食べたる様して袖へ入、扱かの砂鉢を出して替りを乞ひけるに、鉢を持入て再び來らず、重吉思ふに、我だにかく饑てたへがたきを、二人の者はいかならんと、心元なく穴よりのぞきて、音吉半兵衛何ぞ食したるかと問へば、そなたは船頭殿ゆゑ、あくまで食し給ふらん、我々は今に死ぬ斗り也、たとひ飢て死ぬまでも、此世の思ひでに、一たび腹をふくらし死したし、櫃の洗ひ流しにても乞て給へと言ふ故、しかば汝等は何も食せずやと問へば、少しは食べは食べたれど、しかばの事也と語るを聞けば、猶重吉が食の如くなりければ、我は飽く迄食したりとな思ひぞ、我も其通り也といへば、然らば何にても盗みてなりとも食はせて給へと云ふを聞て、淺猿しく不便なりとは思へども、よしや盗みてやらんも勝手は知れず、せんすべ無しと云へば、扱は我船はいつこにか有ると問ふ、我が船はいつくへか行きけん、今は船かげも見へすと云へば、二人の者いたく悲み恨みをぞ言ひける、かくて其わたりに入げも無かりければ、そこかし

こと伺ひ見れば、皮にてたゞむやうに作りたる船十四艘、はし船五六艘、ぶた三十四
 あまり、犬二疋ちんのやうなる獸二疋、鶏十四五羽籠の中にゐたり、鳩もあり、是も
 籠かごに入たり、扱、磁石ありけるを見るに分らず、我持たる磁石を出して見れば、船は
 丑寅の方へ走り行く也、扱もその所へ來り、又箱により伏して念佛となへて居たりけ
 り、夕つがたになりて、茶二はいと例のだんごを二切、又かのくさき物を付て出した
 り、かく迄うゑても、此くさき物は強しひても食たべられず、扱夜に入て、二人と一所に下
 にて臥ふさしむ、二人は、後悔こうくわいの物語りのみする、時々半鐘しやうをうつは、時を知らしむる
 なるべし、(此時の鐘一晝夜に四十八度とか打つ由也、時こまかならざれば、道のりは
 かり難がたき故なりとぞ) 上にては、寄より集りて何か物語りをするは、流され人を助けた
 れば、其事を論じ定むるにても有るべし、豕ぶたはそこかしこはい廻り、騒さわがしく、久
 久にて賑にぎやかなる事は、國へ着たるやうなれども、かくても、殺ころさるゝ事か、いかに
 なり行く事かと、心安からず、先第一腹はらむなしくて堪たがたし、とや角する程に、夜も

明たり、重吉思には、神々の恵めぐみみにて助かりたれば、猶も祈いの念ねんせんと、毎つねのやうにこ
 りを取て神々を拜まつむを、此船中の人々見ていたく笑ふ、重吉心に思ふやう、異國の人
 は、神を頼たのまざるか、さては心得よろしからぬものなりと思ふ程に、船頭二人起出來
 りて、手水を遣つかひ、神を拜まつむやうす也、左の手を右の脇わきの下へ入れ、右の手の大指ゆびと
 人さし指ゆび中指と、三本合せて、先づ額ひたいへ當て、扱左り右りの肩かたの下と胸むねとへ當て、
 少しぬかづく様やうのさまをするを見て、扱は異國の人の神を拜まつむと、我さきに拜みたる
 とは、さまの異ことなる故に笑ひしならん、と思ひあたりたり、かくて重吉は、二人の船頭
 の前へ行き時宜じぎをしたれば、二人も會釋あひしやくしたり、扱茶を二はい、例のだんご三切、又
 臭くさきかまぼこを出したり、(かま鉢はちは又袖そでへ入れ、あとにて海へ捨てたり) たゞ終り
 て、船中こゝかしこを見廻まはれば、人數はいと多く乗り組たるやうすなり。

船は凡二千五百石ばかり積むべき大船にて、船の名はホーストンといふ、シトマ
 ル(船頭の事なり)の名はヲゼン(苗字のやうなるものなり)ペゲツ(船頭の名

なり)天文方の名エベツ、道量の名エデメツ、右筆の名ベネツ(此人大工をもする)水主廿七人其外獵師やうの者數多乗組居たるなり、此船頭ベゲツ、誠に篤實親切なる人にて、三人の者共を厚くいたはり恵みしこと、言葉には盡しがたしと、重吉はいひき。

己の時斗りになりて、豕を追廻し、二人にて押へ、殺して半切やうの物へ入、煮たちたる湯をそゝきかけて、ゆがくやうすなれば、いかなる事にかと、恐ろしく思ひながら、念佛を唱へて見居れば、へらの様な物にて毛をふき、跡をこそげて、扱腹わたを出し、よく洗ひて、足をしばり、傍へつり下げ置くを見て、扱は彼様にして藥種にする事にも有るかと思ひ居たり、扱、この船の水主等、とに角に重吉を見て笑ふ、こなたよりも、言ひたき事聞きたき事のみ多かれど、言葉通せぬ故、文字を書いて見すれども、猶分らねば、いとゞ心も安からず、とかうする程に、半鐘の鳴るは午の時なるべし、晝のたべ物や出づらんと、例の椅子立てたる所へ行て見れば、大きやかなる

臺をまん中へすゑて、今度は彼の團子を、山の如くに盛りて中にすゑ、ぎやまんの器に鹽酒水などあり、庖丁もあり、さじも數多有り、其臺のめぐりへ、床几やうの物五つならべたり、重吉是を見て、けさは團子三切ばかり故、猶腹は空しければ、のんどをならす斗り也、やがて船頭出て來り、重吉を伴ひて床几にかゝる、ベゲツ、エベツ、エデメツ、ベネツ、重吉五人なり、井鉢やうの物に、もろこしの粉にて、豆のやうに拵へたる物を入れて持出たり、ベゲツの傍に皿やうの物二十枚ばらり積み重ねて有るを、ベゲツ取て件の豆のやうなる物を、少しづつ盛りて出しけるを、食やう知れざる故、見合せ居れば、皆々其豆を七にて食し、とり／＼に團子を取て食しなごするを見て、重吉も七にて豆を食、團子は取て與へぬ故、いかゞとは思ひながら、一切取て喰ふに、皆々は咄し扱しながら靜に食するを、重吉は飢て居るなれば、やがて食終る、かくて其器は引取、又汁のやうなる物を持出たり、豌豆と何か青みを入れて、水煮にしたる物なり、皆々鹽を入れて食するやうすなれば、こなたも鹽を入れて忽ち食べ終る、

皆々は、初めの團子まだは半分残り居たるを、こなた斗り又とらんも心苦しけれど、思ひ切りて又二切取り、かの汁一ぱいに二切を忽ちたべ終りければ、又其器を引取、今度は、いと白げたる米の飯を、日本の椀ならば一盛半斗り持出たり、扱は久々にて米の飯を澤山に食ふことよと、いたく喜び居れば、ベグツ取て太白の砂糖をかけて、五人前に盛わけて出すを、心の中にては力を落したり、是もやがてたべ終り、又團子を一切取てたべたれば、漸く腹も八分には満みたり、此器も引取て又持出たるものを、ベグツ庖丁にて切て三切づゝ盛て出すは、彼の鯨の油身なり、きる所をよく見れば、最前の豕の頭を蒸やきのやうにしたるなり、殺す所を見し故一口もたべられず、しいて一切食へば、又其器を引取、今度もベグツが切て出す所を見れば例の蒲鉾也ければ、是はたべず、扱是にてはたたる様子にて、器物も残りなく持て入たり、かくて、其残りたる肉を、黒坊など寄集り食し居る所へ行く、鯨と思ひしも豕になりたれば、かの蒲鉾も何にてか有らん聞かまほしくて、豕の骨を豕へ當てゝ見せ、是はこ

れ也といふ仕方をし、扱蒲鉾を見せて、是は何にてあるぞと問ふ様をして見せければ、頭へ指を二本當てゝ見せたれど、分らぬ様にて居たれば、やがて下へ行、牛の角を二本持來りて見せけり、扱は牛にてもあらんかとは思へども、猶いぶかしむ氣色を見て、下へ連れ行て、桶の蓋を取て見するを、よく見れば、牛をさまざまに切りこなして鹽漬にしたるにてぞ有りける、いと淺ましと覺へたり、さて、二人の者はいかならんと思ひ、行て尋ねければ、けふは十五日故にか、様々の物を飽く迄食したり、わきて鯨の油身は味ひよかりき扱いふを聞て、其鯨こそ豕なれ、蒲鉾は牛なり、今は神々は拜まれぬぞよと云ひ聞せければ、二人驚きて、淺まし的事や、此上は、豆のやうなるものと團子とのみを與へ給へと願ひて給はれかしと言ふを、いやとよ、左にては宜しからず、かゝる折からなれば、何にまれ給はる物をこらへて食すべき事也とぞいひ聞せける。

きのふより、すがしく食を與へざりし事を今思ふに、米を食ひなれたる者の、

それも盡きて、豆の粉のみを食して飢たる者に、俄に飽くまでたべさせては悪しかりなると、やう／＼に食を増して與へ、今は飽くまでたべさせても妨げなしと見て、始めて此くは物したるなりけり、されば、けふ迄は、ベゲツ始め、物のかげに隠れて食したるけはひなりしとぞ、これよりは、日毎に晝ま一度づゝは、けふと同じ様に、色々馳走をしたりけりとなん。

いとくはしき日本繪圖

扱、かの臺の上へ、日本の繪圖、いとくはしく書たるをのべて、ベゲツ初三人にて圖をさし示し、ジツバン／＼と云へども、何のわけかも知れず、又指にて圖をさし教へて、ミヤコ・キウシウ・エド・スルガといふを聞て、扱は日本の人にていつくの人にかと尋ぬるならんと思ひて、こなたよりも指もて、尾張とさして江戸まで引來り、江戸といひて又歸り來り、遠江の所にて口にて風の吹く様をして南へ吹流されたる手

品をして見せければ、三人は分りたるけしきなりければ、又こなたよりも、そなたは、何國の人にてかましますといへども、更に通せざれば、重吉我身をさしてジツバンと云ひ、扱三人の身をさしていかにといふ、仕方をすれども、通せぬ故、同じ事を十遍ばかりしたれば、漸く思ひ得たりと見えて、ランダンとぞ言ひける、(編者いふ、下文にロンドンとあり)ランダンといふ國は、聞も及ばぬ國なるが、日本の事をもジツバンと云へば、少しは言葉の違ふとも有るべく、然らばランダンとはヲランダといふ事なるべし、紅毛は、日本へ來る故に米も有り、又丑寅へさして走るは、ヲランダより長崎へ行なんぬりと思ひ定めて、初めて心落付きたり、いとく嬉しくて、やがて二人の病人へも、しか／＼の事を云ひ聞かせ、程なく長崎へ至るべし、喜べと言へば、二人もいたく喜びあへり。

中之卷

新西班牙の上陸

かくて、日々食は多し、何一つ足らぬこともなし、猶も丑寅々々、四日ばかり走り行きたるに、大きな島一つ見えたり、其島のかげへ行て帆を下し、皮船十四艘をおろし、獵師たつ者二人三人づゝ乗つれ、其船へ銃砲を入れて皆々下りたり、此わたりより、遙かに東の方又北の方にも國見へたり、かの皮船は、おろし捨にして、元船は又帆を巻きて出でけり。

この皮船は、水中にすむ獸の皮もて作りたるもの也、長さ凡一丈あまりも有るべし、上に穴ありて、其穴へ人のからだを腰まで入れて、ひもにて括りよせて、水の入らぬやうにしたるもの也、二人乗も三人乗もあり、扱大きな杓子のさまし

たるものにて、思ふまゝに漕ぎめぐる也、此島には、獸多く棲む故、獵師らをやりて捕らする也、此獵師は、スハコーリヤカといふ所のものなりとぞ。

そこより又子丑の方へ二日ばかり走りて、地方へ着き、湊とおぼしき所へ碇をおろす、先長崎へは着きたりと、いと嬉しく思ひたり、かくてベケツ始めて七人打つれて陸へ上る也、二人の者へも、先づ長崎へ着たる事を言ひ聞かせ、程なく迎へをよこすべしと言ひ置て陸へ上れば、十四五人馬をひかせて、迎に出たり、皆々此船の人々と同じ衣服を着たり、是は長崎に逗留の紅毛人なるべしと思ふに、馬は少し丈高く、顔は長きやう也、腹帯三所にてしめて、笠は三角也、さて異國人互に挨拶して皆々馬に乗、重吉にも乗れと言ひけれど、乗たる事無ければ、口を引てたべといへ共通せず、止む事を得ずのりは乗たれど、馬一足も進まざれば、ありくべしといふ仕方をして見せければ、道遠し是非乗れといふ仕かたをする故、又仕方にて相乗を頼み、尻馬に乗て行く、谷間を行くに、畑有て小麦穂に出たり、さても長崎は、早く穂に出る所なり

と思ひつゝ、一里ばかり行て向ひを見れば、白壁の長屋のやうなるもの見ゆるは、聞及びし紅毛屋敷なるべし、大手先きと思しき所へ、男女二十人斗り出迎ふ、先きの頭だつ人も、紫羅紗の服を着たり、女は大かたうるはしき唐さらさの服にて、袖は男の服よりは少し大きにして、腰より下は僧の衣のやうにひだ數多ありて、裾の方廣がりて、それへ様々のかざりを付たり、重吉を見て、皆人笑ひて取まく程に、日本の人なりといふ譯を船頭くはしく話したれば、やがて先の船頭たつ人來りて、重吉が右の手をかたく握りたり、かくて屋敷の内に入りて見れば、土間なり、曲ろくやうの物を直し置たり、こなた六人と重吉を上座に居らしめ、向ふは五六人なり、是こそ紅毛屋敷といふ所なるらめ、奉行所へ訴へて沙汰ある事なるべしと思ひ居たり、程なく真中へ大なる臺を出して、さまざまの馳走出たり、銀澤山にて出る器物多くはしろかねなり、扱馳走はて、皆々一同に外へ出る、其わたりに、ばらばたんといふものに似たる赤き花一面に咲き亂れていとうるはし、其花を摘て袖に入れば、えも言はずかほ

れり、扱、船に残りたる二人は、迎ひを侍遠に思ふめり、重吉も、奉行所の沙汰をのみ待居たり、此ほとりに屋敷十四五軒も有るべし、皆役人體のものと見えたり、そこかしこありくに、日本の人には逢はず、夕暮に至りて、皆々打つれ船へ歸り、二人の者へも、陸にての有りさまを語り聞かせ、けふは日本人には逢はざりき、是より奉行所へ訴へて、あすは迎ひの來る事なるべしと、三人ともに安堵して休みけり、扱夜明けて見れば、水主廿人斗、斧或は庖丁やうの物をとりくゝに持て、陸へあがる、しばらくありて、船頭はじめ起き出て、食事なご果て、又打連て陸へ上る、海邊を見渡せば、牛馬多くゐたり、牛は四十六疋つなぎたるが、その内七疋は殺して皮をはぎてあり、見るがうちに、水主等とりくゝに、斧の頭もて牛の角の間を打て殺し、皮をはぐ有様を見て、是は長崎には非ず、生ながら畜生道へ落ちたるかと、又恐ろしく悲しくなりて涙落つる、船にても、かの殺したる牛に鹽をあて、船の中へ積入るを見、二人も歎くめり、かくて又馬に乗りて、きのふの所へ行て見れば、門の前に牛羊

豚兔ぶたなど、さまざまの獸七品ばかり殺して並べてあり、こなたより行たる船頭、一々見終りて後、向ふの人料理にかゝる様子なり。

是はけふの馳走ちそうの品を、客に見するなるべし、何か見る作法さほうも有りげに見えたり。かくて色々馳走ちそう出てたり、扱あつかここに地球圖の有るを見て、此國はいづくなるぞと問ひ聞けば、此所は、オロシヤの屬國北アメリカ南アメリカの界にてノールハイスパニヤといふ所にて、赤道五度十度の間にして、日本とは足合はせの國なりとぞ、扱かの助けられたる船も、紅毛オランダにては無くて、是もオロシヤの屬國歐羅巴のうち譜入利亞イギリスの都ロンドンといふ所の船にて、國々へ交易に行く船也、イギリスの船は、おほやけの船千二百艘商人船六百艘ありとぞ、惣じてイギリスの船、北アメリカへ行くには、此所の切手無くては入る事叶はず、されば、必ずこゝへは來る事也、かつは爰こゝにて、薪水其外たべ物なども取入て行く事なりとぞ。

ノールハとは新しといふ事にて、此國は、イスパニヤ國より後に合せたる國故、新イスパニヤといふことなりとぞ、至つて暖國だんなり、扱此所の頭かしらたつ人の名をヲテガといふ、日本文化亥年に五十五歳、妻は五十歳なり、一腹はらに子二十五人有り、男十一人女子十四人一人もかけず、いづれも健すこかなりとぞ。

扱二人の病人も、船中にては養生行届いじくまじとて、ヲテガの家へ引取、さまざまに介抱かいほうせしとぞ、重吉は、船中に居て、日々に陸をかへ上り、ヲテガの宅へ行、馳走ちそうになりたる事あまたゝびなり、扱こゝに十日居たる間に、薪水其外いろ／＼積入、牛も鹽にして十一疋びき斗り、豚ぶたも多く積入、十一日めに船を出して又亥子の方をさして十一日走り行たるに、十一日め、夜の寅時ばかりに、大風烈はげしく敷吹起り、浪高く海あれて、終つひに楫折れたり、重吉船底ふなぞこに居て、此事を聞き、つく／＼思ふに、我船も楫折れて流れ船となり、又此船の楫折れたり、何れにしても命いのちの無きなり、又船中の人は、楫の折れたる船人ふねうぢを乗せたる故、我船の楫をも折れたるならんと思ひて、我われを殺さんころも測り難がたしなと思ひめぐらせば、寢ねても居られず、若し殺さんころとせば、自ら海へ飛込で死す

べしと思ひかまへ、上へ上りたれば、楫は折れても少しも恐るゝに足らず、下へ行て臥して居よといふを、此船へ移りて凡三十日にも及ぶ事故、少しづゝ詞も聞覺へたれど、猶心安からず、恐るゝけしきを見て、酒をのめといへど酒も飲まれず。

酒はシユガン（砂糖の事）の木を、らん引にしたるを、ロンメといふ、クロツバ（大麥の事）にて取たるをヲーツカといふ、至つて氣の強き酒なり。

此有様を見て、心を落付かせんが爲めにか、船頭ベグツ笛を吹き、又は歌をうたひなごしければ、初めて心落付きたり、とや角する程に、夜も明け風も止みたれば、やがて大工楫を拵へ、難なく又丑寅の方をさして走り、又十一日走る（船の走る事晝夜に凡百里餘は走るなり、）

ルキンにて日本人に逢ふ

十一日めに湊へ入たり、こゝは川湊なり、岸に納屋と覺しくて板張にて大きな小

屋一軒あるのみにて、外に人家は無し、此わたりに住む異人は、皆穴の中にすまひする也、其穴居は所々に見えたり、男女ともに赤はだかにて、下の帯もなし、魚を生にて取り食ふ、親子兄弟の差別なしとぞ、人には何の妨もせぬよし、されど此人に向ひて、チマヨ／＼といへば、いたく腹立つけしきなれども、何の譯かは知らず、扱ここより五六里ばかり川上には、餘程大きな里ありて、役人やうの人も住むとぞ、此湊へ船の入たる時、役人やうの人一人、其外人數二三十人も乗つれ、大なる川船に乗て來りたり、交易などする様子にては無し、さきに難風に逢ひたる時損したる楫、其外作事せんが爲めに船を止めたるなり、十四五日を経て、あつらへやりたる材木を、船に積下し來りたり、二三十人も乗たる中に、一人日本の詞にて、重吉に向ひ、奥州か松前かといふ、風俗は異國の様なれど、眼のやうす其外、日本の人に違ひは無しと見うけたれば、わが艱難の次第をこまやかに話し聞せて、いかで日本へ歸りたし、好きやうに計ひて給へ、左はなりがたしとならば、そなたの手に付けてなりはひをさせ

てたべなご懇ねんころに頼たのみて、扱あつか、こゝは何といふ所なるぞと聞きけば、此所は、オロシヤに從へる國にてルキンといふ所なりといふ、(ルキンは北アメリカなり) 扱あつかそなたは、日本にては何國の誰たれといふ人なるか、外にも、ともに流され來りたる人もやあるなご、問ひきゝけるに、我は日本人にてはなしといひて名のらざりければ、是は腹を立てさせなば、自らいふ事もやあらんと、今度は言葉を荒あららげ、汝はいかに心得てか偽いつはりをいふ、かくしても日本人にまぎれなし、たとひ我國の人にてても、我つれて歸らん手だては無し、それ故に汝が手につかんとまでも言ひたる程ほどの難義なんぎにこそあれ、何故ゆゑに左までは隠かくすぞと怒りて見せければ、いやとよ、我は過し頃ころ、松前に行て日本の詞ことばを覺へたる也、といふ、とや角する程に、一同に船を上せてぞゆきける、(是は、此船に乗り來りたる人足體ていの者なれば、船の歸る故、それぎりにしてのり行きたるなり)

扱あつか、船梶かぢなご繕つくちふ程三十日ばかり此所に居て、それより船を出し、今度は眞北をさ

して四十日斗り走る、四十日めに、船底ふぞこより石火矢十一挺取出し、錫すずの曲物のやうなるものに玉を入れたるをこみ入れ、薬くすりは五合斗り袋に入たるまゝにてこみ入て、口薬の穴あなより火箸ひはしのやうなる物にて突破つきやぶり、仕かけ用意をす、其外鏡やまの玉も數多取出し置き、船のふちへは幕まくを張りて、船の高く見ゆるやうに仕かけ、其外、先に鑓やりを付たる鏡砲やま四十二挺取出す、是は玉盡る時は、鑓やりにして使ふ也とぞ、重吉此有様を見ていたく驚おそろき、是は軍に來りたる船なんめりと思ひて、其事を問ひきかんにも、これまでなき事故じこ、詞通ことばせず、軍船に乗て居りたれば、いかなる浮うきめをか見んと思ひて、又悲かなしくなりたり、然るに、是はロシアの屬國ぞくノージ、インデン兩國の間の海上百里斗りの程を通るなり、此二國人氣至つて強剛つよくして、人を食ふ國なり、船の通ふを見れば、出て亂暴らんぼうをして積たる荷物にを奪うばひなごする事あれば、豫あらかじめ其禍わざはひひを防がん爲めに、かくはものしつるなりけり。

此二國はロシアの領する地とはいへど、異人の風俗あくまで荒つよく強くして、今

に於てヲロシヤの國の風には移らず、髪をちらし、顔は紅がらやうの物にて赤くぬり、手に幾つも輪をはめてゐる也、女は、口の中より物をかひ挟みて唇を張出してゐるなり、誰にても強き者大將となりて、己が心に叶ひたる婦人は、幾人も妻となし、死人の肉を食ひ、近國に罪人の殺さるゝ者あれば、其死骸をとり來り、切こなして賣なごするなり、海獸を捕て皮をはぎ、近國へ持出し、酒又は鹽硝なご交易す、或は湊へ我妻を連れ來り、船中へ泊らしめ、聊かの木棉きれなごにて、女房を一夜交易すとぞ。

アミシツカの入船

扱此所を、兩國の海の真中をばせて難なく通り過ぎ、八日斗りの程に、アミシツカといふ所の湊の入口に着きたり、さきこみ入たる石火矢の玉を出し、繩のやうなる物なご取集め、丸めてそれを込入、玉なしの石火矢を一つ放ちたり、始めて石火矢の音

を聞て、いと痛く驚きたり、此音を陸より聞て、橋船八艘に、十四五人づゝ乗て來り、こなたの船を迎ひ入る、湊には大船八艘かゝり居たり、其の内五艘はヲロシヤの國、三本檣なり、三艘はメリケンの船なり、こゝは賑はしき湊にて、造船なごして居るもあり、此わたりに凡人家二三十軒も有りぬべし、役人やうの者も多し、湊の上に山城と思しくて、天守なごいふやうなるものも見えたり、こゝもヲロシヤの領國アミシツカといふ所なり。

此アミシツカは、北アメリカの真中にして、北極七十度の所なり、晝も雨天の時のやうにて、只明るきばかりにて、日々霧のやうなる物にて空はれ渡らず、日輪は見えず、月星も霧にて見えず、六月も雪ふる、初めのノーハイヌバニヤより七十日ばかり走りたれば、凡七千里餘もあるべし、さきに漂ひ居たる所は、寒中にもあつさにたへざりしを、こゝは六月に雪ふるをもて、數千里へだゝりたることを知るべし。

湊へ入りて碇を一つおろし、又石火矢一つ放つ、此音を聞て、元よりかゝり居たる八艘の船毎に、とり／＼國々の印しの旗を立て、城の上にも立てたり、たて終れば、又九つ放つ、それより八艘の船毎に、次第に九つ宛放つ、放ち終りたる時、城中よりも又九つ放つ、是は入津の祝ひにて祝儀なりとぞ。

メリケン船内の藝づくし

さて恙なく入船したる祝なりとて、湊にあり合ふ船、皆々酒もりなごして遊ぶ也、(日本の俗、正月をすといふやうなる事なり)メリケンは歐羅巴の中にて、イギリスに近き所にて、元より親しき故、こなたの船頭右筆、其外の船毎の人々も、メリケンの船へ一同に移りて酒もりを始め、其船の中に南京の人六人居たり、是は通詞の爲めに、一艘に二人づゝ乗せ來るなりとぞ。扱、酒たけなはに及んで、南京は日本へ交易をする國なれば、重吉に對面させんと言ひ出したりとて、重吉を呼に來りたり、日本

の衣服に着かへて來れと云、久々にて日本の服を着たれば、いと寒く覺へたり、かくてメリケンの船へ行きければ、ベゲツいふやう、南京人は、日本と交易する事なれば、咄をして見すべしと云て、南京人を出したり、けし坊主にて衣服も異り、ヲロシヤの人とはいたく風俗かはりたり、扱南京人は、日本へ交易に來るといふ事は聞及び居たれば、言葉に通ずる事と思ひ、是迄さまざま艱難をしたる事どもを話し聞かせ、何とぞして故郷へ歸りたし、よきを取なして給へといふを、皆々やうすを見居たるが、南京人に向ひ、今のは何を言ひたるにかと問へど、南京人は知らぬと答ふるさまなり、扱六人の南京人、とり／＼に重吉に挨拶するを、ベゲツ重吉に向ひ、あれはいかなる事をいふにかと問ひけれど、何事かさらにわからねば、其よしを答ふ、然らば文字の通ずる國なれば、筆談にすべしといふに定りて、筆と硯を重吉が前に出したり、重吉思ふやう、此筆談にても分らずば、日本の人にては無し、偽をいひたりなご思ひて殺されやせん、海へ打込まれやせんなど思ひ過していたく心づかひしたり、先こゝに有あ

ふ物を書いて見せんと思ひて、砂糖と書て見せけれども通せず、又茶碗と書たれど、猶わからぬさまなり、扱はいかにかせましと思ひめぐらして、今度は一二三より十まで書て見せたれば、是は分りたるけしきにて、やがてイギリスの詞にて、「ワン」「テウ」「テレー」「ホワ」「ブハイル」「セキ」「セン」「ヤイト」「ナイヌ」「テン」といふ事なりといひて初めて通じたれば、いどく嬉しかりき、皆々も面白がりて、猶も盃をめぐらして、いたく興に入り来る、ヲロシヤの人に、歌をうたへど乞ければ、やがてヲロシヤ人真中へ出て、かたりくど足拍子を踏みてうたふ、皆々興じて酒をのむ、此度はイギリスメリケン諸共に歌はんとて、一所に真中へ出て、是も亦足拍子を踏みつゝ、歌ひては酒もりをす、今度は南京人六人一同に出て歌ふに、是はいどく早口にて分らず、是も終りてければ、今度は重吉に歌へと皆々言ひ出したり、もだし難き比ほひなれば、せん方なく真中へ出て立ち立たれど、心に憂を抱きてゐる上に、何事もすがくとは分らず、身の行末も、いかに成り行くことかとのみ思ひわびて居る事なれば、

歌など歌ふ心にはなりがたく、真中へ出されて悲しくもなり、腹も立ちて、さまざまのよまいごとを言ひ、唐人といふものは、扱もくなさけ無き者なり、かゝる異國へさすらい來りて、かくまで艱難をして、心を痛め悲みて居るものを、己れらが慰みものにして酒を飲まんとは、さりとてはなさけなしなど、初めは口の中にてつぶやきたりしも、思ひつめて恨めしき餘りに、涙ぐみ、いつしか聲も高くなりたれば、身に入れて歌を歌ふとや思ひけん、皆々一同に興に入、聲をあげて、やんやくと褒むるやうのけしきなりければ、又おかしくもなりたり、扱酒もりも終りて船へ歸り休みたるに、又あすも、外のメリケン船へつとひ集る由を聞て、重吉つらく思ひめぐらすに、又明日も我を連れて行くなんめり、されども是は、我を慰み物にするにてはなし、退屈を晴さんどて、船中にて頭だつ人々の寄つごひて樂しむなり、されば音吉半兵衛などは連れ行かず、我を船頭と思ふてこそ誘ひ行くなれ、六月に霜ふる國に來りても、時々の衣服さへ恵まれ、寒き思ひもせぬは、此ベゲツの恵みなり、されば命の親なり

と思ひ直して、あすも亦歌を歌へと言はゞ、潮來にても新内ぶしにても歌ふべしと思ひなりたり、扱、翌日になりて、又々メリケン船へ誘ひ行かれたり、惣じて昨日の様に酒宴始り、果して又皆々歌を歌ひ、又重吉にも出て歌へといふ、今日は心を取直したれば、苦しとも思はず、潮來にても歌はんと思ひ、笑ひながら少し歌ひかゝりたれば、皆々大に腹立て、けふはいかなれば我々を嘲弄する、昨日のやうに、身に染みて歌へと言ひければ、重吉又腹立ち來りて、昨日は悲しくて歌ふ心もなきを、強て歌へといひ、今日は又歌はんとすれば、又もや此く言ひて我を苦むることよ、返すくも唐人は心なきものなりと、しんに恨めしくなりて、又皆々の事を様々に悪しざまに言ひくゞき歎きければ、一同きげんを直し、其事々々と言ふ様子にてほめる、其時は左も思はざりしを、跡にて此行違を思へば、いとくおかしき事にてぞ有りける、是より日々同じ様にて、九艘の船へつぎく集ひて酒盛をぞしたりける。

アミシツカ大守の馳走

かくて、かの城の中より、日本人を連れ來れど、仰せごと有りとて、今は其姿にてはあし、日本の風ふうに月代つきしろをそりて、日本の衣服いふくを着てゆけど云、今迄は惣髪そうはつになりて居たるに、又々月代をそり、我國の服を着たれば、こよなう寒さを覺へたり、扱、沓くつにてはわるし、草くさりをはけと言へど、草くさりは無し、苧ををもて俄にわかに草くさりを作りてはき、日本の姿すがたになりて行く也。

惣じてオロシヤの領國りやうこくの人は、いづくの人も髪かみは短みぢかくざん切ざんぎにいて、日本にっぽんにていが栗くりあたまたいふさま也、髭ひげはそりて居る也、女は髪長かみながきを組かて垂たる也、女帝にょていの代しろには、男も皆々髪を垂たれて居たりとぞ、重吉は、ざん切ざんぎにはせずして、只髪かみをのばして薙ち髪はつのやうにして居たるなり。

九艘の船の船頭書役せんとうしやくなど一同に、三十人斗り同道にて行く、まづ岡へ上りて見れば、

船を造り居るもあり、鍛冶なども有り、めづらしく見つゝ行けば、迎ひの人來りたり、鳥の毛を植立たるかぶり物をかぶり、鐵砲をかつぎ、玉入と見えて、胴亂やうの物を脊負たるが二人來りたり、是はカザクといひて日本の足輕やうの者なりとぞ、此人まづ重吉一人を先へ連れて行くに、坂路をくるりく廻りて登り行て大手と覺しき門に至れば、かのカザク同じさまして、兩側に十二人立て居る、内十人は鐵砲をかつぎ、二人は劔をぬき身にしてかつぎたり、程近くなりたれば、ヨイ／＼ヨイと一同に聲を立てたり、重吉は恐ろしく思ひて行まじといへば、聊も恐るゝ事にてはなし、心安く來れとて連行を、猶心ならず思ひつゝ登り行けば、又門ありてこゝも又兩側にカザクの備へたる様さいせんの如く、猶登れば、又門あり、こゝにも同じく備へにて十八九人並び立たり、此門を入て向の方へ行けば、大きな臺所と覺しき所に至る、そこに、熊ばかりの何とも知れぬ獸五匹斗りつなぎてあり、熊も居たり、内へ入れば、いと暗き所にて、そこより大なる梯子を登り行く也、梯子の下にびいごろにて張りた

る窓ありて、それより明りを取る斗り也、先づ鳴子を引たるは、上へ知らするなるべし、かくて梯子を登る事凡二町ばかりも有りぬべし、所々に廣くして休らふ所有り、上り盡せばいと廣き大座敷なり。

これは、アミシヅカにては第一の役人にて、大名のやうなるものなりとぞ、名をバラノフといふなり、城代などいふものなるか。

梯子の上り口へバラノフ出で迎へ、重吉が手をしかと握り、さて座敷へ誘ひ行に、いとくいかめしく作りたてたる家なり、床は一面に板にて張りたる也、障子はすべて、ぎやまんにて張たり、籠を下し見れば、湊の船目の下に見ゆ、其けしき言はん方なし、やがて曲ろくやうのものへ重吉を掛らせ置て、茶其外色々出したり、とや角する程に、三十人の人々も上り來れば、真中へ大きな臺をいくつも持出て長くつぎて並べたり、皆々床几に掛り、重吉も床几に掛りたり、かくて次第に馳走出る、大かた獸の肉なり、皆々たべては座敷を歩くなり。

二人三人並び立て足をそろへ、一所に静しづかに行儀ぎやうぎよくかたりく〜と向ひの方へ歩あるき行、またこなたへ廻まはり歸かへる所、片足をうけて片足にてきり〜と廻まはるさま、いと趣おもむきあること也、見る人、かれは上手也、かれはつたなしなど評する也、踊なりなごも手を遣つかふことはなくて、手はこまぬき居て、足とこしどにて様々の振ふりをする事なりとぞ。

花の如き美女六人

扱一通り終りて器物を引取り、又次第に肴さかなもの出て、皆々酒をのみては歩あるき〜するを、重吉は歩あるく作法さほうは知らず、片よりて床几しょうぎにかゝり見て居たりければ、バラノフ重吉が手を取て、こなたへ來れとて連行つれゆき、座敷を三つ過すぎて四つめの座敷へ連れ行き、て床几に掛らしむ、向むかふにいと華やかなる婦人六人床几を並べ居たり、バラノフ其女に何事か言ひければ、やがて其女一人來りて、重吉が前に立ち、額ひたいと兩肩かたと胸むねとへ手

を當て、拜をする様をして後のち、重吉が頬ほを兩手にておさへ、口をなめて行きたり、かくて又其次に居たる女來りて同し様の事をし、六人の女皆々同し事をして元の床几に掛りたり、此事終り、着きもの羽織はおりより脱ぬがせて盡ことごとく改め、手を入れ肌はだをさぐり、肌の直に當てたれば、バラノフは奥へ入りたり、跡には重吉一人向ひには女六人残り、氷砂糖茶ひょうとうぢや其外いろ〜出づ、女は重吉を見ては笑ふ、重吉は如何なる譯わけか更に分らず、そら恐おそろしく色青くなりて憂うれへ居る程、表の座敷にては酒盛最中にて、歌ふたり踊りたりする音聞ゆ、是は申の時斗りの事なり、夜に入亥時過る頃、ベグツ始め皆々歸りて、ヲロシヤの船頭二人と重吉と三人残り、重吉を、又初の座敷へ連行つれて床几に掛らせ置おて、かの婦人ごも、とり〜に様々の品を持出て重吉に與ふ、劔鐵砲合羽けんてつぱうがっぴ子安貝獸きばの牙類きばなど色々恵めぐみたり、かくて女は兩側へ三人づ、控ひかへ居る、向ひへ、バラノフとヲロシヤの船頭二人と椅子いすに掛り居る、かくて、十四五歳斗りの男の童わらは十四五人、梯を上り來りたり、是は踊子なすりこにて、やがて一同に踊り始めて重吉に見するを、

珍めづらしき事なれど、摺銅すりがね、太鼓こ、琵琶びばを胡弓摺物こきうすりものにて摺する、此はやし誠に面白おもしろし、重吉は、イギリスの船頭せんとう歸りて、力にする人無ければ、何事も心ならず、憂うれへ痛いたみ居るのみなれば、面白おもしろしとも思はず、只いか様になる事かと、心を痛いため居る斗たたりなり、かくて、踊りも果て、踊子は皆々下へおり行たり、夜半頃よるごころに夜食と覺しき物出でたり、それを食たべ終れば、其臺の上へ、様々の物を持出でたるに、何れも日本の品なり、是を重吉に見す、その品々は、

あ　ら　麥むぎ

三四升ばかり

鐵

砲

一挺

廿五貫目の分銅ぶんどう

一

吸物椀すひものわんふた付

六人前

革かわの提さげたばこ入

銀ぎんのきせる入

小田原提灯てんちん

釵かたばみの紋もんさ余あまさ書かたる印いんしこ前後ぜんごに付たり

片かたかなのイロハ

平ひらかなのいろは書かたる物

和漢年代記わかんねんたいき

鐵砲てつぱう指南しゅなんの書物

此書物このしよぶつごものはしめなごに、日本にっぽんにての持主もちぬしの名なにて有るか改あらため見たれども、さることなし、

これらの品々を見終りたれば、ヲロシヤの青き紙あおの大きな書物を二冊出したり、

是こゝは日本の詞ことばをヲロシヤ文字あざなにて委まかしく書かたる書物しよぶつなり、それを見て、日本の詞ことばとイギリス詞いギリスことばとにて、バラノフとヲロシヤの船頭せんとうと、重吉にいひ聞すやうは、イギリスの船頭せんとうは、重吉を日本へ返す心は更に無し、留おめて置おいて一生いっしやう水主かこにして使つかふ積り也、若もし日本へ歸りたく思おもはゞ、ベゲツベグに別わかれてこゝに留とどまるべし、我方わがはたには船四十六艘ふねよじゅうじゅうろくあれば、何れの船ふねにてなりとも、日本へ送り遣つかはすべし、もし又數千里の海上うみを經へて歸國きこくする事なれば、又も危あやうき事もやあらんなど、心元こゝろもとなく思おもふならば、こゝに留とどりて船頭せんとうになるか、それも心に叶かなはずば、此城このしろの主ぬしなるとも心の儘ままに斗たたからひ遣つかはすべし、いつまでもベゲツベグに従したがひ居ゐたらば一生いっしやうを誤あやまるべし、其上そのかみ日本を出でて年月としげふ艱難かんなんをし、昨日きのふも今日も故郷こきやうをのみ思おもひ暮くらしては、終つひには病やまとなるべし、先一たびは故郷こきやうを忘わするゝやうに、氣きを持もかへ、心こゝろを慰なぐさめ樂たのみて、身みをすこやかに持もてこそ、今迄いま生のいきびたる甲斐かひはあれ、されば此六人の女このむすめの内うち、何れなりとも参まゐらすべし、何れが心に叶かなひたるぞ、とも角かくも今宵このよひは夜もふけたれば、こゝに宿とどまるべしと、いと懇ねんごろに言いひけるを、重吉は、

イギリス詞は少し覺えたれど、思ふまゝの事を言ふまでにも至らぬ事なれば、言わけをするに殆ど困りたり、只つらく思ひめぐらすに、けふ初めてこゝに來りたるを、イギリスの船頭を歸らしめ、我をのみ留め置てかく言ふは、誠の親切にはあらず、今宵此女と共に爰に宿りなば悪かりなんと思ひ定めて、又心の内に金比羅を祈念し、いかで今の難を逃れさせてたび給へと深く念じ、扱、いろく言ひやうを工夫して答ふるには、いかにも忝き仰せごとには侍れど、けふ爰へ参るだに、船に残りたる二人の者は、心細く思ひて泣むたるを、皆々歸りて我一人爰に留りなば、二人の者ども如何にか歎き侍らん、それともに、是非と仰せあるならば、二人の者も爰へ呼よせて給へかしといひければ、左は言はずと、先々今宵は此女の内を相手にして、爰に宿れど強て言ひけるを、とに角に、留りては悪しからんと思ひ、左あらば昨日は二人の者も連れ來り、我が手道具をも携へて参るべし、今宵は兎も角も船へ返して給へかしと強て言ひければ、然らば、あすの朝は迎ひの人をやるべし、必ず來れと言ひ出ければ、

此詞は違へじと、かたり契りて、寅の時斗りに、ヲロシヤの二人ともろ共に、辛うじて船へぞ歸りける、船の中にては、皆々寢入りて居るやうすなり、扱聞へ入てつくづく思ひめぐらすに、さはいへ、もしベゲツの心底、バラノフの言ふに違はずば、いかにせん、今迄ベゲツの心を取りて隨ひ居るも、日本へ歸りたき斗りにての事なり、然るに返す心なくば、ベゲツの機嫌を取りて居るは徒ら事なり、されば一先づ此國に留りて、二三年も學びたらば、天文をも覺ゆべし、天文地理を覺へたる上は、日本へ行く事も易かるべし、其時船頭となりて、此所の者をいつはり、日本へ行て交易をして來るべしといひて、羅紗類皮類などをあまた積込み、日本へ歸り、扱水主等は長崎へやりて紅毛へ送り遣し、船は我物にして、日本にて富家になるべきか、又は同船の人は皆々死したるを、我はかく生のびたれば、又も恐ろしき海上を経て歸らんよりも、北より三人めの女は、日本にても見も及ばざりし程の美人なれば、かれを我が妻にして、バラノフの言ふに任せて此國に留り、豊に一生を終るべきかなど、迷ひ來り

て様々に工夫する程に、夜は明けたり、例の如く食事も終りて扱思ふに、何れにも、バラノフ、此くまで懇ねんごうに言ひきかせたる上は、行て頼たのまんと思ひなりて、迎むかへの人の來るを待て、岡をのみ眺め居たるが、又思ふに、去り乍ら、今までベゲツの厚き恵みを受けて、今事のよしをも言ひ聞かせずバラノフの方へ行かんは宜しからず、一たび此事を言ひ聞かせての上にて行んと心付き、ベゲツに向ひ、そなたは、日本へ連れ行くべしと言ひ給ふは偽いつはりなりといふ事を聞たる上は、我は此所に留るべしといひければ、ベゲツ大に怒り、その由を糺し聞く、よべ城中にてバラノフの言ひし事を包まらず語り聞かせければ、ベゲツ打笑ひて、扱々そなたは愚なる事を言ふものかな、バラノフの言ひたるを誠と思ひ、此國に残りなば、必ず日本へ歸る事はなるべからず、我行てバラノフには、よき様に言ひ斷るべし、必ず心惑はす可らずと云けるにぞ、始めて心定りて、我ながら、人間の惑まどひ易やすき事を恐れたり、かくてベゲツは、城中へ行き、いかなる筋すぢに言ひ取りたるか、程なく歸り來りたるに、其後又々バラノフの方へも四

五たび行けれども、さる事はそれ切りにて、其後は何とも言はざりけり。

此所へ逗留どちゅうの中に、かのインジンの人、何か交易に來りたるに、このアミシツカの向ひに嶋あり、そこに何かは知らず、赤き實みのなりたるいちごのやうなる木あり、それをアミシツカの女三人行て取り居たるを、インジンの人其女を三人ともに連行たり、其後アミシツカにては、又もインジンの人の來るを待ちける程に、船四五艘に五人斗りづゝ乗て來りたるを、悉く捕とらへ縛りて船共に岡へ引上げて有る所を、重吉見たりとぞ、かゝる事のみならず、折々來て色々の亂暴らんぼうをする故に、バラノフの構かまへわきていかめしく備へて、門も三重にかまへ、鐵砲は、常に玉を込て置くことなりとぞ。

漂客の爲めに航路を變更す

かくて、ヲロシヤ船五艘の船頭とベゲツと寄つどひ、咄はなしの序ついでに、ベゲツは、こゝよ

り又もどのノーハイヌハンヤへ行、それより廣東南京の方へ交易に行く船なれば、重吉は、かしこより日本長崎へ行く船に頼みて送り遣はさんと思ふ由を語りけるを、ヲロシヤ船頭ども聞て、それはいと廻り遠し、今はヲロシヤと日本と睦しくなつたり、殊にヲホーツカには、日本人も居る事なれば、(是は仙臺の善六が事なるべし)そこへ連行て、蝦夷より日本へ送り歸す方然るべからんと言ひ出しければ、ベゲツもそれにては、我は廻り道なれど、それは厭はず、そのかたにしたくは思へども、此湊へ入たる船順に、交易をする習ひなるに、ベゲツの船は跡より來りたれば、皆々交易をし果てたる上ならではなりがたし、さては其内には、海水りてオホーツカへは行きがたし、是によつて、重吉を連れ行かんが爲めに、船の掟を曲げて、皆々より先へ交易をさせ呉れよと頼みけるに、皆々ゆるしければ、喜びて交易を始めたり、鹽酒鹽硝の類を、イギリス船より出して、皮類をアミシツカより取て船へ積入れたり、獵師ども、獵虎の皮などあまた積入たり。

廣東南京の方へ行べき船を、重吉が爲めに、蝦夷の方まで乘廻し來らんは、いか斗りの廻り道にか有らん、是にてもベゲツが恵みの厚き事を知るべし。

アミシツカに凡四十日斗り居て船を出したり、そこより午未の方をさして四十八日走りて、四十八日めに、ヲロシヤの領國アジャの内カムサスカ(加摸西葛杜加)の鼻へ來りたり(此間凡四五千里なるべし)蝦夷まで二十三島つゞきたり、ヲロシヤにては、此島の事をクリ、と云、日本にては奥えぞ、常盤の國などいふよし、此二十三島のうち二島はえぞへ近くて日本の島なり、二島共に人住む、ヲロシヤ領の二十一島のうち四島は人住めり、其外は人の住まぬ島なり、此島々の間凡五里十里、中にも遠く離れたるは二十里もあるなり、此島の間を通りぬけてヲホーツカへ行くなるを、霧深くして海上見えわかず、たま〜霧晴るれば風あしくなごして行かれず、五七日船を止めて見合せたれ共、風よければもやか〜り、晴るれば風あしくて、いつ迄も船を出し難し、ベケツがいふには、かくて此所に日數をふる程に、海水り來れば跡へも先へ

も行かれず、こゝより北へ三百里斗り行けば、カムサスカのカワニ有り(湊の事なり)そこへ行て聞合せ、日本へ通路あればよし、若なくばヲホーツカまで陸路を行べきかと云ふ、何れとも好き様にと頼みければ、又そこを船出して、北の方へ三百里行て、湊の入口へ着きければ、石火矢一つ放ちて船しるしの旗を立てたり。

惣じて異國にては、十文字を書たる旗を立てる船は、軍船にては無しといふ印しなりとぞ、其外、けふは何の日けふは何々の日とて、いろ／＼の旗を立てる習ひなり、扱十文字は切支丹の像のはり付柱の形にて、何にまれ彼にまれ、とかく此十文字のしるしを付ける事多しとぞ。

カムサスカ港にて高田屋の評判

こゝより湊まで三里斗り也、湊よりは、石火矢の音を聞て、遠目かねにて見定め、橋船二艘に水と鮓とを積入れて迎ひに來りたり、此船へカムサスカの代官イリヤメー

テ(苗字なり)ルダカウ(名なり)と云ふ人乘り來りベケツと懸合をする様子なり、随分こゝより日本へ通路よし、先々湊へ入れと云ひ、かくて湊へ入れて碇をおろしければ、件のルダカウ、日本詞にて日本人と呼びける故、重吉出でて對面したり、ルダカウいふには、兵庫の高田屋嘉兵衛を知つて居るかと問ふ、知て居る由を答へければ、かれも無事にて日本へ歸りたり、今は日本とヲロシヤと軍もなし睦しくなりたれば、互に喜ばし、猶語らん事も多ければ、あすの朝來るべし、迎ひの人をおこすべしといひて、日の暮れる頃になりたれば、ルダカウは歸りぬ、かの嘉兵衛がヲロシヤへ行たる事は、兼て聞き居たり、今は日本へ歸りたりと聞く、いかにかしたるなど思ひつゝ臥しにけり。

此兵庫の嘉兵衛といふものは、元は鳥目貳貫六百文ならでは無かりしを、蝦夷の事にかしづらひて、様々の工夫を仕出し、今はえぞ地の事をうけ合ふ人となりて大船十七艘持ちて、大阪江戸にも出店を設け、松前箱だてにては、凡間口三十間

ばかりの家をかまへ、年々運上壹萬兩ばかり宛も出すやうなる大富家になりたり、さきにロシアの船をぞへ來り、亂暴せんとしけるに、其船へ乗てロシアへ行たる大豪傑にて、ロシアにても、斯る人は稀なりとて、ロシア人も折々言ひ出して舌を巻きて居たりとぞ重吉かたりき。

明くるあしたになりて、ルダカウより迎ひの人をおこせたり、重吉一人伴ひて、ルダカウの許へ行き、椅子にかゝりければ、何くれともてなし、扱日本の品を見せんとて、江戸の錦繪忠臣藏の十段つゞきの繪を出して、これは嘉兵衛にもらひたりとて見する、又是は都ベトロブへ遣はすべき物なるが、見すべしとて、嘉兵衛が許よりおこせし消息を出したるを見れば、此國へ來りし時世話になりたる挨拶、扱此上、日本の人漂流して、其國へ着たる者あらば、日本へ送り返して給へかしといふを書きて、ロシア御代官ルダカウ様高田屋嘉兵衛とあるを見て、今は心安しと思ひたり、扱、我等も、日本へ送り返して給はんやと言ひければ、元より送り返すべけれど、今年はや

り難し、今年も薩摩の人三人、この船にて送り遣したるを、程なく海の凍る時節になりたれば、船の通路止まりて、來年の夏に至らざれば、船出し難く、今は軍も無し、心安くこゝに逗留して來年の夏を待つべしとぞいひける、比は八月十五日ばかりの事も、船は湊に懸り居たれば、重吉は日々陸へ上り、所々見歩いては晝のしたゝめに歸り、又出ては晩には船へ歸りて休みけり。

異境に日本人に逢ふ

かくて、九月の朔日比になりて、湊口に、ロシア船一艘見えたり、ルダカウに問ひきけば、あれこそ日本人を送り行たる船の戻りたるなれ、あの船入津すれば、米も來る筈なれば、心安く思ふべしとて、扱迎ひの船をやる、三里斗りの所故、夜の子の時斗りになりて湊へは入りたり、イギリス船よりも、手傳に行きたるに、此入船の中にも、日本人三人居るといふを聞て、なつかしく思ふに、かの船の中なる三人も、

こなたにも日本人三人居るといふ事を聞て、逢たく思ひ居たりとぞ、あくるあした陸へ上り、濱邊にて出會たるに、互にヲロシヤの衣服は着たれど、日本の人とはしるければ、古さと人などに逢へらん心地して、睦ましくなつかしく覺へて、打つけに互に抱きつきたり、扱そなたは何方の人なるぞと問へば、我々は薩摩の國の者なるが、吹流されて此國に來りたるなりと云ふ、猶さつま人の吹流されたるやうを委しく問ひ聞けば、船頭は喜三左衛門といふ者なり、其弟角次郎に左助といふ者と三人なるが、我らは琉球國へ、十七年斗り通ひしに、こたびは薩州の御廻米を積て江戸へ來るとて難風に逢ひ吹流されて、えぞの沖にて水船になりて、六ヶ月ばかり漂ひ居たり、米はあれども寒きにたへずして、十三人死したりといふを聞て、扱は我等も同じ事也と痛はしく思ひ、扱その死骸はいかにし給ひたるぞと問へば、かたはしより海へ投げ込たりといふにぞ、同じ日本にても、薩摩の人の氣強き事を思ひたり、それより残り十二人、橋船に乗て四十日めに嶋へ着きたるに、夜に入りたれば、島かげに船を停めて居る程

に、西風俄に東風に變り、嶋へ打付られて船碎けたり、辛うじて六人嶋へはひ上りたるに、其内三人はこゞへて死したり、三人生残りて、岩の洞の中に住ひ居て、木ノ芽海苔などを取食ひて、四十日斗りはそこに居けるが、かくては命も續くまじとて、一人は病人故残しおき、二人連にて島をめぐり歩く程に、二里斗りも行て、鳥の羽にて作りたる服を着たる人に行逢ひたり、詞通せざれば、色々と手品をして見せけるを、心得たる様子にて、こなたへ來れといふ様にて、連れ行けるに、此嶋は、家は無く、穴の中に住居して、鳥の肉鯨などを捕て食物とす、こゝは、かの二十三島の内ヲロシヤの領する所にしてウンネコタンといふ嶋なり、その穴の中にて一夜を明かし、残し置たる病人も、又の日連れ來りて、そこに一年斗り居けるが、あくる年になりて、其人、このカムサスカへ連れ來り、こたび日本へ送られ行きしに、奥えぞのエドロフ島近き所まで行きけれど、風あしくとて引返し、又こゝへは戻り來りたるになんと語る、重吉も我身の上の有増を語り聞せければ、扱は國は異れども、同じ日本の人なれ

ば、こゝにては、親兄弟も同じ心に思ふ也とて、互に喜びあへり、扱此人々と一同に、ルダカウの許へ引取て、六人一所に一間をかし渡して同居せしめけり、かくて十日斗りを経て、イギリスの船頭ベゲツ書役ベネツ、外に黒坊壱人、都合三人残りて、船はエベツ・エデメツなど假船頭になりて、この湊を出帆したり、いかなる事にかと思ひ居たるに、又十日斗を経て、薩摩の船頭喜三左衛門がいふには、我等三人は衣食ともに、ヲロシヤ國王の御賄なり、然るにそこだち三人は、イギリスの船頭の賄なりといふを聞いて、いぶかしく思ひ、扱て、そなたは、ヲロシヤへ、何をか獻じたるにやと問へば、否ざる事は無しといふ、然らば我等も同じ事なるべきを、それは若し間違ひにては無きかと言へば、然らず、確に聞たりといふにぞ、重吉いたく腹立に思ひ、薩摩人はヲロシヤ人の恵みを受け、我等は其事なしにては、日本へ歸りいぶかしく思はるゝとも言ひ譯なかるべし、これは此所にて、ルダカウの下に付て日本の事を取扱ふランデレイワンといふ者あり、何事もこの人取扱ふ事なるに、薩摩人よりは、賄に

ても受けて、此くは我等を卑むる事ならんか、いかにしても憎き振舞なり、此事を言ひても、猶我等を取もたずば、髮剃もてなり共殺さんと思ひつめ、ランデレイワンが許へ行けるに、今は役所へ出て留主なりといふを、呼にやれと言ひければ、大將が來りたりとて呼びにやる。

惣じて日本にては、頭に立つ者を大將といふと心得たるにや、重吉も船頭なれば、是も大將なりと思ひて言へるか、皆人重吉を大將々々を呼びける。

程なくランデレイワン歸り來り、何の用がある、不自由があるか、砂糖が無いかなど、いと懇にいふを、重吉は、つら付悪しく、聲を怒らして、そこ元は薩摩人より如何なる物を恵まれたるといへば、何も恵まれたる覺へは無しと答ふ、然らばさつまの人のみを厚く取扱ひていかで我等をば世話をせぬといひければ、ランレイワン云ふ様、それには故ある事なり、兼て都よりの仰せには、ヲロシヤの領分の國々へ、いづくの漂流人來るとも、厚く取扱ひて本國へ送り遣はすべしとの觸あり、さつまの三

人はヲロシヤの領分ヲンネコダンへ着たる人なり、そこたちは海上にて、イギリスの船に助けられて、こゝに來りたる人なれば、その事をカムサスカの役人より、一たび都へ伺ひたる上ならでは、本國へ送り歸す事もならず、扱都へ伺はんには、早飛脚にても九ヶ月掛るなり。

こゝより都ベトロブまで、日本の里數にして凡四千里斗りありとぞ、此カムサツカよりヲホーツカまで三ヶ月、ヲホーツカよりユクーツカ迄又三ヶ月、ユクーツカより都迄又三ヶ月かゝるなり、仙臺の善六といふ者、今はこのユクーツカにて、カピタンの娘を妻にして、日本通詞になりて居たとぞ。今の名はイハンオロキセイキセロフとぞいふなる。

されば、往來には、十八ヶ月を経ざれば都の差圖も知れざる由をベケツに語りけるに、ベケツの云ふには、さては來夏氷解けて、薩摩人は日本へ歸るを、我が連れ來りたる三人こゝに残らば、いか斗りか歎き悲むべく、且は慣れぬ寒國に長居せば、病を

生せんことも斗りがたし、旁不便に思ふ也、此上は、都へは内々にして、是非六人一度に歸しくれよと、ルダカウに頼みし故、さては、來年迄の三人の賄はベケツより手當はするかと言ひしに、如何にも來夏までは、衣服食物迄も我賄はんといふ、さるにても薩摩人は、こゝより送り行て日本へ引渡すなるを、尾張の三人は、そなた送り行て引渡すより外なし、此事は如何にと言へば、それも心得たりと受かひたれど、さては、交易の方、こよなふ遅るゝ事なれば、それ故にこそベケツは、此所に留り、船は假船頭にて廣東の方へやりたるなれど云ひけるにぞ、重吉は、思ひの外に初めてベケツが圖らひを聞て驚き、懷に入れたる髮剃も耻かしくなり、斯くまでベケツが深切を盡す事を深く感じ、涙を抑へてぞ歸りける、かくて、薩摩人と一所にルダカウの許に居て、ともに今年の夏をのみ待ち暮らしけり。

氷海と雪中生活法

カムサカスに逗留の中、見聞及びし事ども、くさく有るべかんめれば、其片はしをだに聞かまほしと言ひけれど、辛き思ひをしたる事は、月日は更なり、時をさへも忘れず、心に染みたれば、かくさまにまねび出る事も滞らずものしつるを、大がたの事は、事にふれて思ひ出す折もあれど、いでまねび出んとしては、何事にまれ、ふとたにも思ひ出しがたきわさになん、五日も十日も一所に居て、何くれとのごやかに、大がたの物語りをして、その事にふれて、とありかく有りしと、その糸口に引かれては、つぎ／＼に思ひ出す事もあんなるを、斯くかりそめの對面にては、何一つ語り出さん事も難き業になん侍ると、重吉いひけるにぞ、飽かぬ心はしつれど、あながちに聞くべき手だても無ければ、聞もらしつ、されど五たび斗り對面しつれば、中には、事にふれて言ひ出たる事ども、有りけるを、拾ひ集めて此所に記しておくになん。

ベゲツの養ひを受けて、かく月日を送り居る事を、心苦しく思ひて、カムサスカの人に其の事を言ひ出しけるに、惣じてフロシヤ國風は、人を助ける事を第一とすれば、ベゲツが物入り有りても、其事上へ聞ゆれば、たとへば十金の費あれば、上より二十金給はる事なれば、穴がち心を痛むにも及ぶまじとぞ云ひける。

カムサツカの海は、氷海に續きていと寒き所なれば、九月より明くる年の四月迄は、海面に厚さ一丈斗りにも凍りて、船の往來はなりがたし、五月にはや、氷解けぬれど、碎けたる氷、風にてこゝかしこへ吹き寄せられ、一かたまりになり、小さき島のやうになりて海の上を流れ歩く、之を冰山といふ也、常の岩山よりも、堅くするごとにて、走り船のそれに行當れば、船を甚く損ふ故に、六月に至らざれば、船は出さず、六月より八月まで三ヶ月の間ならでは、船通はず、それ故に、惣じて北アメリカのわたりを乗廻る船は銅もて張りつめたる也。

此國、冬は雪三丈五六尺斗りも降り積る故、いづくにも家は見えす、煙出しより煙の立つを見て家なんめりと思ひて行て見れば、家の入口へ下り行く道あり、是は雪を

削りて雁木を付たるもの也、家は惣じて大きな材木を積み上げて作りなし、所々に窓を明けて、その窓はぎやまんにて張たるもの也、屋根も同じく材木を組ならべ、其上へ砂を三尺斗りも置たるもの也、まれには小屋などには、板にて葺きたるも、又かやにて葺きたるも有る也、床は板敷也、座敷の入口は、一枚板にて観音開きのやうにして、上下へ羅紗の切れを張りたる也、其そとに又一つ入口の戸ありて、其そとの雪を斧をもて削り、雁木を付けて上へ昇るやうにしたる物也、扱座敷の内には、瓦を焼く釜のやうなる物を作り置て、其中にて火をたき、（此火をたく所にて様々の物を煮たきする也）屋根へ通りたる煙出しより煙を悉く出し盡して、雪の降り込まぬやうに蓋をし、扱火をたく口を塞ぎて、くるりに幾つもある穴より火氣を出すやうに仕かけたり、此穴より出る火氣にて、家の内にては寒氣を覺へず、いと暖にして汗はむやう也、扱、雪は、日々ふる故、夜の間に、穴の前へ積りて、窓暗くなる故、毎朝出て、斧にて雪を切り拂ふ也、道は、いづく迄も、家々の屋根の上を通りて行く事也。

冬、路次を歩くには、ヲレン（鹿の事也）の皮を毛のまゝにて仕立てたる雪合羽を着る也、頭より裾まで一つゞきに仕立て、裾へ頭を入れて引かづぎて着る也、顔の所には穴ありて、額の所へはミツベチ（熊の事なり）の腹ごもりの毛を植て、顔へ雪の降り掛らぬやうにしたるもの也、手へは革の手袋をはめ、足へは水中に住む獸の皮にて造りたる沓をはく也。

水獸の皮は、水へ入れても伸びる事なし、山に住む獸にても、雪の内にて育ちたる獸故、水に入りても日本の獸の皮のやうには伸びぬなり。

犬そりの奇観

扱、そりに乗て犬に牽かせて歩く也、雪船をサンカと云ふ、木を二本堅に並べて、其上へ炬燵やぐらのやうに組立て、中を高くして、跨ぎて乗らるゝやうに作り、皮にて作りたる綱を付け、其綱を犬五疋か六疋にて牽かするに、よき犬を先に立てゝ、二

かはに立て、引かす也、後に立る犬はあしくてもよし、四つ辻に至れば、犬いづ方へ行んと差圖を待て居る時、カツ／＼と云へば左へ行、ホガ／＼といへば右へ行、ヒコ／＼といへば直に行くなり、ア、／＼といへば止るなり、棒の本の方を尖らし、頭の方へは錫杖の如き鐵の輪を付けたる物を持って、木などへ行當るか、又は片つらへ寄り過なごする時、其棒の本にてこじて直すなり、犬の進まぬ時は、それを振り上げて鐵輪をから／＼と鳴せば、先に立たる犬進み出すなり、かくしても進み兼る時は、エツカナイ（泥棒めなどいふ事なり）エヒヨーノマツ（忌々しい奴などいふ事なり）ソバカ（犬といふ事なり）といひて、前に立たる犬を彼の棒にて打てば、さきに立たる犬かけ出す也、先に立たる犬は、良き犬を良く仕込みたるならでは宜しからず、雪の上のみを行なれば、其中にも人々ふみならして一筋かたまりたる所を行くに、もし傍なる和らかなる所へ半分かゝれば、そり横さまに倒れて人も横さまに落つるを、犬はかまはずむせうと引て行くを、先に立て行く人あれば、とめてくれる

事なり、下り坂になれば、かの棒を前へ押かひ、相しらはざれば進み過るなり、一軒の家にても、是は誰が犬、かれは誰が犬とて、銘々に食を與へて飼ひおく事なり、食はセリジ（にしんの事）を五つ六つ宛もあたふるなり、遠方へ行く時は、前夜に入つ九つ斗りも食はせ置て、其朝は、先へ行つく迄たせせぬなり、早く行て食べんとて急ぐなり、犬を持たぬ人、遠方などへ行くには、親しき人の犬を借りて行く也、其時は、前夜にこなたよりセリジを持行てたべさす也、カムサスカの西の方イチカ、キ、リの邊にては、ヲレン（鹿）にひかす所も有るぞ。

トロハ（薪の事なり）を取りに行くも、同じ様に犬に引する也、是は、木を數多積むやうに大きに作り、人は木を積たる上へ乗やうにしたるもの也、是をナルタと云ふ、犬なき者は、木を二本斗りづゝ雪の氷りたる上を自ら引く也、氷解けては左るわざ出來ぬ故、木をきり薪を取る事は雪を待て物する也、重吉八月頃に行て見たるに、所々に木の切りたるが有るを、何れも中程より切て根元より切りたる木は無し、不審に思

ひしに、雪に埋もれたる時のみ切る事故、雪解けて見れば、皆中程より下つ方残りたるなりけり。

ボソレツカと云ふ所の川のほとりに、木賊あまた生たる所有り、木賊と蓬とのみは、日本に在る物と聊も異らず、其餘の草は見馴れぬが多し、木も目なれぬ木のみ多し、松は何れも四葉にて、大なる松かさあり、其種を、子供などはいりて食す、日本にて朝鮮松のたぐひなり。

日々米を食ふ國あるべきや

米をフナと云ふ、飯にたきたるをカーサと云ふ、廣東の邊より交易して來るなり、廣東にては、二ヶ月の間に米實るを先づ其穂を摘む也、又枝出で、二たび實るを取り、一年に二度米をとる也、細長く小粒にて我國のしるなど云ふ物の様なり、米は、格別の祝ひ日などには、少しづつ堅きかゆの様にたきて食す、常には小麥の團子と獸

の肉とのみ食す、團子の生なる時を、ヒレフハン又はヒレツバと云ひ、枯れたるをソハクといふ。

重吉、又の年日本へ歸らんとする程に至りて、この水主等がいふやう、そなたは、四五年故郷に居給はぬことなれば、定めて牛は澤山にふへたるべし、飽くまで食ひ給ふべしなごいふを、何しに牛を食はんと云へば、さては、何を以て命をつなぐといふ故、米を以て命をつなぐと云ひければ、日々米を食ふ國が有りてこそ、偽りを言ふにも限りの有ることなれど、言ひて笑ひあへりぞぞ。

鯨をカンバラといふ、石鯨の大きなるやうにて、龜の甲の如き固きもの付たり、アミシヅカにては、疊三疊敷位の鯨を食したり、身いと柔かにてさしたる味ひもなし。

魯語の誓古に勉む

重吉初めの程、詞の通せぬには大に困りたるを、いつしか自ら一つ二つ宛覺へ來

りて、後には可なりにも用も辯じたり、そこに有りあふものを見せて、是は何といふぞと問へども、何かすまぬ顔つきのみして通せぬ様なりけるに、ふと、あなたより問かくるに、物を出してカクナといふを聞いて、それよりは、こなたより問ひ聞くにも、ものを出してカクナと言へば、何々と答ふる故、さまざまの事を書き付け置て、其品々を出しては、カクナ〜と言へば、つぎ〜に其名を言ふを、その書付置たる下へ、書加へては覺へたり、やう〜に物の名も又は詞をも覺へ來り、かの國の人の物語りするをも、少しづつ分り來りたる時には、いと〜嬉しく、日々にそれをたのしみにして、こなたよりも咄なご仕かけて見るに、後には大かたの事は互に通じたり、初の程、人の許へ行てけふはよき天氣なり、いかに物し給ふぞなごいふことを、ドブラ、ゲン、ドロマ、ダランといふ事を覺へて人の許へ行き、ドブラゲンドロマダランと云ひたれば、サデシ〜と云ふ故（是は椅子へ腰をかけ給へなり）椅子へ腰をかけたり、扱、あるじ様々の事を言へど、更に分らざりければ、物も言はず其まゝ居たれば、

テウセルゼースカゼガウリンとくり返し〜言へ共、猶分らねばせん方なく、其まゝ歸りたり、程へて覺へて見れば、テウセルゼースとは、何を腹立つといふ事、スカゼとは咄の事、ガウリンは物言はぬといふ事なり、何を腹立てお咄もせず、物も言はぬぞといひたるなりけり、後には、肴なご食べ盡して、貰ひに行く時には、モヤ、ド
ン、イレバ、ソクセン、ソーニダバイ、ランナといへば、先の人、ランナ〜ヲジメ
といひて肴を與ふる時、こなたより、ヲロンノダイウウダイ、ホロツシヤエ〜とい
ひて持歸りしとぞ。

人の許へ行、テウヲロボタイなごいへば、ヲルバカマセイなど答ふ、ニチウと答ふるは、何もせぬといふ事なり、又はヲルバカマモイなごいふ、モイとは洗ふことを言ふ、湯に入に行なごいふを、バニヤモイと云ふなり、スカゼは咄といふ事なるを、昔ばなしと云ふ時は、スカ〜スカゼと云ふなり、惣じて發語の詞に、ナアといふを付けていふ事多し、船をスーナと云ふを、ナアスーナといふ類なり。

女の名は何れもヒョードロイハノブナといふ事付くなり、是は我國の婦人の名にお
文字を付ける類也、ヘクラヒョードロイハノブナ又はアブドツチラヒョードロイハノ
ブナなどの類なり、常には只ヘクラ又はアブドツチラなどのみ呼ぶなり。

數は ヲヂン^一 ツワー^二 テレー^三 チエテレ^四 ヒヤーチ^五 セーン^六 セン^七 ヲーセン^八
デビチ^九 デセツ^十 スト^百 デーセヂヤ^千 デヤデーセヂヤ^萬

笑ふ事と泣く事のみは、何方まで行てもかはる事なし、日本にてあい／＼といらへ
をするをエシ／＼といふ也。

過し年、松前箱館へ來りて服部君高橋君などの前へ出たる水主等、寄つごひて酒の
みたる上などにては、折々其時の様をまねび戯れけり、服部君を大將と見受けたる故
か、とかく我服部ならん、いや我こそ服部になるべけれなごいひ争ふなり、誰は高橋
になれ、それは村上貞助になれ、嘉兵衛はこゝへ來りたる時には、ゆへ／＼しく見へ
たれど、日本にては見る影もなく居たりなごいふ、さて各なみ居て容をいかめしく

して、ニッホン^日ツケ^本服部伊賀守高橋三平^金ゾロタ^衣ハラア^服テイ^金ゾロタ^{かぶりもの大小}サブカシ^はフカセ^ルセエス^{なごいひ}てまねびしとなり。

日本は小さき島なれど、神の國ゆへ、たやすく手ざしはならぬといふ事は、そこか
しこにて云ふを聞たりとぞ。

年齢 日本圖 あざらし狩 氷酒

年齢は、皇國のやうに、去年の大晦日に生れても、二歳になるなごいふことは無し、
そなたは幾つになるぞと問へば、誕生日よりかぞへて、けふは廿三歳五十二日になる
なごいふ也、扱閏月といふものはなくて、一ヶ月の日數をさまざまに立て、一周年は
違はざれども、二月には五十日の事もあれば、又三月にて百日の事もあるなり。

ルダカウの許に、日本圖のいと委しき有るといふことを聞て、ランデレイハンに、
うち／＼に乞ふて見たるに、いと大きな繪圖にて、其鮮かにこまやかなる事、目を驚

かしたり、薩摩の國の内何とかいふ所なりしが、其國の人だに行て見たる者はなきを、此圖には、そこさへいと委しく書てありとて、薩摩の船頭も、始めて見て驚きたりどぞ。海面の氷へ、夜の中に穴をあけて、其穴よりあざらし夥しく氷の上へ出たる跡にて、其穴又氷り塞りて、水中へ戻ること叶はず、夜明けて氷の上をはひ廻る所を、人々あまた出て追廻し、打殺すを重吉も見に行けるに、よき慰みにてありきどぞ。過し年、えぞへ來りて亂暴をしたる時、酒樽を奪ひ取て持歸りたるに、酒氷りて出でざりければ、樽を打碎きて酒を出したれど、樽の形に右の如く凍りたれば、斧を以て酒を打割りて目かたにかけて賣りたりどぞ。

口をなめる祭と雪滑り

三月に、切支丹本尊の祭にてもあらんかと思ふ事ありて、皆々二三日前より肉などは食はず、精進をして、扱寺の前へ里中の人々何れも出て居る所へ、代官出來り、數

多の人々の口をなめるなり、此事終りて、扱皆々行あふ者、人々の口を互になめる也、重吉も見に出しに、誰となく寄來りて口をなめる故にげ歸り、三日斗りは外へ出ざりき。

此く口をなめる事は、互に聊かも心に隔てなく、打どけたりといふ誓ひなれば、一、里の人々互に一人も心に隔てある者は無しといふ事を誓ひてするわざと見えたり、さきにアミシヅカにて六人の女の口字をしたるも、隔てなしといふ心底を見せたるなるべし。

扱、四月になりて又祭りあり、こたびは七日斗り前より精進をして其日は寺にて大なる半鐘と小さき半鐘とを終日打ならず、扱高き山と山との間へ、幅十間斗り入口になつたる所あり、山も雪にて凍り、入口も厚く氷張りつめたるを、その南方の山の巔より麓の入口まで梯子を掛けたるやうに、こよなく長き板橋をかけ下し置けば、一夜の程に、其上へ雪の積りて氷りつくを、少しの高低もなきやうに削りて平にして

良く滑るやうにするなり、扱當日になり、代官出きたりて、體の乗る斗りの小さき雪船を山の巔まで持上り、巔に至りて其雪船に乗り、かの巔より麓の入口までかけ下したる橋の上を、一さんに滑り落るなり、それより一里の男女悉く出て、兩方の山の巔より、同じ様に滑り落る、こなたより滑り落たる者は、上より一たんに落たる勢にて向ひの山の岸まで滑り行き、互にかくする事故、中には行當りて又横の方へすべるも有り、ふと過つて橋の中途にて、そり横に傾けば、とんぼう返りをして下まで横さまに滑り落つるもあり、又は若き者ども、酒に酔なごして、牛の皮に二三人づゝも乗り、女なども乗せて、三味せん弾きながら滑り落るもあり、それも中には、物にさはりなごして横になり、男も女も横さまにころび落るもあり、麓より嶺まで登るには半時ばかりも掛りて登るを、只一たんに入口まで滑り落るなり、此日はいとく賑はしく、珍しき見物にて有りけりとなん、此祭り終りて後、七日斗りの間、上より綱にて木をつけさげ、それに乘て彼なた此なたへ、ゆらりくといゆるるやうの事を

する也、いかなる故有る事にか知り難し、扱祭りの日ならでも、此山へ童又は女などをも連行て、戯れに滑り落るなり、常は少しづゝの高低あれば、すべり落るとて、少し小高き所へ當れば、空へ飛び上りて、向ふへ落ると其まゝ、又其の勢ひにて激しく滑る也、いと面白しとぞ、身にはかの雪合羽を着て、手袋をはめ、沓をはく故、けが杯する事はをさく無しとなり。

十月比よりは、つり鐘も半鐘も氷りて響出す、大かねもコン〜といひ半鐘などは只チャ〜とのみいふなり。

密夫と妾と病院

此國の人、妻の密夫有るは左のみ物しとも思はず、未だ主定らぬ娘に密通すれば、娘に疵を付たりとて、甚しく憤るなり、密夫有れば、その男より妻に何くれと心を付けて贈る事故、夫も好き事に思ひて居るなり、夫少しも構はぬ事なれば、妻も密夫

も、夫を左のみ妨にも思はねば、殺さんと思ふ心などは起らず、又密夫をつれて逃るなどいふ事も絶て無し、子を生めば、我が妻の生みたれ、我子也とて、いつくしみ育つる也、惣じて此國のならばしにて、如何様の心に叶はぬふし有りても、一度夫婦となりたる上は、離別をする事は堅くならぬといふ習ひ也、扱ヲロシヤ國王を始め、如何なる貴人にて、富める家にて、妾といふ者は無し、貴人なりとて、妾を數多召使へば、やゝもすれば、家の障りになる事も出くる也、且は子數多あれば、自ら物入多く、困窮に及ぶ也、家貧しくなれば、心の外に百姓をも痛めねばならぬやうになる也、上は下を恵むのみにて、下より恵まるゝ事を深く耻づる習ひ故、下の痛まぬやうに、事の起らぬやうにとの心控にて、國王に妾あれば、下に立つ人の政道ならずとて、國王も妾は召使ひ給はぬ也とぞ。

里々に、病人の療治をする所を設け置て、病人有れば、そこへ行て療治を受ける也、其入用は悉く上より出る也、されば病を受けても命を助かるは國王の恵みなり

とて、深く國王を尊む也、醫師は、病人を治したる數にて、次第に善き所へ移され、給はり物も増すによりて、専ら療治に精力を盡す故、自ら上手も多く出来る也。

國舉て國王を尊み、童子までも、朝起出て先づ都の方へ向ひ、國王を拜むとなり。

恨み憤りを晴らす習俗

ルダカウの家より離れたる所に、預りの寶藏有り、いと長く續きて前廣し、入口に時計をかけ、其下に番人居る、此番人は、近在より、役に當りて代るゝ出て勤める也、或時ルダカウをそこへ行て遊べと言ひければ、三人打連れて行きけるに、かの番人其内へ入る事を免さず、ルダカウより免されて來りたる由を言へども、猶入れずして甚く罵りければ、三人の者は大に憤り、歸りてルダカウに向ひ、何の故ありて我々を彼所へやりて、斯くまで罵らしむる事ぞといひければ、ルダカウ驚きて、これは我が誤りなり、何しにそこ達をたばかりて彼所へやり、罵らしむる事の有らん、是は番

人の心得たがひ也、許してたべくと深くわびけり、此くて明くる朝、三人起出でたる所へ、ルダカウの來るが、ギヤマンの窓より見えければ、朝とくも代官の來り給ふ事よとて、三人はあわて、着替なごして待居れば、やがてルダカウ來りて、三人を表へ連れ行けるにぞ、何事にかと思ふ程に、昨日の番人を呼び出し、二三人にて番人を赤裸にし、柳朶を甘本斗り束ねたる物もて、續け様に痛く打たせ、番人は免し給へ免し給へといひつゝ泣きさけび悲しむを、三人は何の故か知れざりければ、あれは何事にか侍ると問ひければ、あれこそ昨日そこたちに腹を立たせたる番人なれば、そこ達の腹のいゆるまで打つなれといふを聞て、三人は驚き走り出て止めければ、扱は腹のいゑたるにかと言ふを、其時こそ一旦は腹も立たれ、我等故に此く迄辛き成敗をし給ひては、中々に勞敷くて、今更昨日恨みやしつる事思ひ侍るといひければ、扱は聊も恨む節なく、確と心晴れたるにやと、再三聞き糺して後、かの番人を免しやりたり、かくて又の日の番人來りければ、三人は面を見合せ、昨日我々故に辛き目に逢ひた

れば、如何なる恨みをか言ひに來つらんとて入れざりければ、いかで入れてたべかしと、穴がちに言ひける事のわりなきに、心苦しくは思ひながら、座敷へ入れければ、昨日の喜びにとて酒を携へたるなりけり、まして氣の毒に思ひ、さる事にては無しとて受けざりければ、扱は、未だ確と心の晴れ給はぬなんめり、悲しや、又も打れんより外無しと言ひけるにぞ、今は辭み難くて、肴物など出して共に飲みければ、いといと喜びてぞ歸りける、又或時表へ遊びに出ければ、童ども寄集りて、氷柱を取て様々に戯れ居けるに、一人の童子、何心なく氷柱を犬に投げつけゝるが、過つて音吉が額へ當りけり、子供の戯ごとなれば、物しとも思はで歸りけるに、又の日、彼の童の母、その子を連れ來りて、やがて裸にして、續けざまにいと痛く打ちければ、其子わびつゝ泣き叫ぶを、如何なれば、かくは辛き業をし給ふぞと言へば、昨日そなたの額へ、氷柱を打付たれば、そなたの恨みの晴るゝまでは、斯く物するなりといふを聞て、扱は最前の番人の類ならんと心付、聊も恨は無し、わきてをさなき人の戯れご

どにしあれば、何の恨む節ふしか有らんと、返々も言ひければ、又再三たゞき、糺ただして後、喜
びて連れ歸り、程なく鹿しかの股もを携たづへ來りて、厚く喜びをぞ言ひける、なべて此國の人
は、互に聊いさも心の内に恨み憤いきまる事あるを深く嫌きらふ也、されば、喧嘩けんかなごいふ事は先
は無なき也、たま〜有れば、中に立つ人、彼方此方の理非を聞糺たづし、大方争まひは、片
みに理も非も有る習なるを、そが中にも、聊いさも非分ひぶん多おほき方を相手の許もとへ連れ行き、
さきに番人ばんにんとわらべを物しつるやうにする也、いとけなき程より、しなれたる業わざにし
あれば、自ら誰たれにもまけを惜をむといふ事は無くて、早く我が非ひを知りて、先の人の腹
のいゆる迄打うたる也、前にいへる人々の口をなめたるも、一里さとの人々互に一人も心
解とけざる者は無しといふ誓ちかひを、本尊ほんぞんの寺の前まへにてもものしつる也けり。

ある時、この國の人、重吉に砂糖を恵あづかりたりしに、いと品下りたる砂糖なりければ、
斯かる砂糖が食はるゝものかと言ひて投げ出しければ、然らば水主みづぬしだちに與あへ給たまへと言
ふを、わが食はぬ物を、水主等に食はしむべきかといひて、猶も取り合あへざりければ、

持歸りて、やがて品上りし砂糖を持來りしとぞ、重吉國々をめぐる程、人々に惡にくまれ
なば、殺ころされんも斗りがたく、さればとて、餘り彼等が言ふまゝにして、弱よわき様を見
せたらば、日本人は返すまじと思ひて、成りたけ人々の氣を取て居ながら、折々は事
に觸ふれて日本の氣象きさうを現はし、猛たけき事もいひ出たり、あけ暮くれ斯かる心づかひせし事、言
葉に述のべがたしとぞ言ける。

立りつ 禮れい 法ぽう

代官だい官など通る時、人々行きあひて、我國にて下座げざをする杯ないふ時には、足あしを揃そろへ
兩手りやうてを脇わきへ當あて、麗うるはしく立たつ也、その立たる容かたちいとよしとぞ。

出家しゆがのやうなる者をポフと云ふ、是は髪かみも髭ひげもそらず、衣服も、大かたの筒袖つづそでより
は少し大きなり、道にて人に行逢あふ時は、童子わらべに至るまで互に立ち停とどまり、ポフ例れいの
額ひたいと兩肩りやうかたの下と胸むねとへ手を當あて、拜まがをすれば、こなたより手を重ねて出す時、ポフ又

其手の上へおのが手をのせる時、其手をなめて去るとなり。

神佛のやうなるものをボフといひ、それに仕へる出家のやうなるものをボフといひ、獵虎をポフラといふ、同じやうなる詞にて、其品はいたく違ひたるものをいふ也、されば此國の詞たやすく覺へ難かりしとぞ、扱彼の國の詞を、重吉が書付けたる一冊を見せけるに、天地山川人倫生類衣食器財言語まで、つぎつぎに分ちて、數多書集めたるものなりければ、寫し置ましと思ひけるに、一體この國とかの國とは、詞の遣ひさまいとく變りて、一字を二字に書かざれば書取り難きが多し、しかしても、猶音かはり、句の切所も有りて、その書付たるを讀みて見たると、重吉がいふを親しく聞たるとは甚く違へり、されば、寫し取りても何かせんと思ひてやみぬ。

下の巻

歸朝船の出發

明くる年の文化十三年子五月末つ方になりて、やうく氷解になりければ、六人の日本人を本國へ送り返すべき用意整ひ、フワール（船の名なり）といふ凡二千石積斗りなる二本檣のヲロシヤ船一艘外に橋船一艘、長さ二丈ばかり幅四尺斗り深さ二尺斗りにて、大きな丸木の中をほり穿ちて作りたる船也、ヲロシヤの船頭スレズニ、イギリスの船頭ベゲツ筆者ベネツ水主一人、扱薩摩尾張の六人其外便船の者、男女都合六十八人乗なり、此時薩摩の船頭喜三左衛門尾張の水主半兵衛、此二人大病なりければ、熊の皮に乗せて船へ乗移らせ、五月廿八日の頃カムサツカのカワ（湊の事なり）より船を出し、午末の方を指して走る程に、六月十一日に、尾張の水主龜崎の

半兵衛船中にて病死す、いかにせましと、先づ其由をベゲツに告げれば、かゝる時は、日本にては如何やうに圖らうぞと問ひける故、我國にては、其わたりの湊へ入て陸へ上り葬る由を答へければ、さるにても近きわたりに湊は無し、如何にせんと言ひけるにぞ、然らばヲロシヤにては如何に計らひ給ふぞと、ひ聞けば、ヲロシヤにては水葬にするなりといふ、左らばヲロシヤの作法に然るべく計らひて給はりなんと打まかせければ、やがて船底より石を取り出し、半兵衛が死骸に括り付け、扱梯のやうなるものに載せおき、經文と覺しき事を唱へ、扱其梯より、海の底へとぞ卸しやり、梯は引取りたり、さて重吉音吉は、いふも更なりベゲツも、爰まで連れ來り、今少しの事にて本國へも送り届けざる事のあかず口惜しとて力を落し、甚く歎き悲みけり。

死を決して小船を乞ふ

かくてエドロフ、クナジリの沖中に至りければ、船頭スレズニ此向ひにエドロフ嶋

あり、かしこにクナジリ有りなごさし教へけれど、日々霧深くて見え分かず、地方へも近寄りがたく、そこより又日數走り行てやう／＼に霧晴れ渡りたり、海上一里斗向ひに地方見えたり、かしこにエドモといふ湊もありて、松前へは程近しといふ、向ひを見やれば、日本の船二艘見えたり、一艘は間遠く見へたるに、こなたのヲロシヤ船を見ると其ま、跡へ乗戻し、跡に居たる船と諸ともに、いづくへか走り行きたり、日本船も見へたれば、げに松前へも程近からんめりと思ひて、こゝより橋船へ移り、漕ぎ行かん事を乞ひけれども、スレズニ可かずしていふやう、クナシリへおろすべしとの仰を承りて來りたれば、こゝにておろす事はなり難し、こゝ迄來りては、少し來過したりとて、又跡へ引かへし、エドロフとクナシリ沖あひに至りけるに、又霧も立ち風も宜しからずとて、順風を見合せかゝり居る程に、やゝ薪水も盡なんめり、スレズニいふやう、海上手間取て薪水食物盡たり、されど今日十五日斗りの食物はあれど、十日十五日を経て日本の地に至り、食物薪水を心よく與ふるか與へざるかも

測りがたく、且つとや角する程に、又氷海になるべければ、先づ此度は又カムサツカへ戻り、來年は薪水食物を數多用意して送り來るべし、此所より今一たび戻りてくれよかしといふを、重吉は、一通り道理には侍れど、又カムサツカへ立歸り、來年まで慣れぬ雪の中に物し侍らば、皆々必死すべし、此所よりは、松前へも程近しと聞けば、いかで用意の小船を給はりて、我々斗り行くべしといひければ、小船にてはやり難しとて許さず、詮方なく又ベゲツに其由を言ひて穴勝に乞ひければ、是も許さずして扱ふには、とや角いひしろはんよりは、よしさらば、我に伴ひてイギリスに來れかし、南京廣東天竺紅毛、其外様々の珍らしき國々を見せて、七年めには必日本へ歸らしめんといひ出てけるにぞ、重吉も、兼てベゲツを頼母しき者に思ひ居れば、此人に従ひてだに歩くものならば、心安かるべし、珍敷國々を見巡り見んも中々に良かるべしと思ひなりて、扱音吉に向ひていふやう、汝は今年カムサツカに返りて、來年薩摩の三人ともに歸國せよ、我は是よりベゲツに伴ひ、猶も國々を見巡りて、七年め

には必ず故郷に歸るべしといひければ、音吉驚き、我を捨て、そなたのみ行給ひなば、誰を力にしてか年を越ゆべき、さらば、我も共に連行き給へといふも道理なりければ、其由をベゲツに言ひければ、ベゲツも、重吉をこそ連れ行かんと思ひたれ、音吉も共にと言ふには、少し困りたる氣色なりければ、かくては果てじ、とにも角にも、小船を許し給へど、猶穴勝にぞ乞ひける。

こは、ヲロシヤの界ウルツ、嶋（ラツコ嶋のことなり）と日本の界エドロフ嶋とのあはひにて、海上十一里ばかりある中程に船を停めてのいひしろひなり。然らば橋船に乗り行て、若しも風波にあひて死しても厭はぬかと言ひけるを、素よりそれは心得て侍る上は、兎も角も許し給へど切に乞ひければ、今は詮方なしとて、わりなく小船を許しけり。

さきに薩摩の三人も、此わたりまで送り來りて、風あしくとて引返しけるを、又此度も薪水盡きたりとて、此所より戻らんといふ事は、深き故よしの有る事な

り、今日本とヲロシヤと、互に心解けたりとはいへど、先きにもヲロシヤの人、松前へ捕はれて、三年斗りも居たる事なれば、さはいへ、今も如何なる心をか起して、又も捕はれまじきにも非ずと、下心に思ふ故に、公にこの掟にて送り來る事は來りても、その恐れ無きにもあらねば、兎角そさはりを言ひ立て、松前までは至らずして歸るなりけり、重吉も喜三左衛門も、その事を仄かに聞き居たる故、うち／＼に言ひ合せ置て、強て小船を乞ふて、松前へ到らんとはいふになん。

熊の爪にてグハリ／＼

かくて、諸道具食物など小船へつみ入れ、扱、別れに臨んで、ベゲツも重吉も、共に名残を惜み、痛く悲みて、かたみに袖をしばらくけるが、今はとて、薩摩の三人と重吉音吉都合五人橋船へぞ乗移りける、頃は六月廿八日末の時斗りの事にならん、かく

て、エドロス(かいの事なり)にて漕行く程に、エドロフへ一里斗りになると思ふ頃、俄に早手吹出し、浪風荒くなりたれば、いかゞはせんと、元船を見やれば、はやいづちへか行きけん見えす、又神々を祈るより外なし、夜の戌の時斗りに、辛うじてウルツ島の北東の方の砂濱へ着たり(エドロフ近くなりたる頃、逆風吹き出し、こゝまで吹戻されたるなり)せん方なく、船の中なる品々を取出して岡へ持はこび、船も引上げて、地を掘りて其上へ屋根のやうに船をおほひて、先づ兎に角に今宵はこゝに野宿せんとて、皆々船の下に入りたるに、腹も空しくなりたれば、豚の肉を煮て食はんとて、煮かけたるに、其にほひをかぎ付て、熊あまた出て來りたり、皆々恐れて船の下に潜まり居れば、熊は船の上へ上りて、爪もてグハリ／＼と船をかく故、熊に船を引起されなば、命を失ふべしと、たべ物所にては無くて、夜ひとよ鐵砲を打て(ベゲツに鐵砲二挺もらひ來りたるなり)熊を追ひ驚かすに掛り居たり、辛うじて夜明けて見れば、熊の足跡のみにて、其わたりに入影は見えず、先々食事をして、それより其所

彼所と見歩くに、人の足跡も無く、只熊の足跡のみ多かり、かくても猶浪風は静まらず、爰に一日二日止まり居たり、浪にて打上たる木を拾ひ來りては、夜ごとに船のめぐりにて篝火をたけば、熊はより來らず、かくて爰は出船のたより良からぬ所なりければ、西南の方へ廻りて入灣ある所にて、天氣を見合せ居たり、こゝには空室四五軒もありて人は一人も住まず、ワニナウといふ所にてありしとぞ、二三日過ぎて、ラリワ人の由にて、十三人斗り小船に乗り來り、こゝに一夜宿りて又の日いづくへか出て行きけり。

始めてエドロフに上陸す

扱七月七日になりて、辰巳風にて天氣よければ、霧は深かりけれど、磁石を立て、申西の方へさして船を出し、夜の戌の時斗りに、エドロフの北東のはてへ着たり、先づこゝは日本の島なれば、今は心安しとて、皆々限りなく悦びあへり、そこより北西

の方へ一里斗り行て砂濱二三十丁斗りも有る所に至り、又船を陸へ持上りて、最前のやうにして、例の豚を煮かけたるに、又も熊の出て來りたるを見れば、こたびは熊とやらんにて牛の大ききなる大熊、幾らともなく出かけたり、いみじう恐ろしくて、皆皆船の下へ逃げ入りたれば、熊は船を引起さんとや、ガリ／＼と音する故、例の鐵砲をひまなく打ち居て、辛うじて夜明けたるに、東風にて船を出しがたく、又流れ木を數多拾ひ集めて、夜に入れば船のめぐりにて夥しく篝火をたきけるにぞ、今宵は熊の患ひも無かりける、三日め七月九日天氣よし、辰の時斗りに船を出し、かねてヲロシヤ人の教へに任せ、海の岸を北西の方へ一里斗り廻り行けば、高山有り、此山よりいとも／＼大きな瀧落つる、高さ凡三十間斗りも有るべきか、幅十三四間斗りにて、岩はの上より岸を離れて、海の中へ迸り落つるなり。

この瀧は、熊野なち山の瀧よりも大なりとぞ、ヲロシヤ船海上十四五里さきより、此瀧を目印しにして船をのるとなり。

其下を通りて岸に添そひて行、凡十二三里も來つらんと思ふ比ころは、申の時斗りなり、此わたりにて陸へ上りて、暫しばし休らはんとは思ひしかど、又も熊の出んことの恐おそろしさに、家の有らん所までと、猶も力を入れて西の方へ漕こぎ行きけるに、小屋一軒ある所を見付けたり、急いそぎて其わたりまで行きつきけるに、嶋の鼻はなに、人間とも見えず、髭ひげいみじう生はへて、鳥の羽を身みにまごひたるもの立てり、重吉之を見て先づ驚おそろきたるに、薩摩人は、えぞの人なる事を心得居て、詞ことばさへ少し通しければ、かの小屋へ入て、我々は日本の者なる事を言ひ聞せ、一夜の宿を乞こひければ、我は遠見とほみに出たる者なり、こより日本人の居給たまふ番屋迄は程近ほどし、いざ給へといふにぞ、此異人諸共ちろに、又船に乗り嶋に添そひて、西の方へ一里あまり行き、嶋の鼻はなをまはりたれば、向ひに家三四十軒斗りも見えたり。

エドロフ沿岸えんがんを送らる

一町ばかりこなたに船を停とどめさせて、夷人斗り番屋へ行て訴うたへければ、やがて同心二人出て來りけるに、船の中の人々は、ヲロシヤの衣服なりければ、驚おそろきたるけしきにて、汝等は何者なるぞといふ、尾張と薩摩の者なる由を云ひければ、言葉ことばにてや心得たりけん、しかど兩國のものなるかと聞たねて後、迎ひの船を出したり、其船に乗て、一町斗りが程行きけり、こゝはエドロフ嶋の内シビトロといふ所なりとぞ、そこに調役下役村上貞助同心木村十平小山倉之助などいふ人を居たる、扱一通り聞きねして、それより衣服を着かへさせ、粥かゆを一もりづゝ折々たべさせなごす、持來りたる品々は、改めて悉ことごとく封印ふういんを付けたり、かくて又審つばに聞きねされたるに、一わたり終れば夜は明たり、扱湯あみし月代さかりなどして心落付おちきたれば、皆々物の恠けの離はなれたるやうになりて、ねふくなり來り、夜晝よるひるの辨わかりへも無く夢中むちゆう正體ただなしにてぞ居ける、扱皆々久しく異國の肉食にくになれたるを、俄にわかに米をのみ食したるにや、腹はらもち悪わるしくなりたり、されど重吉一人はさること無かりき、只久しく椅子いすに腰こしをかけてのみ暮くらしたれば、座ざす

ることのなりがたきのみなりけり、かくて、五人ともに、毎日々々寝てのみ暮らしけるを、村上叱りていふやう、汝等はいかに心得たる、爰は日本より遙の地にて、公の御役所なり、こゝにて死するものならば、ヲロシヤにて死したるに等しからずや、松前へだに行かば、故郷の事も大かたには知れぬべし、されば本國に歸りたる甲斐もあるべきを、こゝにて心をゆるし、其有様はいかなる心得違ひなるぞと、いみじう言ひ勵まされて、皆々始めて人心地つきたり、かくて九日より十四日まで爰に留り居たり、扱高田屋嘉兵衛が弟嘉十郎、來十四日に木村十平嘉十郎附添、えぞ人水主にてこゝを出船、海の岸を西の方へ廻り、申時斗りにヲトイマハシと云ふ所の番屋に至る、こゝは大船の湊にて、高田屋の船徳榮丸といふが一艘かゝり居たり、今宵は此所に宿り、十五日十六日雨ふり船出ず、十七日にベツトウブと云ふ所番屋に一宿、十八日サナと云ふ所の番屋にやどる、十九日雨ふりて逗留、廿日にフルエベツに至る、シビトロより此所まで四十六里なりとぞ、此フルエベツは、此島の中にての都會にて、いかめし

き番屋もあり、調役下役六七人同心廿人斗り、高田屋の會所もあり、高田屋の大船も三艘斗り見へたり、こゝにて又一通り糺しあり、二三日を経て、又も衣服股引合羽やうの物まで、道中用意の品々を給はり、八月二日まで此所に留り居て、二日にそこを立、こゝより付添の人代る、調役下役塚田富次郎同並三橋勝次郎同心松井卯内高田屋下人助四郎附添をぞ水主にて船を出し、又も島の岸に添て二里斗り西の方へ行き、ヲトイといふ所番所に宿り、三日には十二里斗り行てヲダシツといふ所番屋に一宿、四日には山道二里斗り行てナイボウといふ所に一宿、五日より七日迄雨ふる、八日に船を出し、タネモイといふ所に至り番屋に宿る、十日には、そこよりクナヅリへ渡海七里を渡る、(是まではエドロフ島の岸を、つぎくゝにめぐりたるなり、こゝよりクナヅリへは、離れたる島にて、海上七里の渡りを乗りゆくなり)

國後より松前まで

クナジリの丑寅の方の出崎アトイヤといふ所に着てそこに宿る（アトイヤは出崎といふことなり）十一日天氣は良けれど、二百十日故船を出さず、十二日にそこを出て、又つぎくに島の岸をめぐり、所々の番屋にやどり、十七日にセ、キといふ所に至る、海の岸にいで湯あり、雨ふりて船出ず、十九日にトマリといふ所に至る、こゝは、クナジリの内にての宜しき所なり、大きな番屋ありて、調役下役五人斗り、同心廿人斗り、其外日本人えぞ人あまた詰合居る所なり、こゝにても亦一通り御糺しありて、廿四日にそこを立、（付添の人こゝにては代らず）海上五里斗りネモノといふ所へ渡る、そこより沙濱三里斗り行てノツケといふ所に至りて宿りたり、かくて付添の人の云ふやう、汝等は運の宜しき人々なり、エドロフとクナジリの渡りは、やゝもすれば難船する所なるを、先々難なくえぞ地へ至り着きぬ、こゝより松前までは地續き也、先々幸ひ也といふ、重吉いふやう、七日か十日斗りかと思ひつるに、そこばくの日數を經たり、爰より松前へは程近く侍るにやと聞きければ、爰よりは三百九里斗りも

あらんといふにぞ、胸つぶれたり、かくて廿六日に、ノツケを立、こゝよりは東南の方へ海に添て行、又は山道野道なども有り、流れ川數多あり、舟渡しの所も多し、五里十里又は七八里も行て、番屋といふ家に宿りては行く也、（此番屋は、えぞ地勤番の人の通行のたよりに立置かるゝなりとぞ）日々馬に乗、あるは徒よりゆきて閏八月朔日には、アツケシといふ所の番屋に宿り、それより猶行て、松前より四十里北にて、白の善光寺といふ寺ある處へ至る、こゝは信濃の善光寺の分身にして、寺あるじは江戸の増上寺より來りたる僧なりとぞ、こゝにて一日逗留を願ひ、さきに死したる水主等十二人の法名を乞受け、回向を頼み、永代供養をも頼み置たり、（ノツケより爰まではえぞ人の人足なり、こゝよりは日本の人役に出でたり）そこより三日めにて九月二日申時斗りに松前東の入口にぞ至り着きぬる。

松前より尾張までの護送

松前箱館より組頭一人同心四人來り、受取渡し有りて町番所へ連行き、そこより藏町といふ所の牢屋敷へ連行き、やがて牢へ入られたり、兩脇に科人居て、中に疊の敷たる所に居るなり、松前へ着きたる事の、いと嬉しと思ふ程に、やがてかく牢へ入らるゝ事は如何なる事にかと、又夢の心地して皆々甚く悲みあへり、かくて、又の日の己の時斗りに、箱館御奉行所へ呼出されて御糺しあり、切支丹宗にはあらざりしか、佛は持渡らざるかなど御尋なり、さる事は侍らざる由聞え上げければ、また牢へ返されて三日目に揚り屋へ行、猶日々に様々の御尋ありて、十日斗りが程に、御糺し果て、其口書を江戸へ上せられたれば、御下知有るまでは揚り屋に逗留すべしとの事にて、松前に六十日斗りも留り居たり、其間は、高田屋嘉兵衛五郎十などに、えぞ地の事或はカムサツカの物語などし、又は神參りの暇を願ひ、そこかしこ見歩きなどしたり、かくて六十日餘りをへて、江戸より御下知ありたりとて、松前を出て立つ、松前御船永昌丸船頭市藏水主六人、付添は塚田富次郎松井卯内村井庄三郎也、十一月四

日出船、海上七里三厩へ着、淡路屋忠右衛門と云ふ者の家に宿り、それよりの旅路は、公の御役人付添たる事なれば、いかめしき旅なりけりとぞ、かくて三十日を経て、十二月四日千住の宿に至り着きぬ、中屋六右衛門と云ふ者の家にて休む、そこへ、えぞ會所より受取の役人來りうけ取りて、それより江戸靈岸島なるえぞ會所の長屋に連行、松前よりの付添松井村井と共にこの長屋に居らしむ、かくて、御奉行度々來り給ひて御聞糺しあり、それより尾張の故郷の方をも御糺し有て、後五ヶ月を経て、文化十四年丑四月四日尾張家へ引渡しになり、尾州御屋敷に半月斗り居て、四月廿日頃尾州御藏方御役人付添、木曾路を経て五月二日斗りに名古屋へぞ歸り着きぬ、清水御門にて御勘定奉行一通り聞糺しあり、そこに重吉が一族ごもへ對面を許されかたみに喜びあへり。

重吉の歸郷 願果しの謹慎

かくて、半田村の支配鳴海の御代官へ引渡され、鳴海にて二日糺しあつて詳に聞え上げ、終りて故郷半田村へ暇をぞ給はりたる、そこより半田村まで六里なり、重吉親類に向ひて言ふやう、我が此く蘇り來りたるは、全く神々の深き恵みなれば、願果しの爲め、今宵は半田村の氏の神八幡のみやしる、はた金ぴらのみやしるへ無言にて籠り、夜明けて家に歸るべければ、それ迄は、人々も必ず訪ひ來り給ふべからず、又弟（是は重吉が實家に居る弟なり）なるものは、こゝより讃岐の金ぴらへ代参に行くべし、その代参の歸り來らんまでは、無言にて家に慎み居、代参の歸り來らん上にて、妻子にも物いふべしと契りて、それより、其夜は兩社に籠り居て、夜明けて家にぞ歸りける、五ヶ年めにて妻子に對面し事もなくてよくも留守をしたりと、一言いひたるのみなり、誠や尾張の水主七人の親子兄弟は、重吉一人歸り來りたることを訝り、七人の行衛を重吉に問聞んと待居る事にしあれば、重吉もいそぎ様子を語り聞かせんと思ひ、向ひの家へ行ければ、皆々そこへ寄集ひ、我が子は何處にか居侍る、わが兄弟にぞ歸りける。

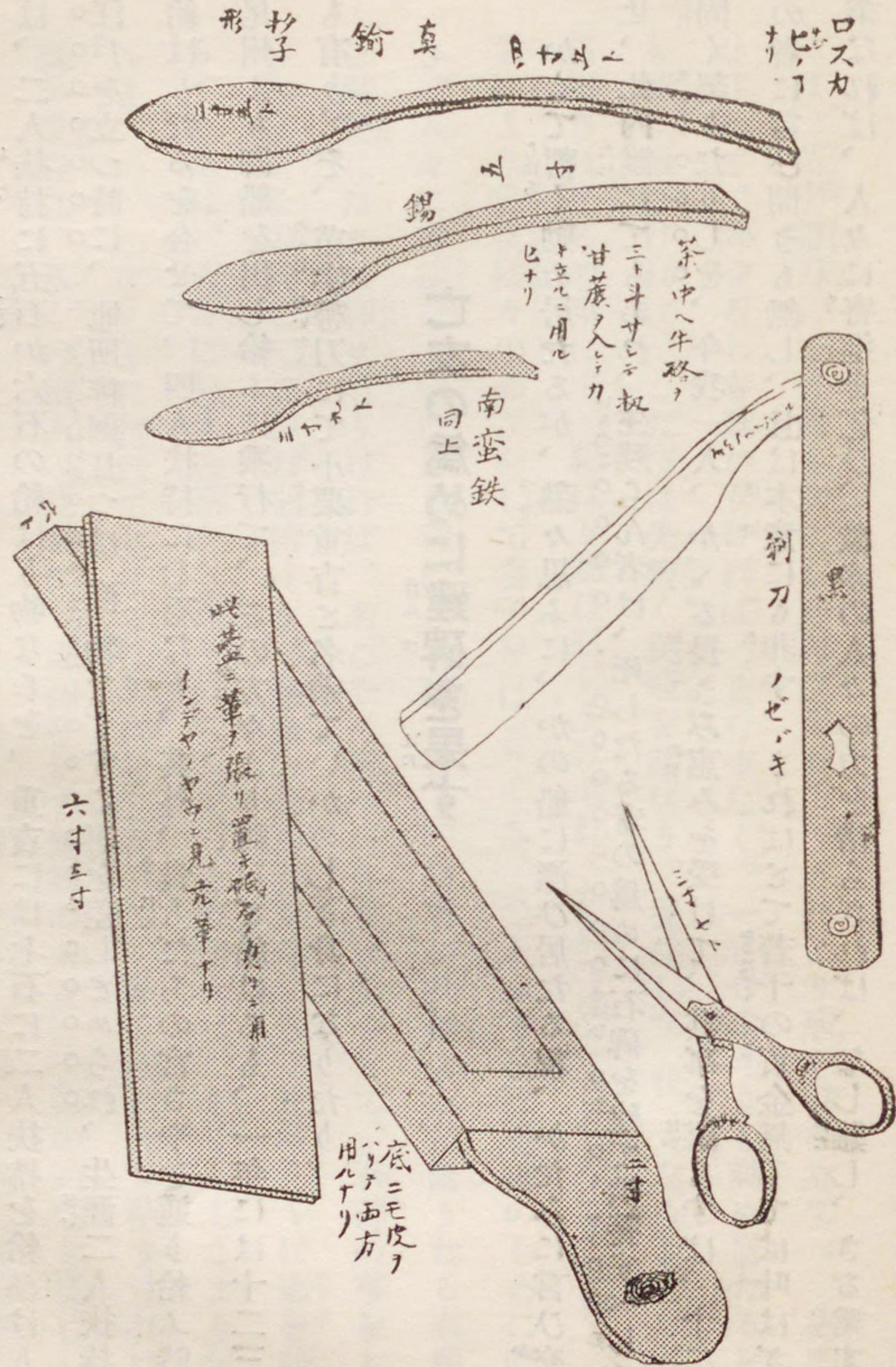
は如何せしなど、重吉を取圍みて聞く程に、言ひ出さんもいとほしくためらひて、やうやう七人の死したる事を次々に語り出せば、聞てはやがて泣き出し、皆々いみじく泣き悲しみ、むせ返りて騒ぎ惑ふを、重吉もつて煩ひ、共に涙を押へつ、我が家にぞ歸りける。

重吉が妻の貞節

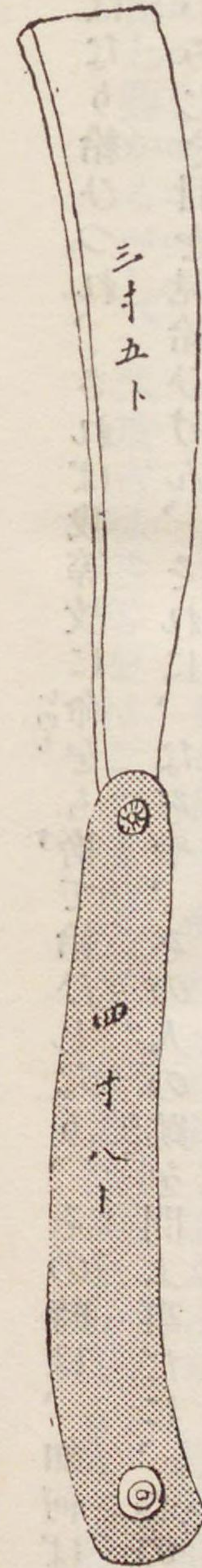
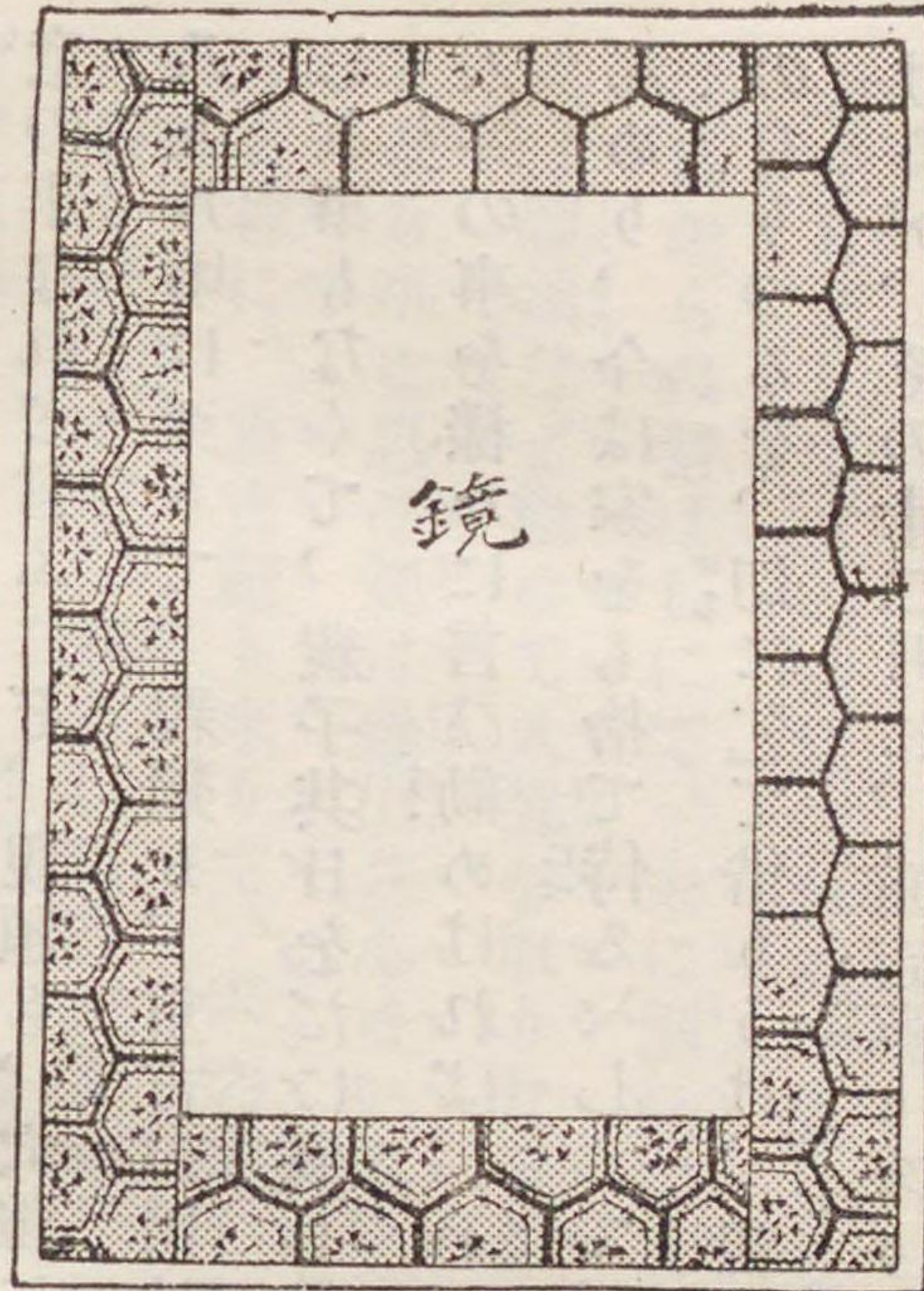
さて、妻は夫の年經て歸りたるを、傍へも寄せず、無言にて日を経る事を恠しく思ひ、狐狸などの惑はすにては無きかとも思ひ、又は位牌を見ては、三年の忌日もとひ營みたる事など思ひ合せて見れば、若しも幽霊などいふものにては無きかとも思はれ、とぎまかう様に思ひ煩ひけるを、弟讃岐より歸り來りければ、やがて重吉ものを言ひ出し、年月の艱難の事をも語り聞せ、留守の有増をも問ひ聞けるにぞ、始めて心は落付きたる、抑重吉が故郷を出でし時は二十九歳にて有りけり、妻は廿二にて、二

歳になるをの子一人有りたるなり、かくて、尾張の船のり八人の行方知れざりければ、明くる年までは待ちけるが、終に行くへも知れぬ事なれば、皆々その出立たる日を忌日として、一周忌三年めの忌もとりくくに吊ひけり、元より此わたり、女の身持は良からぬ習はしにて、夫に別れたるものは、様々に、あらぬ身持になりたるも有り、或は親類など勸めて入聲を取りたるもあり、重吉が歸りたりといふ事を聞て、皆々歸り來る事と思ひ聲は逃出さんといふを、女も共に逃げ行かんなどいひけるを、とや角する程に、重吉歸り來りて、夫の死したる事を聞て、先づ嬉しやと安堵したる者なども有りけりとぞ、然るに重吉が妻は、いみじき貞女にて、さる猥りなるわざなどもせず、親類打寄りて、入聲の事を度々勸むれども、うけがはず、若し入聲を取りたらんには、此の後重吉の跡を取らんには、後の夫へ心置かれて、厚くとはんとも言ひ出がたく、はた此の子人となりて、心には、親の跡を懇にとひたく思ふとも、是も亦左は言ひ出し難かるべし、又重吉は我等をはごくまんとて、此る生業をしてこそ、魚の

餌食とはなり給ひつれ、されば我等故に命をも捨て給ひしなり、その時は、如何ばかりか、いみじき目を見給ひけん、それに、なぞや、その人の跡を問ふ事だに、心の儘にならぬわざして、後の世にめぐり逢はん時、いかなる顔をか向け侍らん、よしや人の門に立て乞食してだに、此子を育て上げて、親子心よくなき人の跡を吊はんこそ本意の事なれと言ふにぞ、親類も、穴勝に言ひ勸めん言葉なくてやみけるを、四年めの八九月頃に至りて、親類も、重吉が田地も少しはあれど、女のわざにては、はかしくしき事もなくて、親子其日をだに過し兼る様を見るに忍びず、痛ましく思ひて、又も入聲の事を様々に言ひ勸めければ、われ此くて家に在る故に、入聲の事を勸め給ふなんめり、今は家をも捨て侍るべしとて、十月になりて、親類の中に、小さき明き小屋の有りつるを、切に乞て借りうけ、親子家を捨て、其所へ行て艱難をし、潜まり居けるが、その十二月に、重吉蘇り來りたる事知れたれば、皆人感じあへりけりとぞ。扱重吉は、歸り來り、三十日斗りも過ぎて尾州より御水主に召出されたり、なべて

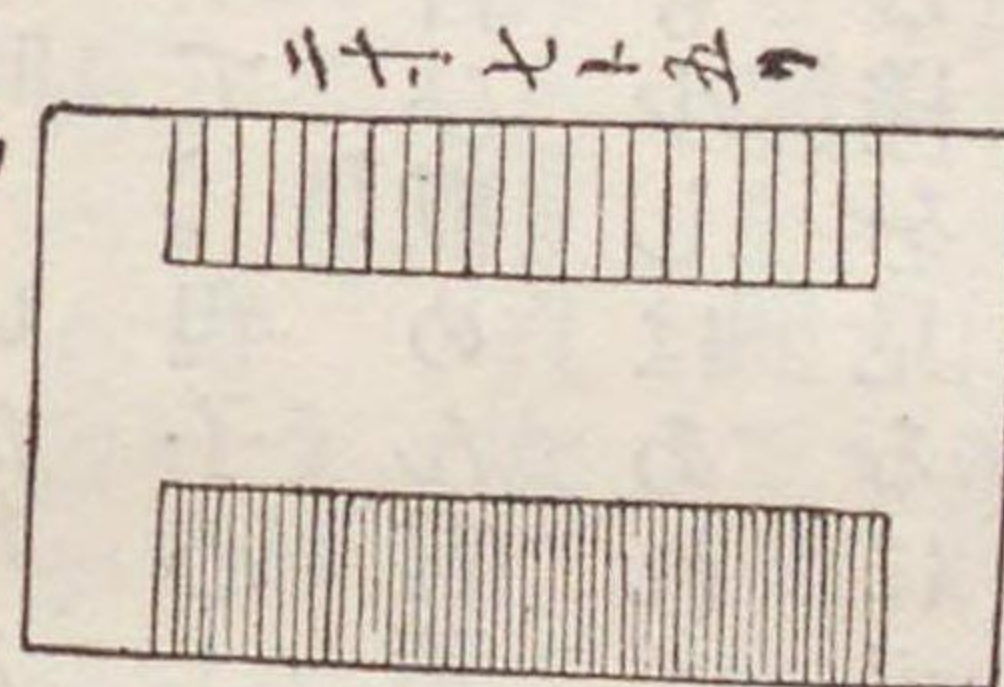


川、和、川、也

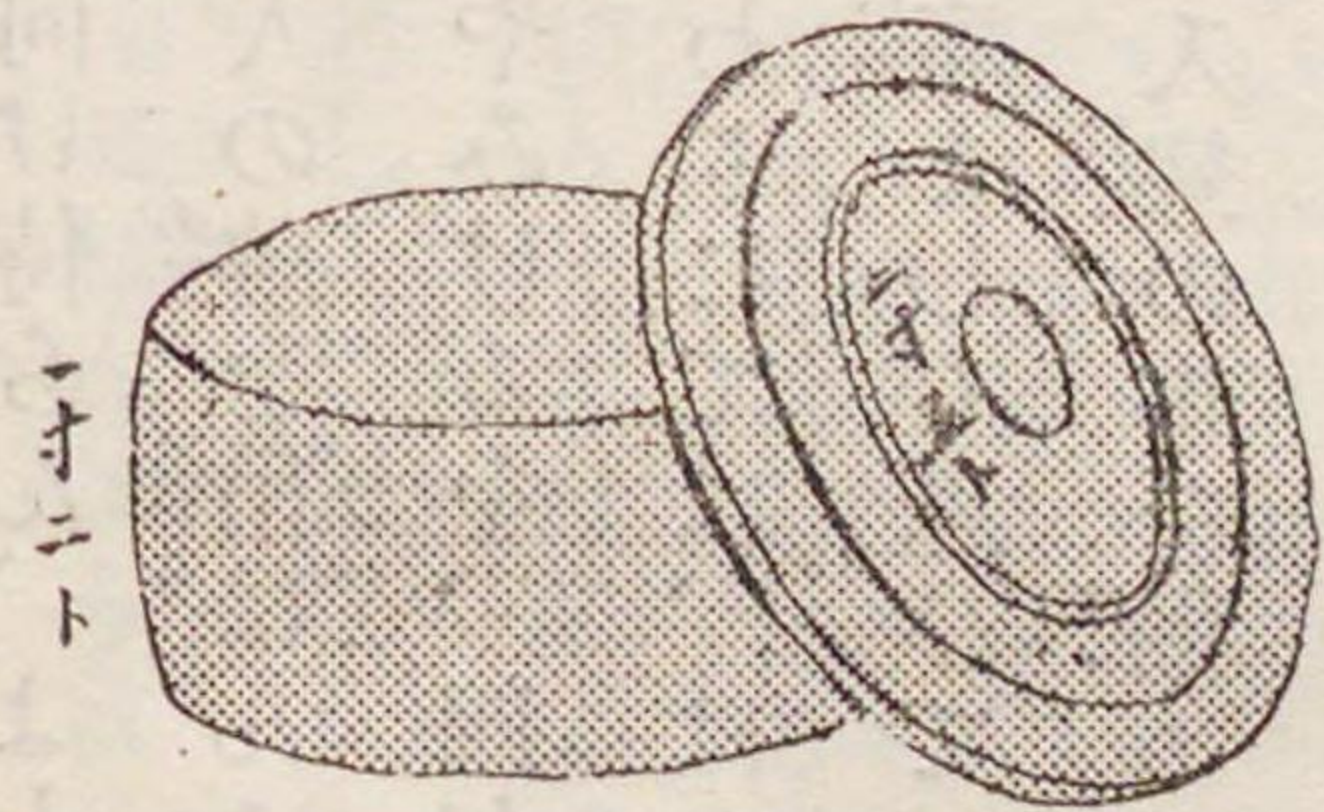
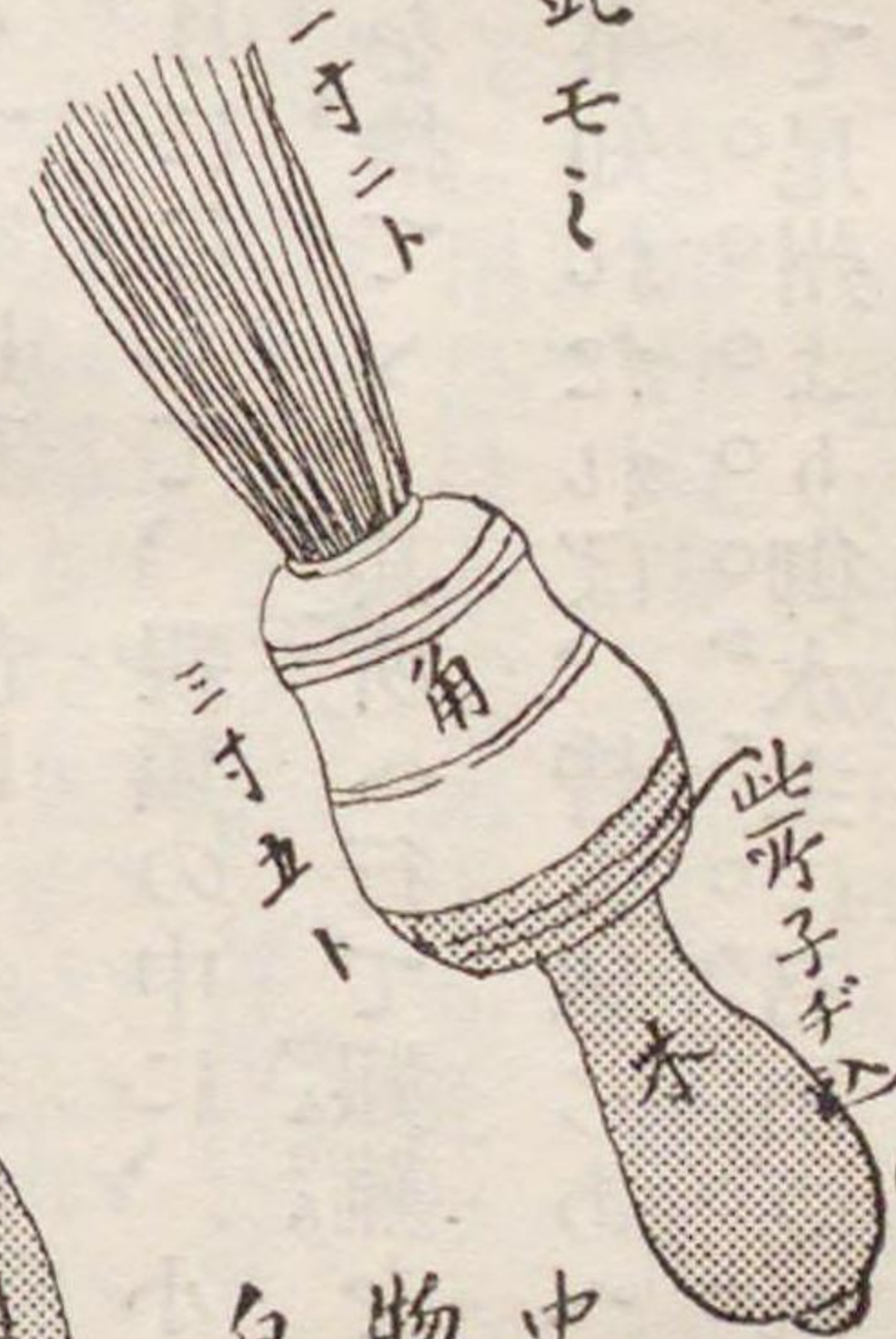


剃刀

一角ノ櫛



髭モシ



此毛ハ水ヲ附下ノ器、
中ナル白クカクマソタル
物ヲツヨクカキマハセバ
白キ泡立ツナリソレヲ丹

テ髭ヲモム
ナリ牛酪
ノ臭氣、
スルモノニ

吾物中
カク
カク
カク

は、二人扶持に五石か六石の給はり物なるを、重吉には七石に二人扶持を給ひけり、江戸を立つ時に、他所徘徊且つは商物などする事を差しとめられ、生涯二人扶持を給はりたるを合せて、四人扶持に七石なり、其外、貴人だちの宮さやを通り給ふ時、尾州より御船を出し給ふに乘行て、その方々より祿など給はるも、一年には十二三金も有りどぞ、苗字帯刀にて小栗重吉と名乗ていかめしき身になりたり。

亡友の爲めに建碑を果す

かくて暫く勤め居たるが、熟々思ふに、かの船に漂ひ居たる程、かたみに言ひ交はせ、此内誰にてもあれ、生殘らん者は、死したる者の爲めに石碑を建て供養すべしと、固く契りたりしを、今我一人、かゝる畏きみ恵みを受けて、其事を謀らずば、十二人の者に言ひ開きも無し、且は本意にも非ず、さればとて若干の黄金無くては叶はざる業なれば、人々に寄進を乞ひ、數多の人々の力を借らざれば、なし難し、さる業する

には、苗字帯刀にては成りかたしと思ひ定めて、それより病を言ひ立て、御暇を願ひけれど、御ゆるしも無かりければ、止む事なく、一とせ半斗りも勤め居たるを、猶も切に願ひければ、こたびは先暫く御暇を給はり、養生して快くなりたらば、猶又召出されんとの事にて、給はり物は召し上げられ、かねての二人扶持のみ給はりけり、それより晝夜様々のわざをして妻子をはごくみ、二人ふちをば石碑のしろに除け置き、人々に寄進をも乞ひける程に、竹腰君より、重吉が異國より持歸りたる衣服器物を御覽じたき由仰せ有りければ、名ごやへ携へ行き見せ参らせて、石碑の事をも申しければ、その料とてこがねを給はり、奥向の女房たちなども、とりくに恵を給ひけり、今迄は、人々に見する事をも憚り居たるを、それよりは、そこかしこより乞はるゝまゝに、つぎつぎに持行て見せては奉加を乞々して、漸く其の代も積りければ、尾張の笠寺は、多くの旅人の往來に、それを見て無縁の人々に一遍の回向を受けむたよりも有れば、笠寺の境内へ大なる石碑を建んと圖りけるに、猶その料には満さりける

も、例しあるまじく平かなる御代にしあれば、藻汐やくあま人薪こる山かつまで、己々が産業を樂み、妻子うからやから打つとひて、明暮に思ふ事なく、うまく食ひ安く起きふす大御代の御恩頼は、仰ぎても仰ぎ喜びても喜ぶべきわざなりけり、されば早くよりこの船人などの、あだし國々へ漂ひ行たるをば、皆いと懇に物して、遙々どふりはへて送り返しなごもし、さる便りにつきても、數々船のゆきかひをもせまほしう物するは、皇國のこよなき事は遙かなる世界のはてまでも能く知れ、ばなりけり、かく此船長日記は尾張國の船人重吉といふが、かの波風に漂はされて、あらぬ國々に物して年月を経て、例の送り返されたるに、去年の冬、我學の道にむつまじくする池田寛親が出會て物したるになん有りける、抑此の重吉は、去年の秋より己が家にも屢招いて、彼物語を聞きつけば、自らおのが母妻などにも親しうなりて、事の序には立よりて、かの荒潮の汐の八百路の辛き目見たる事、人々のいひ思ひたる筋などの委しき事、彼國々の人の萬の有さま、心構へのおもふきなごをも、心に覺て居て、物

語の中には、殊に耳に留る節も多かるを、先づ前しりとなく、聞くまゝに片はし書つけおきつれど、是いかで次序をも正して書改めて、常に物する教へ子どもより初め、孫ひこの末々にも見せて、皇大御國のめでたく大御代の忝じけなさをも、辨へ知らずべきくさいにとは思ふ物から、いと甚く事しげれば、先づ急ぐ方の事にのみ紛れて過ぎぬ、さるをけふしも、新城の池田ぬしの許よりとて消息もて來つるが、上書にとみの事とあるを驚きながら開きて見れば、此日記見せにおこせたるなりけり、そはたらん月の廿日ばかりには、江戸に歸らんとすれば、いかで疾く見終りて、思ふ事も有らば、書きも加へてとく返してよなどあり、見もてゆくに、さきに美石が聞たるよりは、何くれと今一きざみ委しき事も見へて、かく物したる心用ひなどは、もはら己が思ひよれるに同じければ、うと嬉しくて、先づ此日記をば、子の豊村に寫させおきて、やがて消息の返事がてら、ゆくりも無く此よし書てそへたるになむ。

文政六年四月十七日

吉田 中山美石

融勢丸唐流歸國記

編者いふ、本書は、船頭自身の書綴りたるものと思はる、題名はもと單に唐流歸國記とあり、唐に流されて歸國せる記の意なるべし、原本の後尾失せて未だ類本を得ず、されども、全集所載の漂流年表に據り、この一行の、文政十一年十二月歸朝のことだけは明なれば、收刊す。

記中、支那官吏との筆談は、沖船頭としては大出来といふべし、中に、日本皇帝の御名を問はれて不知と答へ、汝等日本國に住居し、今帝の名號を知らず、何を以て日本百姓たることを知らんと、やり込められし問答あり、當時皇室の式微この一事にても察すべし。

本文中の捨がなは、編者の補ふ所なり、首尾を通して、一圓相分りやさすの句、

目ざはりになる程多きの類、改竄したき節も多かれども、成るべく原本のまゝに從ひて改竄を加へず。

八戸船の平潟沖遭難

奥州八戸石橋徳右衛門船八百石積融勢丸沖合船頭徳次郎、水主炊共十一人乗、右船江戸麻布市兵衛町八戸御屋舗御臺所御荷物、八戸鮫ヶ浦にて積立テ、文政十亥年六月、同浦出帆罷登り、七月上旬、相州浦賀え入津仕り御判ヲ請ケ、七月中旬浦賀出帆、江戸品川え入津仕り、早速御荷物御渡シ相濟ミ、七月下旬品川出帆浦賀え相登り日和ヲ待チ滯船仕り、八月中旬浦賀出帆罷下りヤル所、房州地にて北風に相成、無レ據伊豆の大嶋え欠戻し、大嶋へ入津仕り、九月上旬同所出帆罷下りヤル處、又々房州地にて東風強く吹返し、無レ據浦賀え戻し颯仕り入津仕り、九月中旬浦賀出帆罷下りヤル處、常州中の湊沖にて東風に相成り、下總銚子え入津仕り、十月初同湊出帆罷下りヤル處、岩城

地にて東風に相成り、十月八日常州平瀨湊ひらかたみなとへ入津仕ひより待、十一月迄滞船たい、無_レ據同湊庄屋を願出_テ棚倉米積立やひ處、一圓に米下げ方埒明くら不_レレ、米四百九石積入_レ、不足に御座ひ得共、十二月二日平瀨出帆ひらかた罷登りやひ處、三日朝より北風大風に相成、尙又大雪ゆへ、一圓に地山相見を不_レレ、彌増大時化いままじに相成、帆を下げ、津輕ほし帆仕、四日五日大時化ゆへ、乗組水主髪を切り、諸神を立願やひ、六日七日八日九日西風に吹返し、大風大波に相成り東の方を流し出し、無_レ據荷物手當り次第打捨やひ、水主一統、一代法華ほつげに相成、佛神を立願仕ひ處、十日少々海面和なぎ、十三日尙々海面和なぎ、日本地方六月土用の如く大暑に相成り、水主皆々裸はだかに相成り、種々工夫仕ひて、元船を處々破れ所ヲ細工仕り、元船の帆桁けた橋はしに拵こしら立テ、又帆切れに相成ひを取繕つくろ十四反に仕り、東風の節は帆を卷上げ、西の風へはひやひ、又惡風の節は帆を下げ流れ居り、東西南北何れの方に日本の地有_レ之ひ哉一圓相知れ不_レレ、依て佛神に祈願仕り、日本國を何里有_レ之ひ哉、御伺やひ處、日本は亥子に有て千里餘離はなして有_レ之、逆とても日本國に歸帆相成

難く、是より未の方を飄は流すべしとの御告ごなり、然れども何卒日本國を歸帆仕度、子の方を心掛け飄はるといへども、度々惡風強く、又々帆を下げて流し居り、正月中旬より東風に相成り、酉の方を飄はり、日増に大暑に相成り、鹽水を汲み、銘々めいかぶるといへども、鹽水湯の如くなり、然れども鹽水ヲかぶり暑を凌しのぎやひ。

イバタン殿様の愛憐

猶又東風吹續つき、酉の方へ飄はりやひ處、二月九日酉の方に嶋相見へやひ、右嶋へ飄はりやひ、暮六つ時迄に此嶋へ飄はり着き見るに、富士山の如くなる名山有_レ之、定めて人家有_レ之べくと存じ、船入湊相尋を見るに、夜更ふけに及び一圓相分り不_レレ、無_レ據西の方へ飄はる。

十日朝五つ時、酉戌の方に嶋相見へやひ、猶又己午を風に相成り、子丑の方へ飄はりやひ、十一日五つ時、嶋の間に元船乗込を、山の様子を見るに、山は皆青かやにて樹木は

無^レ之、獸多く相見へやい、何國とも名付くべき様無^レ之人家湊をたづね^はこ^こり込みやい處、地方に少々人家有^レ之、此所より小船一艘乗出し參り、私船へ四人乗組やい^に付、いろく相尋^{たづ}ねやいへごも一圓に言説わからず、此人裸^{はだか}にて下帯ばかりなり、此人案内之由、元船湊を入津仕^は處、人家六拾軒も有^レ之、此所^レ地頭なる者、早速私の船に參るなり、此地頭、文字を書くといへご、一圓に相わかり不^や、筆は雞の羽を用^ひる、文字は横文字なり、右の通り通用の所なれば、言も文字も一圓相わかり不^やい、此地住長とやい處なり、(編者いふ、住長の地名、何とよむべきや、考へがたし)

此嶋より西方にイバタンとやい大嶋有^レ之、則城下あり、右住長より御注進^{ちゆうしん}に依て、イバタンより御家老ホアンとや仁、並に添役四人上下七人船にて相渡り、私共船へ御出役^{しゆつやく}、此役人いろく咄^{はな}し被^レ成^は得^ごも、一圓に言相わかり不^やい^に付、互に手にていろくのまねを仕り、たがひにさとりやい、右役人イバタンへ歸られやい、又四人にてホアン出役有^レ之、私並に傳兵衛兩人召連^{めしつ}レホアン登城仕^{とじやう}い。

御城の前に乗船をつけ、私傳兵衛兩人召連^{めしつ}レホアン登城仕^{とじやう}い。

殿様居間に、いろく佛^{ぼつ}をかざり、又掛物多く掛けて有^レ之い^に得^共、一圓に相分り不^やい、日本國の佛神とは相違^{ちが}ひ、又文字は相わかり不^やい、私傳兵衛、殿様御前にて、きよくろくに腰をかけ居^り、早速御酒を下され、猶又諸國繪圖^{えづ}を取出し、是日本々々と仰せられい、繪圖の文字は相わかり不^やい^に得^ごも、私日本々々と御答^{こた}や上^はい、夫より私傳兵衛兩人家老屋敷へ御預^{あづ}けに相成^なり。

二月二十日、又私傳兵衛登城仕居處、御馳走被^レ下置、殿様私傳兵衛三人同座にて種々の御馳走御酒を被^レ下置、猶又御前御直^ぢきにいろくの鳴物うたをうたふて、是も御馳走と相見へやい、其内七つ時家老屋舖へ罷歸^{まかり}やい。

二十一日、家老屋舖へ殿様御光來被^レ遊、私傳兵衛に被^レ仰聞^{おほき}いには、住長至て湊宜しからず、今に大風にも相成^はい^はず、日本船破船にも可^レ相成^はい、左い^に得^ば、人命^{めい}にも相か^らりやす可^し、早速日本人住長より此地へ呼寄度存^ぞるなりと仰せらる、私共、日

本船此地を相廻りや度御答やひ處、早速引船數艘差出され、引廻しやひ處、惡風吹あくふうふきが、りいたしひ處、彌増大風に相成り、日本船破船仕ひ、尤岩の間に吹上ふきあり、依て人にはいたみ無し之ひ、猶又日本人イバタンへ渡るなり、皆家老屋敷へ御預け成され、日々の食物は御城より御送り被下し置くだひ。

又、日本人十一人に御馳走被下置くだひ段御沙汰有し之ひに付、十一人相揃そろひ登城仕ひ、誠にいろくの御馳走に相成家老屋舗へ罷り歸る、是に三月十四日まで住居、城下人家多し有し之ひ、日本人何方へ参りやひても大切にいたわりやひ。

滿禰羅滞在

二月上旬に、サントリジヨとヤス所に、イギリス船二艘着罷在やひ様子にひ處、二月下旬にイバタンへ参り、私共の居やひ家老屋敷をイギリス船カヒタン参りやひて、咄はなしやひ得ごも、言一圓相わかり不しやひ、尤日本松前南部仙臺金花山鹽釜岩城江戸越

後酒田秋田杯と、色々咄しやひ得共、私共一圓返答不しやひ處、イギリススカヒタンやひには、我船、日本地へ鯨取に参るなり、此地より七日颯はじりやひ得ば、日本地に着なり、我船へ乗り、日本へ歸るべしと、達て相す、めやひ得ごも、私一圓に挨拶不仕あいさつひて、イバタン殿様へ、私共十一人殿様の御世話にて日本國へ御送り被下置くだひ様に御願や上ひに、殿様仰せ出されひには、我地方より日本渡海相成り不しやひ、是より滿禰羅マネラを送る可し、滿禰羅には唐人屋敷これ有り、唐船入津の地方なりと、それより三百石積位の船を作事成され、三月十五日、右船に水主十九人乗せ、又私共十一人乗ひ處出帆、南の方へ颯はじりて、四月初一日滿禰羅入津仕る、此國王の地なり、人家多く有り、猶又大船數艘の入津の大湊なり、又大川これ有り、此川にも大船多く繋り居り、川口左右に石火矢多くしかけこれ有り、石垣百間餘沖まで海を取揚げ、石細工は勿論大丈夫なり、此の地、武家屋敷はやすに及ばず、町家までも家は切石にて組揚げ岩山の如し、是れ則ち此國は阿蘭陀オランダなり、物不足なき富國と見えやひ、宗門は此國切支丹宗門

と相見へやひ、日本唐國の菩薩と相違なり。

此地方、毎日々々鐵炮を持チ腰に劍を下げ、陣揃朝五つ時より大鼓陣貝陣鐘打ナル得ば、武家數人相集る、八つ時まで武藝、右鐵炮之筒口に八寸斗りの鑕有レ之、尤此鑕は取置なり、又懷中にも小鐵砲有レ之様子なり、劍はナマクラなり、武道具鐵砲は第一の道具なり。

四月四日、當所御役所え私共十一人罷上リやひ處、諸役人數人居やひて、色々御咄し有レ之得共、一圓に相わかり不やひ所、唐人一人御呼出し、此唐人筆を採り、爾日本なんぢ人否と書す、私亦答書、我大日本人と書す、此唐人、それより私共十一人を御役人より御預り引連れ、唐人屋敷を歸りやひて、私共十一人に此唐人を附け置く、此屋敷百間四方なり、船を積出し、又唐國よりの商荷物揚置あげおまひ屋敷にて、荷物澤山に有レ之なり。

私共、晝中は滿禰羅町内往來構かまひ無く、尤夜は門外ニ出る事叶はず、此地、晝夜廻

りの役人、鐵砲を持ち數人廻り居り、海川は八拾石積位の船にて、役人晝夜廻り居る、此船に大鐵砲しかけ多く有レ之、用心嚴敷守る、猶又此の湊に居合ハス船、イギリス船三艘唐船七艘、阿蘭陀ヲロシヤ大小の船多し。

唐船にて福建省温州府

私ども、唐船にて出船に付き、五月廿八日十一人乗るなり、此の船ハ唐國福建の新順盛と號すなり、其夜五つ時出帆仕しひ、六月初一日より北の風ニ颯はじり、六月十四日夕イワンと云フ國を見やひ、此國今ハ唐國支配なり、十七日唐國温州府沖おきに鹽かゝり仕りひ處、御船三艘繫かり居やひ、新順盛の船頭早速御注進ちうしんや上ひ處、十九日、御船より官人御出役有レ之、私共十一人に對面遊ばされ、早速御船へ歸られひ所、將軍より御沙汰有レ之、日本人より書ヲ可ニ差出しル様被ニ仰付おほせに付、私委細に口書相認めやひを、新順盛の船頭見て、此書今將軍を差上ひては、ヲロシヤの事始終御尋あづかりに預り、左ひ得

ば、唐國ニ名々明年迄住居トナル我國、惡水也、若も名々病人出來なば、存命不定なり、何卒早々日本ニ歸國致させたし、我宜敷案文あんもんいたすべし、此通り書テ上レぐべしと云ふなり、
(編者いふヲロシヤ云々の事、何の意か明ならず) 私又、何分にも宜敷御頼みやし上げハ、船頭案文あんもんに云く。

我等元は大日本國住人、去十一月五日、在日地方大船渡海、同十二月二日我地方惡風強く、東方吹流、當年六月迄海上流居、一心不亂佛神信心、幸六月十一日新順盛於海上會、我等日本船乗捨、皆是新順盛乗移命助、今大唐來。

道光八年子六月

日本 徳治良判

大人 安座

是の如く書きて差上レり。

(編者案するに、この案文及び下項の將軍の筆間に、文字の顛倒てんだう及び誤字多き様なるも、都すべて改むることをせず、只原本に従ふ)

船將との筆談ひつだん

同十九日、御船へ私共十一人乗移る、御船には、武家多く乗り居り、又水主モ一百人餘アリ、陣旗陣幕ぢんまきヲかけ、大石火矢や鍵かり弓矢等をかざり置、此の船ハ海岸堅かための軍船なり、惣大將名は兵將軍陳大人と號す。

此將軍御書にいはく、『汝等何國何處何作是白』と御書キ差出されレに付、

私答書『現在此口書之通、相違無御座ハ』段ヤ上レる處、

又、將軍御書にいわく『汝等何處進何船、何積何處到、我是問、』

私答書『我是大日本奥州南部人成、融勢丸十一人乗、此船米積入、我地方より江

戸地方エ相廻し商米』と書く、

又將軍御書ニ曰く『今汝筆草字、我國不通用、正字書記、』

私又答書『我等正字不知、我等草字通用、』

將軍御書『元是、大唐國日本國、同國同様、是則正字通、汝等何人成、』
私答書『我等大日本國、百姓成、皆是草字通用、又正字、學人官人和尙醫師、此人正字通用、』

將軍『日本國皇帝、在居何處、御名何名、我是問、』
私答書『日本國皇帝、在京都、御名不知、』

將軍『汝等日本國住居、今皇帝名號不知、何以百姓成、我國皇帝道光寅年生、御年四拾七歲、唐國萬民童子迄敬、乍然汝地方京都何里離、我是問、』

私答書『我地方、京都地方、八百里離有、元是我等百姓成、何も不知、』
と御答や上の處、將軍段々様子御聞濟遊ばさる。

(編者いふ、本邦の僧父の、支那人と筆談したる者、御座り哉、被爲遊などの手紙文體にて書きしに、支那人其意を解せず、更になかな文字にて書けども、同じく通せず、是に於て、彼の支那人は、かなをも讀めぬ無學者なりと笑ひ罵りたり)

この笑話あり、それ等に比すれば、徳治良の筆談は、優ること十等なり。

それより、私ども手道具少々有之を御改の上、御封印成され、私共十一人に御膳を仰せ付けられ、其日七つ時、御船の内、小船に私共乗移りや、尤手道具も積替や、廿三日、將軍より、私共十一人の送りの書面差出され、同日四つ時私共乗居り御船出帆、廿四日温州府へ着仕、御人より官人三人及水主の内十五人、都合上下十八人附添、船場より温州府(以下缺)

憾むらくは、原本これ以下佚して傳はらず、然れども、冒頭解題に述べしが如く、漂流年表の記載に従へば、この十一人は、清國商船に便乗し、同年十二月長崎に歸朝上陸したるもの、如し、即ち、この間の六ヶ月の記載缺け居るなり。

神力丸馬丹漂流口書

編者いふ、本書原文は、最も冗漫なれば、刪正する所多く、且つは文體を書き下しに改めたり、但、洋教に關する事項を、『極内不可認』と朱書しながら、尙二三所に存したるは、從來幾多漂談中に見ざる一異例なり、官庫の祕冊、過ちて民間に出でしものか。

歸朝十四人の戸籍

松平伊豫守領分備前國岡山廣瀬町

多賀屋金十郎船神力丸

千七百石積三拾反帆沖船頭五左衛門水死

單線朱書以下同し

右船上乗 松平伊豫守家來楫役

徒士足輕之間之席、上下着、楫役は船上乗いたし候勤方、高五石、貳人扶持但家々に寄高不同由、船奉行下濃彌五左衛門支配、家内三人暮、城下より半道下も、上道郡平井村住居、宗旨法花宗、平井村平井山妙見寺旦那、

宇治甚介 卯三十七歳

右同斷同人家來、楫役

片山榮藏 卯四拾七歳

席右同斷、役右同斷、高五石貳人扶持但右同斷支配右同斷、家内五人暮、住所御野郡平福村住居城下より半道、宗旨法花宗、同郡濱野村感善山妙法寺旦那

宇治甚介所持往來切手寫

備前國岡山廣瀬町多賀屋金十郎船沖船頭五左衛門

右者從備前國江戸廻米並雜荷物とも積遣ひに付、伊豫守家來宇治甚介片山榮藏とよ者上乘指遣ひ、海陸無二御疑一御通可レ被下ひ以上、

文政十三年寅八月

松平伊豫守内

下濃彌五左衛門印

三二二

所々御番衆中

右船水主

生國邑久郡尻海村住居、但岡山より七里程濱邊、家内六人暮、父茂八水主也、妻はち、兄乙松、(漁師共水主)兄ノ妻も兄ノ子久松、水主渡世

石兵衛 卯四十歳

宗旨真言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

生所御野郡福島村住居但岡山より廿丁程、家内五人暮、母まつ妻きよ子佐吉弟二三郎水主、水主渡世

宗旨法花宗、同郡濱野村立石山松壽寺旦那

同 利八 卯廿六歳

生所邑久郡尻海村住居、家内三人暮、母ゆう兄權太郎水主、水主渡世

同 仁三郎 卯三十二歳

宗旨真言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

生所松平讚岐守領分讚岐國寒郡津田北山平畑村住居、家内四人暮、父久八百姓也、母はつ弟磯次郎、水主渡世

大阪之出、宿を取り水主稼いたし、夫より兵庫之宿より居候處、沖船頭五左衛門に被レ雇、神力丸之乗込申候、水主稼にて先より先へ参り申候、

同 勝之助 卯廿四歳

宗旨真言宗、同郡津田村山號不覺實相寺旦那

生所松平安藝守領分備後國御調郡因ノ島椋ノ浦住居、家内三人暮妹くらえ養子いたし稼に出候、養子ノ名不知、水主渡世、百姓も少々いたし候、大阪へ出、水主稼いたし、宿取居候處、沖船頭五左衛門に被レ雇、神力丸へ乗込申候、水主稼にて先より先、所々稼に参り申候、唐えは始めて参り申候、
宗旨真言宗、同郡三ノ庄村妙見山妙徳寺旦那
父は大工にて同所に別宅いたし、母つき弟直三郎同居いたし候、

同 幼名伊勢次郎 卯三十六歳
定松

卯三番唐船送來日本漂流人神力丸水主

生所備前國邑久郡尻海村住居、家内二人暮、娘いくは同村弟與七方之預け置、水主に被レ雇申候、水主渡世いたし候
宗旨真言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

珍右衛門 卯五十二歳

生所備前國邑久郡尻海村住居、家内二人暮し、母まつ、水主渡世いたし候、

宗旨眞言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

生所備前國邑久郡尻海村住居、家内五人暮、父千吉母こさ弟留吉妻こま、水主渡世いたし候、

宗旨眞言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

生所備前國邑久郡尻海村住居、家内三人暮、妻きぬ娘みつ、妻は離別いたし候積りにて、同村七五郎方え遣し置候、水主渡世いたし候、

宗旨眞言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

生所松平加賀守領分能登國羽咋郡チリハマ村住居、家内四人暮、父清次郎母おと妹すな、大阪へ水主稼罷出居、神力丸え被レ雇、水主渡世いたし候、同村内に兄權太郎水主渡世、父も水主渡世、庄屋はきづや喜三郎、宗旨一向宗、同郡しげ地山號不覺長榮寺

同 清兵衛 卯二十六歳

同 千代松 卯二十八歳

同 榮吉 卯三十一歳

同 彌吉 卯三十五歳

生所備前國兒玉郡田井村住居、城下より五里、家内二人暮、母さよ、水主渡世いたし候、

宗旨眞言宗、同郡八チ濱村フマゴ山金剛寺旦那

同 才次郎 卯三十九歳

生所備前國邑久郡尻海村住居、家内六人、父菊松母お千兄大吉弟熊吉妹十、水主渡世いたし候、父も水主渡世、宗旨眞言宗、同郡正田村正田山朝日寺旦那

同 文吉 卯二十四歳

逆風怒濤の三ヶ月間

私共儀、外國へ漂流仕ひ處、當卯壹番唐船より送來し付、踏繪仰付られ、國元出船積荷物並漂着之次第、彼地逗留中の始末、委細有體や上く可き旨、御吟味御座し。

此段、去々寅年（文政十三年）松平伊豫守領分備前國岡山より、江戸屋敷同家中扶持米積廻し付、同所廣瀬町多賀屋金十郎船千七百石積三拾端帆神力丸え、家中扶持米壹俵三斗四升五合入四千六百貳拾俵、並伊豫守雜荷物同家中雜荷物員數は帳面其外書付

類、破船致し節流失いたしに付、覺えやすさず、其外船中遣用之薪竹等積込、宇治甚
 介・片山榮藏等儀は上乗いたし、沖船頭同國邑久郡尻海村五左衛門・水主彌市・乙吉・
 由松・惣吉・石兵衛・利八・仁三郎・勝之助・伊勢次郎・珍右衛門・彌吉・榮吉・千
 代松・清兵衛・才次郎・文吉共拾九人乗にて、同家來船奉行下濃彌五左衛門より通船
 手形壹通相渡持參、岡山城下川口福島とや所を、去々寅年（文政十三年）八月十二日
 出帆仕處、時節惡敷に付、同國邑久郡尻海村湊に船繋いたし、同廿日同所出船いた
 し、同夜同國龜嶋に船繋いたし、同廿二日同所出船播磨國海越湊へ乗入處、風順惡
 しくに付、船繋いたし、同廿五日同所出船追風迄走り、翌廿六日紀伊國由良港へ船
 繋いたし、同廿八日同所出船、翌廿九日夜迄走り、同國沙之岬とや所、地方へ寄乗掛
 り處、風風いて登り汐強く船行兼得共、今壹里程乗り大嶋之湊へ乗込得ば丈夫に
 付、種々相働得共、汐強く大嶋へ乗兼處、同夜九つ時頃風替り、北東風強く、
 波高に相成り付、大に驚き帆を下り得共下りやすさず、剩帆は三筋に吹裂を漸々

下げにて、西南の方へ里數も覺えず流れ參り、乗組之者共一同神佛を祈念いたし相
 働處、翌晦日迄波風止やすさず、次第に風波強く相成、不レ得止事上荷を勿捨
 得共、彌風波強く、同日八つ半時頃、楫折り付、皆々驚き、舳に碇を貳挺打込へ
 共、彌風強く波立に付、追々荷物勿捨一同相働、帆柱も伐り、懸り得共、急には切
 れやすさず、同日暮頃に漸伐り捨、身綱共に切捨故、船足軽く相成り間、一命限りに
 相働へ共、彌海上荒立致す可き様も御座なく一同神佛を祈念いたし漂流得共、彌風
 募り波は荒く如何とも致し方なく、最早助命相成がたき儀と一同覺悟いたし、銘々髪
 を切神佛へ祈願を掛、方角も睨とは覺へずへ共、西南の方へ漂流處、同夜九つ時
 頃より少し風も靜に相成、一同歡、皆々食事もいたし不レや付、粥を焚一同に給
 て暫く休處、其後は色々に風替、西へ漂東へ漂り内、何方にも一向山も不レ見大洋
 にて、船並帆影等更に相見不レや、方角も相知不レや、船具等も追々流失いたしへ共、
 幸に飯米薪水等は切れ不レやに付、食事は給續りへ共、可レ致手段も無御座り、神

佛の助を力に空敷漂居内、九月十七日又々大風にて山の如くなる波を打込、既に危く相成内處、其夜明方より風も靜に相成内へ共、追々香水も切内に付、銘々に斗分け飯成に給續内處、最早水も切内處に、幸に大雨降出し内付、船中に有合内竹を割樋にいたし、桶鉢等え水を溜給續き内内、十月十五日頃と覺、北東風に相成、日々吹續き、何方共知れず流れ内内、十一月六日晝頃、南之方に當り、遙に山を見出し内。

乗船は破落く

そこへ乗付度存内得共いたし方これ無く、只神佛を祈願いたし、何方成共人里へ乗寄度存居内處、追々北風強相成、山の方へ次第に流寄、翌七日朝より波荒く、船危く内處、同日晝頃より嶋二つ見内付、何卒乗寄度一同信心いたし内處、同日夕地方近く相成、嶋も克分り内處、此嶋平山にて小さき樹のみ少々これ有り、其外は茅斗り生茂り内山にて、右嶋地方壹丁程放れ、海中に巾四五間程にて長五丁程に相見内堤

の如くに相見内大岩これ有り、殊に波は至て高波にて荒く、是は叶わぬと存じ、はらゝ致し内得共致すべき様もこれ無く、見るく右岩の上へ船を打上られ、あわやと存内内、大波三つ程打來内内、船は破落く々に碎、未米も少々これ有り内處、一同流失いたし、甚助榮藏儀、大小を差内間もこれ無く、銘々着用いたし内衣類懐中いたし内守袋紙入等斗りにて波に引かれ外十二人のもの共も同様の體にて懐中品斗り持、木札守又は船板の破流内に取付、九死一生の體にて漸游付、手廻り諸道具悉流失いたし内得共、不思議に命助り、地方に揚り内處、沖船頭五左衛門は五十五歳、水主乙吉は廿五歳、同彌市は廿六歳、同由松は十九歳、何れも備前國邑久郡尻海村に罷在、眞言宗朝日寺旦那にて、同惣吉は廿八歳、長門國下之關タノクヒ村の由、一向宗と承り内得共、寺は存じやさず、右五人共生死相知れず内處、翌朝迄に追々死骸打寄、何れも岩石に當り内と相見、面部手足共所々疵付居り内、昨日まで苦難を共にいたし居内事故、誠に不憫に存じ、右場處へ埋ゆ内。

馬丹島夷のなさけ

私共儀は、七日夕方地方へ上りぬ處、左而已高山にも御座なく土山にて、平地もこれ有り、大樹は御座無く、見馴ざる小樹所々にこれ有り、茅一面に生ひ茂り道もこれ無くぬへ共、所々見廻りぬ處、人家更に御座なくぬに付、其夜は茅原に臥りぬ、翌八日も彼方此方見廻りぬへ共、人家御座なく、空腹にぬへ共詮方盡き、濱邊に罷在り色相談いたし居りぬ處、見馴ざるもの六人、頭は剃りて脛に少し毛これ有り、裸にて木綿の様なる白禪をいたし、跡先も分らざる長さ貳尋斗の小舟三艘に貳人づゝ乗、權にて水を掻き、私共破船いたしぬを見付参りぬ様子にて乗り付けぬ、何かやぬへ共言葉通じやすずぬが、私ども空腹に付食物を與へぬ様手眞似にて仕形をいたしぬ處、合點いたしぬ様子にて、山の芋又はさつま芋の如き芋の湯煮にいたしぬを澤山に呉、其上こなたの舟へ乗りぬ様に仕形いたしぬ、餘り小舟にて甚だ危く存ぬ間、大き成る舟

を乗り参り呉ぬ様、色々仕形いたしぬ處、合點いたしぬ様子にて乗歸りぬに付、貫ひぬ芋を給べ、谷間の水を飲みぬて、空腹を相凌ぎ相待ちぬへ共、其日は舟も参りやすずぬに付、茅原に臥り夜を明す。

翌九日晝頃と覺ゆ、又々昨日同様のもの十人程、舟四艘に三人又は二人づゝ乗参り、私どもに乗ぬ様仕形いたしぬに付、舟は同じく小さく危くは存ぬへ共、致し方無く、私ども三人四人と相別れ乗入ぬ處、權にて水を掻き、西の方へ十四五丁程の瀬戸を乗渡り、最初の嶋よりは山も高く見馴れやすざる樹生ひ茂り、茅葭もこれ有り、人家七八十軒山の麓平地にこれ有る湊へ乗付けぬ、右異人、私共を案内いたしぬ様子に付、一同舟より上り参りぬ處、男は何れも同様なるもの共にて、女は髪を後ろへ下げ、又は頂上に毛卷にいたし、何れも裸にて、日本にて女の禪の幅狭き如くにて木棉白地或は赤き筋二筋染めぬを腰卷いたし、男女とも多人數居ぬ、右の内重立ぬもの三人にて差圖致し、私共を二三人づゝ引分け、銘々家々に伴ひ行きぬ、尤も家は茅にて家根

を拵へ、細き丸木の柱にて、廻りは茅を當て、藤葛の様なる物にて結び付け、下は土へ板を並べ、入口も巾壹尺七八寸高三尺斗りにて、茅を藤葛にて結ひし戸の形の物にて塞ぎ、家根低く手狭き家にて、何れも家内五六人位住居し、家内の者は敷物は敷きやすしへごも、私共へはアンペラとや木の皮の様なる物にて織りし敷物を敷き呉れ、炊事とやても竈も御座なく、青き丸石を三つ五つ五徳の如く並べて火を焚き、素焼の瓶にて芋を湯煮にいたししを、素焼の皿に入れ呉れしに付、給べし、相休みし節は、小家にて寢所もこれ無き故か、家内のもの一兩人づゝ何方へか出て行き、翌日は歸りし。

言葉は一向通じやすしへごも、手眞似仕形は克合點いたし、念頃(ねんごろ)に世話(せわ)いたし呉れし、右の所のもの共のやす言葉、睨(しか)とは承り分け兼しへ共、此所はバタン國の嶋にて、サブサンとやす所と相聞へ、最初漂ひ付きし嶋はボ、スとやす由に相聞えし。

蠻島を遞送さる

右の所に、九日十日兩日居りし、此所、平地は茅原又は畑にて、芋を作るに農具等も見掛けやす、木の先を削りし棒にて地を耕しし。

同十一日朝、男二人女三人参り、私共を集め、何れえか連越しし趣きに付、参りし處、右の所より北の方の山にて、樹立ち生ひ茂り、所々芋畑、茅原等にて、道とも相見えざる所を登り、夫より南の方へ下り、日本道凡そ三里程の山越しいたし處、此所は、南の麓にて、海邊に人家七八十軒程これ有り、家作も、人物も同じ形に御座し、連れ参りし者より、所のものへ引き渡ししと、前同様、私共を二人三人づゝ引分け、家々へ伴ひ入、前同線に世話いたし呉し。

翌十二日夕七つ時頃、又何れえか連れ越しし様子にて、伴ひしに付き、参りし處、濱邊に舟壹艘着けこれ有りし、船は、長五間程横二間程にて、跡先共同様に丸くいた

し、木の性知れぬる板を藤葛の如き物にて継ぎ合せ、繼目には石灰を以て塗堅め、楫は左右に付けこれ有り、中は板子もこれ無く、底まで丸く造りし船にては、私共一同を乗せ、十人の水主共權にて漕ぎいて東の方へ向け、瀬戸を渡ること凡そ壹里程にて、バタン國の内ブシンテイとやす所の由、家數五六十軒これ有る廣き港へ、夜五つ時頃着きしは、右舟は、此所より迎ひに廻しし様に存せられし、夫より水主の案内にて上陸いたしし處、役人十人程參り、私共を請取、壹丁程參り貳間半に五間程の家にて、茅葺にて、廻りは白壁、床はこれ無く土間へ板を並べし所へ置き、入口に二人づゝ代り合ひ番をいたし居りし、翌朝、芋と見馴れざる魚の湯煮とを、素焼の鉢へ入れ、下人體のものに持たせ參り呉れし。

同日、役人四五人參り、私共をかぞへて連れ參りしに付、同道いたし壹里餘參り、海邊に人家七十軒程これ有るユバナとやす所へ參りし、前同様に相見えし家へ、私共を入れ、役人出て、私ども名前を尋ねし様子に付、銘々名乗し處、厚き小さ成紙へ、

鳥の羽にて横文字に書付し、此所にて役人二人づゝにて番をいたし居り、食物は、芋の湯煮斗り鉢へ入れ、下人體の者、日々三度程づゝ持參しに付、それを給べ水を飲みて罷在りし、夜分は、素焼の皿に油燈心を入れ、火を燈し呉し。

同十五日又々役人十人程參り、仕形致しし故、同道いたし、同所海邊より前同様の船に乗りし、水主三人にて漕ぎ日本道三面程瀬戸を進み、サンカンロヲとやす所に船を着け、一同中食いたし、夫より又々壹里程進み、バタン國サルトリメンユとやす家數二百四五十軒程これ有る所へ着船上陸いたしし、二二三丁參り、巾貳間長四間程にて、茅葺家根、白壁塗り、入口に巾三尺程高六尺程の開き戸貳ヶ所これ有り、床は惣板張の家へ連參り、同道いたしし侍貳人番いたし居り、其外は立歸りし、無程此國の上官の由、下役六七人連れ參り、私共へ何かやしへ共、言葉は分りやすずし處、色々手まね仕形等いたし、我請取上は、随分心安く休みをりやす可く、不自由なく養ひ、追て本國へ送遣はさんとやす趣に相聞えし、上官は、仕形等いたししも、余人より

は能く分り、又私共の仕形いたしやゆ事もよく合點いたしゆ、殊の外情深き様子にて、色々心付け呉れ、食物の事杯も色々尋ね、只今は船損じゆ間追々こしらへて、次へ送り遣す間、心永く思ひをり、食物杯は遠慮無く好みゆ様にと、暫の間、色々仕形手間似等にてやし聞け罷り歸りゆ、此上官の名はドンルカスウクウとや由。

程無く立ち歸り、役人二人番いたし居る、此役人は、紺木綿にて頭形の小さき頭巾を冠り、紺木綿の筒袖にて、短き單襦袢の様なるを着、下は同じ單のばつちの廣き様なるをはき、柄は鐵にて鍰も造り付の鐵、身は諸刃にて長壹尺五寸程これ有り、へなくいたし、鞘は黒き革にて拵へゆ劍を右の肩より紐にて掛け、左の脇へ下げ、白き革にて巾八寸程に拵へゆ胴亂に玉藥入れゆを左の肩より紐に掛け右の脇に下げゆて、門口に劍を抜き持ち居り、晝夜とも折々代り合番いたし居ゆ。

食物は、ヲベとやすは日本の山の芋の如く、ハカベと申すはさつま芋の如く、ドウカとやすは、山の芋の様にはゆ得共和らかにて味惡し、右三品は所にて作りゆ品に

て、右を水煮にいたし、芋の葉を海汐にて煮、適には日本のさよりに似ゆ魚、又は豕野牛牛等を水煮海汐煮等にいたしゆを、素焼の皿に盛り、召仕にや里人同様裸にて居ゆもの、私ども居りゆ家の外なる小屋にて拵へ、一日に二三度づ、持越吳ゆ、所のも同様手づかみにて食ゆ、豕牛等は斷り給ゆやすゆ處、給ゆやすゆては相果ていどやす趣に仕形をいたし、色々勸めゆ間、是非なく少々づ、折々給ゆゆ、水は、七八升程入りゆ瓢に、近邊の子供、日々何方よりか汲み參り呉れゆを手にてすくひ飲みゆ、膳箸等の器は更に見請けやすゆ。

この家の内には、鐵砲十挺、壁に立かけこれ有る外何も御座なく、雪隠は、後山の岨え造り掛け、下は明通しにて大便は豕野牛杯喰ゆて奇麗に成り居りゆ。

サントルマヤと清正公

二三日過ぎ、番の者兩人、私どもを上官方へ連越ゆ、この家は私共の居りゆ家より

餘程手廣く相見えぬ、上官は、風俗は同様にぬへ共、人品宜しく、色も白く相見えぬ、頭には白き木棉の頭巾、衣類はつちも白木綿を着、劍は帯びやす、曲録に腰を懸け、黒き革の沓を履き、次役と相見えぬ者一人、同様の形にて、是又曲録に腰を懸け居り、其外私共を連參ぬ兩人、並に同様役人體のもの十人斗り、其他裸の下人、並に妻女と相見えぬ女は、里人より人品も宜しく色も白く、木棉縞又は赤き木棉の筒袖の短襦袢の様なるを着、下には同様の長き腰巻をいたしぬ、沓を履は、上官次役兩人斗りにて、其外は皆素足にてぬ、頭兩人の外は、皆板敷に膝を兩方とも立てて居り、又立居ぬものもこれ有り、私ども一同、上官の前へ出でぬ處、何かやし聞けぬへども相分らざる處、色々仕形いたし、私ども様子を尋ねぬ體に付、船の楫折れて漂流いたし、破船いたしぬ旨、色々仕形いたしぬ處、合點いたしぬ様子にて、名を聞きぬ様子に付、銘々名をやしぬ處、小さ成る厚唐紙様の紙に、素焼の至つて小さき猪口の様な器に墨入これ有り、鳥の羽を以て横に文字書きやしぬ、この家にも鐵砲拾挺程建て、これ

有り、家内間數もこれ有る様子にて、窓には硝子にて張りぬ障子を立て、奇麗なる住居に御座ぬ、上官の居りぬ方には、曲録を數多く並べ、下役人の居りぬ方には、素焼の皿鉢の様なる器、並に瓶類、鍔の平鍋杯も品々これ有りぬ、同所に、日本の鍔碇損じぬまゝこれ有りぬ間、仕形いたし相尋ねぬ處、上官やぬは、ナンプトクベとや、私共の様に漂着いたし持參ぬを送り遣しぬとやす様子に相聞えぬ間、扱は、南部の徳兵衛とやす者にても漂着いたしぬやと推量いたしぬ、其内、下人瓶に入れぬ酒を持ち出し、椰子を割りぬ盃を持そへすゝめぬ間、汲みて飲みぬ處、酔く辛き味にて、酒の様に酔ひやぬ、肴は日本鰯魚の通りの乾魚を焼き、素焼の鉢に入れ呉れぬに付、手にてむしり給へぬ處、味も鰯魚の通りに御座ぬ、其上私共銘々に刻たばこを壹包みづゝ呉れやぬ。

(编者いふ原本に、「より」まで、此内は極内、認む可からずと朱書して、次の一項あり、これ西教に關係ある記事なれば、公にするを憚りしものなるべし、後

段人骨を晒し云々の條の「」また同じ

「それより上官の者、私どもを連れ、前の處へ連れ参りぬ處、押入の様にいたし、少し高く佛壇これ有り、硝子の障子を明け、右上官殊の外有り難き體に拜いたし、私共へ向き、夫を指さし、此國にては天道様だとやす様子にて拜いたしぬ様にやい間、立寄り見ぬ處、何とも性は知れざる銅にて拵へぬ、高壹尺程の人物にて、日本の磔の形に、手足を釘付けにいたし、鍵にて突通しぬ像なり、他は、女の子を抱きぬ像なり、磔はサンダマルヤ、女はサンダクロラジとやす趣にて、見馴れざる佛具様のもの色々飴りこれ有りぬ、(編者いふ、マルヤとクロラジとを取違ひて覺え來れるなるべし、以下同じ)罪人を拜しぬは怪敷事と存じ、拜しやすぬ處、猶又佛壇の内より、小さき懸物を出し、同所へ懸けぬて、右のものは又殊の外有りがたき體に拜いたしぬ上、私共へ、是を大切に拜む、日本にては如何と尋ねぬ體に聞ぬに付、能く見ぬ處、日本の清正公様の御影(尤も衣冠装束の御影なり)上にひげ題目認めこれ有り、日本

の紙表具の古き掛ものに付、一同有り難く拜し、日本にても神と拜み奉る旨仕形いたしぬ處、合點いたしぬ様子にてぬ

それより、右の者先に立ち、役人五六人参り、私共を連れ海邊に参りぬ處、長さ拾壹尋斗りの船貳艘繋ぎこれ有りぬ、一向遣ひやすすと相見え、所々損じもこれ有りぬ、上官や聞けぬは、此船を能く直し、汝等をマネイランと云ふ所へ送る、我は、マネイランより此所へ交代なりとやす趣に仕形等いたしやし聞け、大體相分る、夫より暇乞いたし相分れ又々元の家へ番の者連れ歸る。

島民生活の模様

其後、暫く罷在ぬ内、度々酒を呉れ、折節焼酎も呉れぬ、焼酎は味宜しく、日本のに餘り替りやすぬ、永々居りぬ内見及びぬ處、甘蔗の葉を絞りにて瓶へ入れ置き酒に製し、右を又如何様にか製しぬへば焼酎に相成ぬ様子にぬ、右上官の名はドンル